

---

# Legends of New Age ~ 新時代の伝説たち ~

今尾実花

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Legends of New Age 新時代の伝説たち

### 【Nコード】

N3453G

### 【作者名】

今尾実花

### 【あらすじ】

《第二部》 隠されていた秘密を知ったアルフォンスたちは、新たな旅立ちを迎える。扉をくぐり、世界を巡る！

## 彼らは集うへき

アイルで仲間と別れてから一月半。ルゴルス村に帰ったアルフォンスは修行のため、神殿にいた。全ての始まりである剣が眠っていた、あの神殿だ。

神殿を修行場所として選んだのはエルネストだ。人気がないため雑念にとらわれない、修行に最適な場所として。

神殿はあの時入った奥の間以外にも部屋はたくさんあって、三月を過ごすのに不自由はなかった。

そうしてアルフォンスはエルネストの指導の下、着々と力をつけていた。

「エルネスト様、今日もよろしくお願いします！」

「では、気術の復習からじゃ。やってみなさい」

「はい！」

アルフォンスは剣士以外でも職の指導を受けたことはないが、間違いなくエルネストは一流の指導者だと実感していた。

老齡だが、エルネストは無駄な動きをしない。同じ修行内容をこなしても、大抵はアルフォンスが先に音をあげる。そして的確な指導を行い、アルフォンスの不安を優しく拭いさつてくれた。

また剣術以外にも、基礎だが特殊力と気術の扱いも指導してくれた。それは剣術に応用することはもちろん、鋭敏になったアルフォンスの感覚を生かすために必要なものだった。

「よし、ではそこまでにしよう。休憩を挟んで、剣術の稽古に移る」  
「はい！」

あの日、賢者に送り届けてもらった後。アルフォンスはルディッ

クを孤児院に向かわせ、一人でエルネストのもとに走った。

再会したエルネストはアルフォンスの成長振りを素直に喜ぶと同時に、謝罪した。

「何も力になってやれなくて済まなかった」

しかし、アルフォンスは笑顔で言った。

「何も知らなかったから、たくさん驚いて、たくさん楽しみました」

と。その言葉に、隠者エルネストは落涙した。

神殿で迎えた、初めての夜。エルネストは自分が知る限りで、アルフォンスの両親のことを話してくれた。

「父親であるテオは、僕の弟子じゃった。お主に良く似た、真っ直ぐな瞳の青年じゃった」

今から三十年ほど前のこと。一人の旅の剣士と、出掛け先の町で出会った。

青年の名は、テオドル・ロッテカルド。快活で優しい、とても人から好かれる青年だった。

親を亡くしたために家を失い、居場所がなくなったから旅をしているというのに、青年は世を悲観するどころか楽しんでいた。旅は楽しい。新しい発見ばかりだ、と。

青年はエルネストの剣士の階級を知ると、迷わず弟子入りを志願してきた。エルネストは一年も組合の用事でルゴルスに戻れないため、暇潰しも兼ねて引き受けた。もちろん、指導に手抜きはしなかったが。

「一年の修行の後、テオは一人前の位を得た。その報せをもって、

一度は別れたんじゃ」

数年後、ルゴルスにふらりとテオドルがやってきた。アスケイル王から許可が下り、獣界に渡ると報告するために。

テオドルはいつの間にか、剣士を修めるほどの実力者となっていたのだ。

そして一泊だけ教会に宿をとると、獣界に向かうため、テオドルはジーパーへと旅立っていった。

「そして次に再会した時は……。お主を抱いて、瀕死の重症を負っておったのじゃ」

「……」

「外傷だけでなく、気力も特殊力も……。身体の内側からボロボロじゃった。それでも命尽きるまで、お主のことを案じておった」

「……！」

「この子は自分と人王の子だ、生まれたことは誰も知らない。どうか匿ってくれ、と」

堪えることなど出来なかった。アルフォンスはぶわりと、涙を溢れさせた。

「治癒は、シャルーラン殿と協力しても間に合わなくて……。テオは亡くなった。僕はシャルーラン殿と相談して、お主をこの村で育てることにしたのじゃ」

涙が、止まらない。

父さんは僕を愛してくれていた。エルネスト様も父さんごと、僕を想ってくれていた。

恐らく他の世界、界王の間にも渡っただろう。ならば自分は、親子二代で同じ道を歩むというわけだ。

（見ててね、父さん）

何も思い出を築けなかったけど、同じ道を歩むから。父さんが見たものや感じたことを、自分も確かめるから！

「実はな、院長のローラには真実を話しておる。何せテオが形振り構わずにやって来たからの、大騒ぎじゃったんじゃ」

涙を流し続けるアルフォンスに手巾を差し出して、エルネストは窓の外に浮かぶ月を見上げた。

「ローラはお主を他の子供と区別せず、健やかに育て上げた。いやはや、子育てなんぞしたことのないジジイには何よりじゃ」

茶目つ気たつぷりに言うエルネストに、アルフォンスは思わず笑ってしまった。

自分を氣遣ってくれているのが分かり、とても嬉しかった。

「父さんは……。何で死んだんですか？ ……やっぱり、誰かに殺されたんですか？」

「……それを知ってどうする？ アルフォンスよ」

未だ止まらない涙のために顔を赤く腫らしながら、アルフォンスは尋ねた。

「……。どうも、しません。ただ、怖いから、知りたいんです」  
「怖い？」

「はい。このままじゃ、恨んでしまう。何もかも、みんなみんな憎んでしまう……！」

リネアを傷つけたように、幻影族やその仲間なのか。それとも、他にいるのか。

知ったことで、相手には確実に恨みを抱くだろう。けれど、その対象だけに真っ直ぐ、迷わずにぶつけられる。恨みも、何もかも。

「だから、知りたいんです」

「……。良からう」

エルネストは席を立つと、備え付けられていた本棚から一冊の本を持ってきた。かなり古いものだ。

標題は『世史』。

「あれ？ 神官様、これ、間違ってますか？ 『界』が抜けてますよ」

「いいや、間違っておらんよ。『世史』とはこの世の歴史。つまり、全世界を指したもののじゃ」

「そんなものが……！ けど、何でそれを今……？」

「これは国の興りなどではなく、代々の界王やその血族について記したもののじゃ」

パラパラと中を捲り、目的の頁を見つけたのだろう。それをアルフォンスに差し出してきた。

「『界王について』……？」

古い羊皮紙に記された文字を、アルフォンスはゆっくりと指でなぞり始めた。

『人王は金色の髪と浅葱色の瞳、紋様は鎖骨中央にもつ』

人王について書かれた項を見つけ、アルフォンスの指がとまった。無意識のうちに手で自分の髪を撫で付ける。

(……母さんの色)

続きには『金の髪は民ももつ色である』とあった。

(……そうか、金の髪だけじゃ判別がつかないんだ)

もし自分の髪が人族にない特殊な色だったら、リネアのように術で変化させなければならなかっただろう。

運良く他の証、瞳の色や紋様を持たずに生まれたため、周囲にバレなかったのだ。

アルフォンスはさらに文の続きをなぞった。

『人王は礎となる存在であり、四つ全ての特殊力を兼ね備える』

(……?)

内容は以前に賢者から聞いたものと同じだ。ただ、この書きぶりに何か違和感を覚えた。

しかしその違和感の正体がわかるはずもなく、アルフォンスは続きをなぞり続ける。

『要である人界は、他世界の歪みを正す場でもある。そのため人王は』

(……っ!!!)



その先を目にした途端、余りの衝撃で手に力が入り、もう少しで頁を破ってしまうところだった。

こんなに古い本だ、貴重なものに決まっている。そんなお仕着せの理由で理性を総動員しなければ、破り捨ててやりたいという思いを抑えきれなかった。

「『人王は この世が歪みし時、その身をもって歪みを正す役目を負う。それは本人ではなく、界王の間が時を判断する』……わかるか？ アルフォンス」

「……母さんは、この通りになったんですね」

「そうじゃ。そしてテオの話では、界王の間が『異物』としてテオを排除にかかった、と」

「異物……?!」

「……つまり、誰かがテオに手を下したわけではない。……テオは歪みに飲み込まれた、とでも言うべきかの」

ボロオロになったテオドールに『誰にやられた』と聞いた時、泣きながら答えたのだ。

『誰でもない。俺は血族じゃなかったから、弾かれたんです。あいつと……離れるしかなかった』

と。

「界王の間が弾いた？ 何ですかそれは!？」

「……俺はシャルーラン殿と、ある予測をたてた」

「エルネスト様！」

「聞くのじゃ、アルフォンス！」

初めて声をあげたエルネストに、アルフォンスは驚いて怒りも

吹っ飛んでしまった。

「……何、ですか。予測って」

「何故、全ては『分類』されるのか。何故『界王』が在り、その血族は絶大な力を持つのか。それをな、儂とシャルラン殿は常々話しておった」

代々の賢者と隠者が、この世の最大の謎と位置づけてきた命題だ。答えを知り得るのは『始まりの時』から、『世史』を始めとして全てを書き記している魔王のみ。

人王が『世界の礎』ならば、魔王は『知識の礎』。しかし、魔王は決して全てを明らかにすることはなかった。シャルランに決死の覚悟で我が子を託した、親友と認め合う当代魔王でさえ。

「テオの言葉、禁忌の子……。様々な事柄を総合して、行き着いた答えは一つじゃ。……この世は『生まれた』のではなく、『創られた』のじゃと」

「創られ、た……？」

神様に？ いいや、違う。そんな子供騙しな答えが待っているわけがない。

「あまりにも整然とした世に……。疑問を持ったことはなかったか？ アルフォンスよ」

エルネストの問いに、アルフォンスは頭がこんがらがって、何も答えられなかった。

（……僕はカミサマを恨むしかないのか）

両親を、仲間を傷つけた元凶は『創成主』。ああ、もう何が何やらだ。

「魔王様に会ったら……。教えて貰えますか？ カミサマのこと」「それはわからぬ。しかし、ご息女がおられる。可能性はあるじやろっ」

「そっか、リネアは次代の魔王様……ですか？」

「界王に子息がおる時は、代を譲るのが常じゃからな。但し、今回は特別じゃ。どうなるかは見当もつかん」

「……。わかりました。ありがとうございました、エルネスト様」

ようやく止まった涙を拭い、アルフォンスは立ち上がった。

「僕、馬鹿に生まれて良かったと思います。リネアやリューンみたいに頭が良かったら大変でした」

「アルフォンス？」

「話が大きすぎるんです。全部をきちんと考えると、頭がおかしくなりそうなくらい。だから……」

アルフォンスは手に持つ『世史』を見つめた。

もしかしたら、偽りが書かれているかもしれない。そんな馬鹿げた夢を見てしまう本を。

「だから余計なことは考えないまま、進もうと思います。父さんたちのことは……。もっともっと、色んなことを知ってから判断します」

小難しいことを聞くのはここまで。頭を使うのは自分の役目ではない。

だけど、いつかは直面する事態だ。

だから一つ一つ、経験しながら知っていききたい。今までのように、ゆっくりと体に染み渡らせながら。

「そうすれば、何か……。何て言うのかな。自分自身で納得しながら得た知識の上で判断出来るから……。きつと何を聞かれても、その答えには自信が持てると思うんです」

真っ赤に泣き腫らした顔で、アルフォンスはすっきりとした力オで笑った。

新たな旅立ちを迎えるために。

そうして今、アルフォンスは重厚感の溢れる扉が開いていくのを見つめていた。

初めてこの地を訪れた時の感動は、今も胸に残っている。朝日を浴びて輝く、この古の王都を守護するものたち。

（僕が一番乗りかな？）

さあ、みんなは今、どこにいるんだろう。

朝一番で入都したアルフォンスはそこまで考えて、はたと気がついた。

（細かい集合場所と時間、決めてない！）

何となく朝一でやって来たのだが……。

何てこった。いくら気術の稽古を積んだとはいえ、基礎の基礎だけだ。セルグヤリネアように、人の気配を読むことは出来ない。

（……。うん、セルグたちが僕を見つけてくれるよ！）

アルフォンスは早々に探すのを諦め、二度目の王都観光に勤しむ

ことにした。

日の出から少し経ち、まだ人通りが少ないが、流石は王都だ。すでに多くの店が店を開いていた。

「すみません、これ下さい！」

「毎度あり。今日最初のお客さんだ、おまけしときますよ」

「わ、ありがとうございます」

湯気の立つ暖かな食事を、アルフォンスは掻き込むように空きつ腹に納めた。アスケイル伝統の麺料理で、さっぱりした野菜の汁が絶品だ。

最後の一滴まで味わって一息ついたところで、果物をかじりながら次の店を目指した。

（こんな食い倒れ、獣界に行ったら出来ないしね！）

心残りは少しでもないほうがいい。……と、アルフォンスは自身に言い訳してみた。

だが暫くして、誰かが自分をつけているような気がしてきた。次第にそれは確信に変わる。

（どうしよう、セルグたちかな）

それが最高。せめてスリとかでありますように。そりゃ、嬉しくないが。

（幻影族……とかはあり得ないよね？）

もしそうなら最悪だ。一人で太刀打ち出来る自信などない。埒が明かないし、振り向いてみるか……。そうアルフォンスが考

えた時、背後の人物が動いた。  
間に合わない。

(　　!!　)

体を置いてきぼりにして、思考、恐怖だけが駆け巡る。

反応が間に合わず、首を締め上げられる。振り返った視線の先には。

「久しぶり！　元氣そうだなアル！」

「……セルグ!?」

自分を背後から羽交い締めにしたのは、セルグだった。

「こっそり近づいてやろうと思ったのによお。気付いたら、お前」

「何だセルグだったのかぁ……。ああびっくりした」

「ははっ、感動の再会だろ?　……それよりお前、何か変わったなへ?」

羽交い締めに使っていた手を離し、セルグは前に回って改めてアルフォンスを眺めた。

「何っーか……。大人になった、って言うのか?　いい力才になっただぜ、アル」

アスクガーデンにいと、出会ったばかりの頃を思い出す。  
あの頃のアルフォンスは、よく不安そうな力才をしていた。  
しかもその不安の原因は『自分自身』。どんなに親しくなると、決して他人には解決出来ないことだった。

そのため話を聞いてやるしか出来なかったのだが、その回数も旅

を続けるにつれ、少なくなっていくた。

そして今、その不安は微塵も感じさせない。

（何か得たんだな。自分を信じるために必要なモノを）

自分も負けていられない。

セルグは改めて、気を引き締めたのだった。

## 彼らは集う〈貳〉

二人でしばらく三ヶ月間のことを話していたら、アルフォンスがじつと自分を見ていることにセルグは気付いた。

「どうした？ アル」

「ねえセルグ、服の模様を変えた？」

相手の変化に気付いたのは、セルグだけではなかった。

二人とも長旅に備えて服を新調したのだが、セルグは今回も武闘家の証が描かれた服を着ていた。しかし、以前とその模様が微妙に違っていたのだ。

「おう。よく気付いたな。……昇級したんだよ、四位まで」

「えっ、本当！？ 凄いね、おめでとう！」

「……ん、ありがとうな」

「そっかー、セルグも一人前なんだね。もしかして昇級しないんじゃないかと……」

あれ？

（え、四位？ おいおい嘘だろちよつと待てえええ！！）

階級の表し方は『武闘神』などと言った職ごとの呼称と、『四位』などの位がある。位ならば上からの順位を示すのだ。即ちそれは。

「ちょ、飛び級！？ 七位から三階級特進じゃん！」

「その言い方やめろよ、何か殉職みたいじゃねえか」



「けど凄いよ！ セルグ、本当におめでとう！」

「まあ、力が欲しかったからな……。だから、昇級試験を受けることにしたんだ」

その言い振りに、セルグは自分自身では昇級に納得していないのだと気付いた。

やはりスードで思ったように、セルグは己を戒めることで責を負おうとしているらしい。

「……気術の達人の獣王様に会いに行くんだしさ。セルグの階級、絶対に役立つよ！」

（そのために、力を得てくれたんだよね。ごめんねセルグ。ありがとう）

「そうだよな。うん、さっさと俺がこの位に恥じない強さを持ちゃあいいんだしな！」

幼い頃、迷わず欲したように。あの衝動が蘇ったのだ。ただ、力が欲しい、と。

「セルグは間違いなく力になれるよ。みんなの力にね」

「……おう」

「あ、それと階級のことだけどさ、ちゃんと認めてもらった階級なんだから。あんまり気にしちゃ駄目だと思うな」

「そうだな。尽力して下さったお師匠に失礼だよな。よし、もうこの話はナシだ。他の奴等には内緒で頼む」

「うん！」

背後からセルグが近づいてきた時、何故、少しも分からなかった

のか。その理由が今、はつきりと分かった。

変わったのだ。セルグは変わった。成長、とは少し違う。セルグは力、権力とでもいうべきものに、良くも悪くも屈した。

その『力』を認めたセルグは、二度と『強さ』に夢見ることはないだろう。

「そう言えばさ、四位なら前に武闘大会の決勝で闘った人の階級だよね？」

「おう。あれは公式な大会だったからな、勝てたことが今回の昇級にかなり影響したぜ」

「そっか、やっぱり上位の人に勝つって凄いだね」

「あれは自分でも良くやったと思ってる。まあ二人の……、おっ！」

「リユーンとローザンだ！」

セルグが後ろを振り返ると、確かに並んで歩く二人の姿があった。以前の自分と同じく、初めての王都に感銘を受けているようだ。

ただ、二人はまだこちらに気付いていない。

（凄いな……。自分に気が向けられてなくても分かるんだ）

覇気は放たれるモノ。殺気は向けられるモノ。

生来の才能があれば、こうしたモノには訓練せずとも反応出来るという。

しかし自分に向かっていないモノを察知するには、相当な訓練そして相応の才能が必要だとエルネストは言っていた。

「もしかしてあいつら、シエルマスから一緒に来たのか？」

「きつとそうだよ。ローザンだけだと移動が大変だし。けど、何で？」

「いや、あの組み合わせって珍しいなと……」

確かに。言われてみればそうだ。

仲が悪いわけではないが、相性とでもいうのだろうか。のんびり屋のリューンとハキハキしたローザン。二人でいるところを見たことはない。

「精霊陣を使っても……。七日はかかるよね。少しは二人の距離も縮まったかなあ？」

「なあアル、その言い方って何か……」  
「？」

何がセルグの気に障ったのか分からず、訊ねようとしたとき、リューンがこちらに気付いた。ローザンに呼びかけ、こちらを指差している。

（ま、後でいつか！）

セルグも苦笑いしただけだったし、きつとまた変なことを言ってしまっただけだろう。

アルフォンスは質問を中断し、二人に駆け寄った。まずは感動の再会を果たさなければ。

「アル、セルグ！ 早めに会えて良かったわ。リューンに迷子探しの時みたく、術を使ってもらおうかと思ってたのよ」

「迷子って……。僕ですかやっぱり」

「あら、他に誰が？」

「……いませんすいません」

「ははっ、お前ら相変わらずだな」

「ですねえ。二人もお元気そうで何よりですよー」

合流した二人によると、やはりシエルマスから精霊陣で一緒に来たという。

「あたし一人なら、来るだけで一月かかったわ！」

「そりや大変だな」

「シエルマスで別れる直前、リユーンが言ってくれたのよ。だから一番近い陣で待ち合わせしたの」

「陣は自由に使用出来ませんからねえ。えー、ニーナはチルト派が契約を結んでいますから、大丈夫でしょう」

となれば、残るは。

（あつ、けどラルフのこと、リユーンたちは知らないんだ）

だから『ニーナは』なんだよな。

そこで八人目の仲間を紹介しようかと思ったが、アルフォンスは思い止まった。

（そうだ、三人にびつくりしてもらおう！）

この様子だとセルグは忘れていそうだし。  
アルフォンスは小さな悪戯を思いつき、再会の時まで口を閉ざしておくことにした。

セルグによれば、王都内に他のみんなの気配はないらしい。  
アルフォンスもリネアたちの界王力をひっそりと探してみたが、セルグの言う通り、付近には感じられない。ただ、確証は無いが。

（けどセルグがリネアの気配を感知失敗、ってことはあり得ないよなあ）

むしろ海の方こうでも正確に感知出来そうだ。

「えー、ニーナは陣を使った後、組合を頼って移動するでしょうし。となれば……西門からですかねえ」

アスクガーデンには三つの門がある。東西と南のそれぞれ、丁の字に大通りがぶつかる造りなのだ。

北には王宮があり、その背後には峻険な山々が天然の要塞となつてそびえている。

アルフォンスたちは現在、中心の道である南門から入って歩いていた。

「じゃあセルグ、しっかり探してね！」

「へいへい」

俺は探知機じゃねーよ、などとボヤきながらも、セルグは周囲にきちんと気を配っているようだった。

気術は攻撃、回復、防御、感知の四種に気を使い分ける。その中で、セルグは感知が一番得意だったが、今まで基礎以上の訓練はしていなかったらしい。

今はしっかりと修行を積んだため、今まで以上に感覚が鋭敏になっているのだ。

一行は、西門に向かって王都をぶらぶらと観光していたが、ふとセルグが既知の気を察したらしく、雑踏に目を向けた。

「お、ニーナが来たぜ」

その姿は初め、人波に紛れて見えなかったが、すぐにこちらに駆け寄ってきた。

笑顔で駆けてくるニーナ。その手には、見慣れない杖が握られていた。

「お久しぶりです！ あの、私、昇級審査に合格しました！」

「本当に？ おめでとう！」

「やったじゃない、ニーナ」

「はい！ チルト派では、一人前の位から杖を持つことが許されるんです」

嬉しそうに、尚且つ誇らしげに掲げるその杖は、リネアのものとかかなり作りが違った。

全体的に長細い十字の形をしているが、その交差部分を環が囲っている。特殊石は杖の先端ではなくその中央、十字の交差部分に嵌め込まれていた。

「この法石で私の力も強化出来ますし、これで少しはみなさんのお役に立てると思います！」

「ふふ。そうね、期待してるわよ、ニーナ」

「はい！」

お役に立てる。その言葉を聞いて、アルフォンスはあの砂漠での出来事を思い出した。

己の無力さを嘆いていた少女。自分は役立たずだと卑下していた。

（ニーナ……）

自分に出来ることを頑張る。それが『役に立つ』第一歩。

僕も君も、それに気付けた。だからもう、誰かと自分を比べるなんてしない。

アルフォンスはこっそりと、笑みを浮かべた。

「さて、後は賢者様御一行ね」

「もう日は高くなりましたが……。いつ頃来られるのでしょうか。私、つきり最後になってしまったかと」

「せめて日が昇ってるうちに来て欲しいよな」

「えー、リネアも居ますし、それは大丈夫でしょう。……きっと」

一段下がったリユーンの語尾に、一行の周囲だけズン、と空気が重くなった。

だって賢者様は『賢者様』だが、間違いなく『俺様』なのだ。しかも人として何かを逸した具合に。これは疑いようのない事実だ。

一方のリネアは、多少は傍若無人なところがあるが、あくまでも常識の範囲内だ。

これは絶対的な違いだった。

「リネアの良心に頼るしかない……。よね？」

「……だな」

「ま、まあ、大丈夫でしょ。クレアもしっかりしてそうだし」

「そうだね。あつ、そうだ！ ねえ、暇だしさ、武闘大会の会場に行ってみない？」

「そうそう。試合場は空中に浮いてるんだぜ」

「おや、それは珍しい。是非とも拝見したいですねー」

「じゃ、行ってみましょ！」

一行が会場に行くと、そこでは今日も別の大会を開催していた。入り口はあの時と同様に開放されていて、気軽に入場できた。

「へえ、あれね。凄いじゃない」

今日も空中に浮遊するあの足場は、決して不安定ではないが、落

ちる恐怖心が隙を生む。

経験者のアルフォンスとしては、二度と上がりたくない場所だ。

「魔力と……、妖力ね。あんな重そうなの浮かべるなんて、術者は大変ね」

「ですねえ。物質操作にはその二つが一般的ですが……。あれはお見事の一言ですよー」

一行が眺める中、試合は順調に進んでいく。今回は珍事が起こらずに済みそうだ。

「そう言えば、スードでもそんな風に言ってたよね」

まだ真実という光が、暗黒の雲に覆われていた時。あの時、ラルフは躊躇なく自分たちを葬ろうとしていた。

そこで妖力を駆使用するラルフに対し、リューンは密かに呪文詠唱を成功させ、その力を削いだのだ。『もう妖力で武器強化は出来ない』と言つて。

「だけどさ、解ないだよねー。それなら幻影族は何で人を操れるの？」

「うーん……。難しいですねえ。あえて言うなら、それは妖力よりも幻影族の特性……ですかねー」

「特性？」

「あ、それって人族以外が持つと言う、特別な力ですよね？」

「ふうん？ 初めて聞いたな」

「他世界と交流がない今は、噂の域を出ないでしょうねえ。ですが、私の職で交流は必須ですしー」

ふふ、と笑ったリューンは『特性』について簡単に説明してくれ



た。

特性とは民ごとに、特徴　髪や瞳の色、宿す特殊力といった絶対の違い　と同じくバラバラらしい。

しかし、特性が特徴に含まれない理由がある。それは絶対的な違いではない、と言う点だ。

「そうですね……。例えば、シェーマスでもルマの一族は、特に霊力が高いことで有名です。ですがローザン、決して霊力が高いとは言えない方も生まれるのではー？」

「ええ、そりゃあね」

「こういった『高確率で起こる出来事』、これが特性ですかねえ。特性が一つ、他世界の民は必ずありますからー」

「だけど全員が出来るわけじゃないし、宿す特殊力とは関係ない、ってこと？」

「ええ、ほとんどは」

「じゃあ少しは関係あるんだな。ったく、本当に特殊力はややこしいぜ」

「そのややこしい力を率先して研究してる職が、魔法使いよ。リネアはあの魔力がなくても、魔法使いは天職よね」

「言ってる！　クルツアータでも本を山のように読んでたしね」

「リネアさんは探求心と知識欲が旺盛ですものね」

暫く一行が歓談していると、大きな銅鑼の音が鳴り響いた。試合場に目を移せば、勝敗が決したようだ。

「いやー、あの時はびっくりしたよホントに」

続く審判の勝利宣言。重なる。あの時と。

「あー……。短気は損気、だよな。うん。気をつける」

「うーわ、あんたに一番似合わないわよ、その格言」  
「るっせ！」

「ほら、まただよセル……ん？」

アルフォンスは何かを感じ、会場の外を振り返った。

ああ、近い。

「賢者様たちだ！」

「では一度、会場の外に出ましょうか」

空から突然、人が現れたら騒ぎになる。そう思って一行は会場を出たのだが、そこで見たものとは。

「あれ？ ラルフ！」

何故カリネアたちと一緒に訪れた、ラルフの姿だった。

「お久しぶりです。此度は私も旅を共にさせていただくことになりました」

「あら、知らなかったわ。先に報せてくれれば良かったのに」

「これでスードでは、お二人も仲間が増えたことになりますね」

思わぬ人物の思わぬ登場に、セルグがビシ、と音を立てて固まった。

それを知ってか知らずか いや、ローザンは確実にわかって無視している。笑顔がにやけて、わざとらしい。

ただ、ラルフのことはみんな問題なく受け入れてくれたので、アルフォンスは一安心した。

残る問題は。

「あ……。セルグ、セル……。グ？」

「短気は損気短気は損気短気は損気短気は損気短気は損気短気は……」

「……」

何かブツブツ呟いていると思えば、セルグは『短気は損気』をまるで呪文のように唱えていた。

……いつそ哀れだ。

（まあ仕方ない、か）

三月振りに想い人と再会したと思ったら、何故か隣には予想外の男性の姿が。しかも一度は負けた相手だ。

ローザンたちのように『仲良く』というのは、すぐには無理な話なのだろう。

シャルーランは全員がいることを確認すると、人混みを嫌ったのか、挨拶も半ばで王都を離れていった。

「アルフォンス殿」

セルグに何も言えずに立ち尽くしているとき、呼び掛けに振り返ると、ラルフがいた。

「あ、久しぶり。さっきはびっくりしたよ。賢者様たちと一緒に来るなんて」

「アーサー様と賢者様はあれ以来、連絡を取り合うようになりまして。その時に賢者様からお声をかけて頂きました」

「そっか、ラルフは精霊陣もないし、移動はローザンより大変だもんね」

「はい。ですが賢者様のご都合とのことで、一月前アスケイルに入

国致しました」

「……。え？」

一月前にアスケイルに？

（……まさかその間、ずっと賢者の塔に居たんじゃ……。それっていわゆる『一つ屋根の下』ってヤツじゃんか！）

なんとなくだが、これは賢者様からセルグへの『挑戦』な気がする。何かとセルグが気にすることを仕掛け、その上でリネアへの対応を見る気なのだろう。

……ほら、だって早速反応してるしさ。

「おい、ちょっと聞きたいんだが……」

「はい、何でしょう」

聴力も抜群に優れているセルグは、しっかりとラルフの話を聞いていたらしい。目を游がせながらも、何とか平静を保ってこちらにやって来た。

「お前、一月……。アスケイルのどこに居たんだった？」

「？ 無論、賢者様方と一緒に塔で生活しておりましたが」

何でこんな質問をするんだろう、といった顔のラルフ（当然だ）の前で、セルグはしばし固まった。

これでもかと言うくらい、見事にカッチカッチに。

こんなことをしていると、みんなもこちらの様子が気になり始めたらしい。他のみんなと話していたリネアが声をかけてきた。

「セルグ、どうした？」

悔しさや羨ましさや妬ましさや羨ましさや、そんなのが色々な交ぜになってるんだよ、リネア。

そう言えたらどんなに楽だろう。

「い、いや。何でもねえ……っ！」  
「？」

どう見たって何でも『ある』のだが、リネアはリネアなので、それには気づかないようだった。

「……。ねえセルグ、ついでにもう一つ、追い打ちかけてやりましょうか？」

「何だよ、ここまで来たらそう簡単にはへこたれねえぞ」

「あら、よく言ったわね。だ・け・ど。リネア、修士になったんですって」

「……はっ？」

セルグだけでなく、アルフォンスの声も重なった。

「修士！？ リネア、ついに一位になったんだね！ おめでとう！」  
「ああ、もう気にすることを止めたんだ」

すでに五年前の時点で、修士になる条件は揃えていた。しかし幼くして修士になれば、否応なく人目につく。それは避けたかった。けれど、位という『力』は必要だった。

だから準修士の位は得たのだ。

「この頬の紋様……。最上級の魔法使いなら、その意味を知っている。けれど、もうバレてもいいと思った」

みんなが受け入れてくれるから。

「最、上級……。凄えな、本当に凄えよりネア。うん、オメデトウ……」

「ああ、ありがとうセルグ。セルグも昇級したんだな」  
「お、おう」

三階級特進は、素直に嬉しい部分もあったのだろう。それを越える偉業を成し遂げたりネアを前に、セルグはしょぼくれていた。

そんなセルグを半ば引きずるようにしながら、アルフォンスたちは王宮へと向かって歩き出した。

## 彼らは集うへ参

王宮の入り口までやってくると、リネアは謁見のための手続きを行なった。といつても門番に何か書類をみせ、一言二言の説明をしたただけだ。

それだけで門番は顔を真っ青にして、宮中に駆け込んでいった。

……書類に何が書かれていたのか物凄く気になったが、まあ賢者様の圧力に違いないと予想をつけ、深くは追求しないことにした。

「では皆様、こちらへ」

全速力で戻ってきたらしい案内役の兵士に連れられ、一行は王宮の奥へと向かった。

白木の宮は決して華美ではないが、所々にさり気なくも美しい彫刻が施され、調度品も互いの存在を邪魔しない、そんな最高級の品ばかり。何とも言えない、優雅な雰囲気漂っていた。

（これが国王様のお住まいかあ……）

村の学校で勉強した、歴史に名を残す宮を歩く、この喜び。旅に出て良かったと改めて思う。

「この先に陛下がお待ちでございます」

「あ、はい……っていきなり!？」

「では、私はこれで」

正にそそくさ、といった感じで兵士は足早に立ち去っていった。……護衛とか、しなくていいのだろうか。

「うっ、流石に緊張するなあ、やっぱり」

「あまり心配するな。気さくな方だ。ただ、アル……。まあ、頑張れ」

「え、何を？　ちよっ、リネア？！」

唐突な『頑張れ』の意味は不明なままに、玉座への扉は開かれた。アルフォンスはリネアの言葉に戸惑いつつも、とにかく室内に歩を進めた。

「久方ぶりだな、リネア」

「お久しぶりでございます、陛下」

王の間には只一人、唯一の人がいた。アスケイル国王、フレデリックだ。

年の頃は三十半ば、賢者とそう変わるまい。ただ、王には備わっていた。国民から敬われ、親しまれ、尊ばれるものが。

それはシャルランにはない、為政者の素質とも言うべきもの。

「今回は随分と急だな。しかもお前に連れがいるとは」

「……。それは、少し異なります」

「うん？　どういう事だ」

「師匠は参りませんが、彼らは私の『連れ』ではありません。『仲間』です」

「ははっ、そうか、それは悪かった。まさかお前が誰かを対等に扱う時がくるとは……。杖を送った甲斐があつた」

「……。その点は感謝しております」

「なに、気にするな。さて、そんなことより」

初めて会った王はどこか賢者様に似ているが、確実に何かが



違う。

アルフォンスは会話を半分聞き流しながら、そんなことを考えていた。

「君、名前は？」

「え」

すると、いつの間にか王は玉座を立ち、アルフォンスのところへやって来ていた。

「ア、アルフォンス・ロットカルドと言います」

「そう、アルフォンス君ね。可愛い名だ」

「はあ。有り難うございます……？」

自分の名前は古代アスケイルの英雄の名だ。間違っても『可愛い』名前ではない。

褒められたので一応の礼は述べたが、まさか王がこの名前の由来を知らないわけではないだろう。

と思つた、その時。

「君は可愛いね。どうだい、後宮に勤めないか？」

会心の一撃。

流石にネジが一本足りないと言われる頭でも、この言葉の意味は理解出来た。なにせ顎なんか持たれているのだ。

「……っ！？」

無礼も何もあつたものではない。

アルフォンスは王の手を振り払い、セルグの後ろに全速力で逃げ

込んだ。

「お、おい、アル？」

「リネア、リネアあーっ！！」

（頑張れってこういう意味かー！）

やっとリネアの真意が理解出来たが、頑張っでどうにかなるものではない。駄目なものは駄目だ。

「おや残念。嫌われたかな」

「あ、あの……。失礼ですが、陛下は王妃様も御子様もいらっしやいますよね……？」

「ああ、勿論だよ、可愛い僧侶殿。だが、私は『博愛主義』なのだ」  
「はくっ……」

王の思いもよらない返答に、ニーナが絶句した。

というより、室内が沈黙した。

沈黙を破ったのは、それはそれは深いリネアの溜め息だった。

「……奥の皆様にもまたバレますよ」

「『バラします』の間違いだろう。くそ、シャルランのやる……  
いやいや、賢者様も意地の悪いことをなさったものだ」

……ああ、なんだかなー。

（確実に素が出てるんですけど……）

理想と現実の違いがよく言っけどさ。これは違っだろ、これは。何かもう涙が出そうだ。

アルフォンスが脱力感を覚えたところで、王が再びこちらに向き直った。

「そうそう、私が『博愛主義』だということは、別に秘密でも何でもない。よって言いふらすも秘すも自由だ」

カツン、と靴音を立て、王はアルフォンスたちに一歩、近づいた。その表情、気配には、先程までの軽さは消え失せている。

「ただ、侮辱罪が適応されぬよう気をつけたまえ」

ニコリと笑うその顔に、暖かな優しさは微塵も感じられなかった。これが、王。

(……。予想外、ではあったけど……)

敬い、尊ぶ気持ちに変わりはない。貴方はやはり、僕たちアスケイルの民の王。

「さて、書類に署名をせねばな。まあ賢者様の推薦だ、全員問題無し。悔しいが」

「……。師匠に勝つのは諦めたほうがよろしいかと」

「ふん、私は簡単に諦めんぞ。ん？」

一枚一枚、王は署名をしつつ、簡易的な紹介文を元にアルフォンスたちの名前と顔を一致させていたらしい。しかし、七枚目で何故か手を止めてしまった。

(まさか)

その人物について賢者が書いた一文。ペンを持つ手が震えた。

「……陛下」

王はリネアの声にハツとした。

全く、本当に賢者には敵わない。まさかこんな隠し玉を用意しているとは！

（こんな立場でお会いするとは、夢にも思わなかった）

「いや、すまないね。流石の私も驚いてしまったよ。まさか天王の血族がいらしていたとは……。クレア様、知らぬ事とは言え、ご挨拶もせず申し訳ありませんでした」

以前シャルランがアルフォンスに跪いたように、王はクレアの前に迷わず屈した。

「どうぞお気になさらず。今はただの『クレア』ですから、リネアたちと同じように接して下さい」

「では、そのように。ジーパにも伝えておきましょう」

「ええ、お願いします」

「では……。リネア、いつもの部屋で待機している。ジーパへは王宮の特殊方陣で行け。そちらも手配しておいてやる」

「わかりました。では、御前を失礼します」

「ああ。……では、な」

リネアはここにきて、初めて王に頭を垂れた。その瞳には、確かな深い感謝の念。

退室時の礼など知らないアルフォンスたちは、とりあえず王にむかって頭を下げ、一人一人退室していった。

最後になったセルグが退出しようとしたとき、ちょうど王が書類を数枚、床に落としてしまった。

「どうぞ、陛下」

「すまないな、つい」

「いえ、お気になさらず……」

拾った書類を渡そうとして、セルグはふと王が持つ一枚目の書類を見た。

（あれは、クレアの……？）

自分の手にある書類には、アルフォンスとリネアの名前がある。

（あれ……？ 何かおかしくないか？）

「セルグ君」

「は、はいっ！」

「もう行きなさい。リネアたちが待っている」

「はい。あ、あの、失礼します」

「ああ」

セルグに閃きかけた何かは、王の声によって掻き消されてしまった。

「あ、セルグ来たよ」

「悪い、待たせたな」

王座の間を退室すると、廊下でアルフォンスたちが待っていた。

「セルグ、何かあったんですかー？」

「いや、出ようとしたときに陛下が書類を落とされたからな。それを拾ってただけだ」

「そうか。では行くぞ。部屋はこっちだ」

リネアの案内で　そう、王宮の中なのに案内役の一人も来ないままで、アルフォンスたちは目的の部屋に到着した。

「ここだ」

「……」

どこの大広間だ。

そうツツコミを入れたくなるくらい、案内された部屋は広くて立派だった。最早、賢者様とリネアは王族のような扱いを受けているらしい。

「あら、素敵なお部屋。調度品はシャルラン殿の好みね」

「はい、姉上。王が師匠に僅かも文句を言わせまいと……」

「それにしたって凄いだろ。どれも超一級品ばっかじゃねえか」

部屋を見渡したセルグが溜め息混じりに言葉を漏らした。恐らく桁外れな額が脳内の算盤で弾き出されていることだろう。

これで王宮に滞在するためだけの部屋なのだから、何かもう言葉もない。

「……所詮、お二人の意地の張り合いだ。気にするな」

「って言ってもねー。それにしても、何でアスケイル王はこんなに賢者様に対して意地を張るの？」

「それは私も不思議に思っております。そもそも、なぜ賢者様はアスケイルに留まっておいでなのでしょう」

ローザンたちの質問に、リネアはどう説明したものか、といったように苦笑した。

「まあ……。そうだな、王は師匠と同じ時期に魔法使いを修められた。それが原因だろう」

「えっ、それってさ……。もしかして、単なる対抗心……？」

「そうだ。王は師匠に敵わないことが悔しくて仕方ないらしい。……賢者になる前も今も、それは変わらない。だから師匠はアスケイルに住まわれ、お二人は気安い関係なのだろう」

「……？ それは、どのような意味でしょうか」

「『天才故の孤独と苦悩』って感じがしら？」

「そんなところだ。師匠は一度も口にされないが、王に友情を感じていらつしやるのだろう」

「そうだったんですね。アスケイル王も、賢者様をある意味『対等』とみていましたしねえ」

「成る程……。けど、賢者様も人間だなあって改めて思うよな、そんな話聞くとよ」

「ふ、師匠は私以上に人付き合いを嫌うからな」

リネアのその言葉に、アルフォンスはあの『賢者の塔』を思い出した。

あの辺鄙な山あい建つ塔には、先代の賢者は住んだらしいが、他の賢者は違う。他国に住んだり色んな国を巡ったりと、様々な話が伝わっている。

代々の賢者が、必ずしも人嫌いだったわけではない。

「そうだ。その杖ってさ、国王様から頂いたんだよね？」

「え、ああ、まあ……」

アルフォンスが発した何気ない問いに、珍しくリネアが言葉を詰まらせた。

「どうなさったんですか？ その、賢者様とアスケイル王がお親しいことはもう知っていますし……」

だから、ちょっとやそつとじゃ驚かないですよ。

そう言外にニーナは言ったのだったが、リネアはそれでも渋い顔をした。

「もらった時に何かあったのか？」

「まあ……な。その、王が師匠に意趣返しをするために、少し……」  
「少し？」

「……。いや、なんでもない」

「えーっ！？ そこまできたら気になっちゃうよりネア」

「……。気にするな。別に大したことでは……」

「なら話さないよ、リネア。……ねえ、リネア自身が関係してるんでしょ？」

「……。まあ」

言いたくない。

そう全身から拒否のオーラがにじみ出ているリネアだったが、助け船を出してくれる人物はいなかった。

「失礼するぞ」

「なっ、国王様！？」

そこに突然、アスケイル王がやってきた。どうやら陣などの準備が終わったらしい。



「呼んでいただければ、僕らが……！」

「なに、一日中座っているのも疲れるんだ。気にしないでいいよ、アルフォンス君。それより、どうしたんだリネアは？」

「……いえ」

王はその目敏さからリネアの雰囲気の変化を察知したらしく、入ってすぐに声をかけた。

「杖を陛下からいただいた時のこと、話してって頼んでいたんです。けど、何かあるみたいで……」

「ほーう」

アルフォンスの説明に、王は『心得たり』と言わんばかりの、意地の悪い笑みを浮かべた。

「リネア、お前にも可愛いところがあるものだな。幼い頃の話が嫌がるとは」

「……どちらかと言えば、年齢より内容が問題です。今でも後悔しています」

「ははは、それは結構。では旅立つ若者に、饞別がわりに昔話をしとやろう」

「王……」

「諦めるリネア。いいか、始まりは十年前だ……」

事の顛末を、アスケイル王が語り始めた。リネアが傍で殺気めいたものを放っていたが。

## 彼らは集うへ肆

『フレデリック、頼みがある』

そう開口一番に言った賢者に、十年以上も付き合ってきた数少ない友人　アスケイル王フレデリックは絶句した。

『頼み』なんて言葉を、まさか天上天下唯我独尊のこの男が言うなど、思いもよらなかったのである。夢かと思い、こっそり手の甲をつねってしまった位だ。

『な、何だ。今日はどんな無理難題をふっかけに……』

『魔精石が必要だ。特上で、大きさは短槍の刃に加工出来るだけ』

『んなっ……！』

魔精石と聖精石。魔力と法力を吸収して昇華する、世にも珍しい対なる特殊石だ。

通常の特特殊石でも高価なのに、滅多に産出しないこの二つは十倍以上の値がする。しかも質も大きさも揃った物となれば、年に一つか二つ、見つければいいほうだ。

そんな石を買うとなれば、賢者への贈りものであれ、流石のアスケイル王とて、その権力だけで押し通せるものではない。国家予算の内、かなりの額を注ぎ込む。そのため、また大臣たちと一悶着起こすことになるだろう。

『何だ今更、魔精石なんて　』

お前に必要ないだろう。そう言おうとして、フレデリックは気がついた。

（ 待て。もしかして使うのは、この傲岸不遜野郎じゃないのか？）

『……。リネアか』

『……。そうだ。昨晚、魔物が異常行動を起こしただろう。……目覚めたんだ』

乾ききつた賢者の声音に、フレデリックは一人の少女に想いを馳せた。

出会いは、二年前。

僅か六歳だというのに、その少女の瞳には、すでに王たる者の輝きが宿っていた。

この少女は、やがてシャルランさえ超える存在。

頬の紋様が示す真実や抑えきれない強大な魔力よりも、この俺様野郎が親代わりになって少女を育てているということよりも。その強い輝きはフレデリックの心を捉えた。

初めて 。この目の前の男が執着した、初めての相手。戸惑いなく、偽りなく『愛しい』という想いを告げられる、たった一人の。

『わかった。用意してやる。ただしそれだけの条件となれば、金だけの話ではなくなる。……そうだな。五年、待て。人界で最高の石を用意してやる』

『……。すまない』

『謝るな、気色悪い。どうせならリネアを連れてこい。あの子は最高の目の保養になる』

『……。ふ。まあこれだけの買い物だ。リネアもお前に懐いているし、近いうちに挨拶に越させよう』

『よし。ああ、それともう一つ。その時リネアを撫でたりしても文句言つなよ。仕返しも禁止。これが条件だ。どうだ？ とりあえず、間に合わせの石もすぐに用意してやる』

『……。約束は出来んが、努力はする』

『ははっ、お前にしちゃあ最大の譲歩だな。よし、アスケイル王国第二百二十代国王、フレデリック・ロム・アスケイルが成約しよう。いいな、シャルーラン』

『ああ』

「こうして五年後、まあ、今から三年前だな。その石を届けたんだ。いやあー、あの時のお前は随分としおらしくて可愛かったぞ、リネア」

「……」

「ははっ、お前の泣き顔なんてそうそう見れな……」

「話は以上ですか、陛下」

というより、それ以上言うな。

リネアから駄々漏れの殺気は、間違いなくそう言っていた。

「ふふっ。ねえリネア、賢者様がリネアを溺愛しているのは今更だし……。小さい頃は泣くのも仕方がないじゃない。そんなに嫌がるほどの話じゃないと思うんだけど」

「……。話し手が、問題なんだ」

ああ、そうだね。

全員が思わず口に出してそうになったが、それは何とか思い留まった。

「私は当事者だ。詳細を知っているのは当然だろう。お前が嫌がると思って、小さい頃の他の可愛らしい話はしないでやったというのに……」

「……陛下」

「リ、リネアさんっ！」

思わずニーナがしがみついたが、そうでもしなければ本当にリネアはアスケイル王に一発入れていたかもしれない。

それほどリネアは爆発寸前の『それ以上言っな』オーラを纏っていたのだった。

「なんだ、からかわれて怒るなんてお前もまだまだだな。可愛らしいが、少しはあの俺様野郎の凶太さを見習え。少しだけな」

「……っ」

見事にリネアを手玉にとるアスケイル王に、アルフォンスは心中で盛大な拍手を送った。だって凄い。凄すぎる。

（リネアが怒りと羞恥で顔を赤くしているのを見る日がくるなんて……！）

出会ったときから振り回されっぱなしの自分には、多分永遠に無理なことだろうけど。

次にアルフォンスは視線を右隣に向け、その幸せそうな頭の男をどうしようかと考え、何だかやるせない気持ちになった。

多分リネアのマル秘話を聞いて、その頃の様子に想いを馳せているのだろう。

「セルグ……」

「そうだよなあ、今もあんな可愛いし、小さい頃ってマジで天使みたいなんだろうなあ……。あー、一回でいいから見てみてえ……」

前言撤回。『幸せそう』じゃない。そんな程度は軽く飛び越えて、この男は今、確実に悦に入っている。

（いや異論はないけど、端から見たらただの変態だろ今のセルグ！）

気持ちとは分かる。同じ男だ、痛いほど分かる。だけど、ね？

「いてっ！」

「あ」

アルフォンスが今回も一発入れてやろうと思って足を動かした時、セルグは別の一発によって覚醒した。鈍い音がしたと思ったら、頭を押さえて呻いている。

「どうした？ セルグ君」

「あら、何でもありませんわ、陛下。ちよつとこの阿呆の頭に虫がいたのを取ろうとして、手が滑ってしまったんです」

おほほ、と扇で口元を隠しながらローザンはわざとらしく笑った。どうやらアルフォンスと同じようにセルグに呆れ、これまた同じように一発入れてやろう、と思ったらしい。

「ローザンさん、その、かなり凄い音がしたんですけど……」

「気のせい気のせい。ねーセルグ？」

「て、めえええっ。鍛えた武闘家じゃなきゃあ、下手すりゃ昇天してるぞ今の！」

「あら、ならセルグは鍛えてるし、問題ないってことよね」

「いや、そうだけど……って違うだろ！」

「何も変わらないわよ、結局は問題ないんだから。陛下、お騒がせしてすみませんでした」

「いやいや、気にしていないよ。それにしても、ルマの女性は強くて美しいな。アスケイルの民とはまた一味違うね」

少し涙目のままのセルグを放って、王はローザンを遠慮なく口説き始めた。

ただ、ローザンは見事にかわしているが。

「ちつくしょう……」

「あはははは、悦に浸ってたセルグがいけないんだよ」

「あのなあ、俺は！」

「セルグ、大丈夫か？」

「うっ」

これぞ正に怪我の光明。呻くほど痛がったセルグを心配して、リネアが声をかけてきたのだ。

「も、勿論大丈夫だ。コブくらいはできるだろうけどな」

「そうか。頭は油断すると大変なことになる。何か異常を感じたら、すぐに言ってくれ」

「おう」

（……あー、お花が飛んでるよセルグの周り……）

もしかして殴られた痛みなんて、この嬉しさで全部吹っ飛んだんじゃないだろうか。

それくらい、セルグは満開の笑顔だった。

「アルフォンス君、アルフォンス君」

「へ？ ……あ、クレア」

幸せそうなセルグの邪魔はすまい、と数歩下がった時、アルフォンスにクレアが声をかけてきた。

「セルグ君ってリネアのこと、愛してくれているのね」

「まあ、見ての通りだよ。リネア以外には一目でわかるくらい一直線」

「そう。……良かった」

何とも言えない、優しい表情で微笑むクレアを見て、本当にリネアを慈しんでいるのだな、と思った。

「セルグ君は、大きな人ね。数限りない障害も……何も気にせず、リネアだけを見てくれている」

「……うん。あのね、アレは出会った時からなんだよ。いやあ、あの硬直具合は見事だったなあ」

「まあ、一目惚れなの？ ふふ、まるで物語みたいね」

「いや、リネアがお姫様なのはいいけど……。セルグは、ちょっと」  
「あら。主役がお姫様と王子様である必要はないと思うわ」

「そうかな？」

「ええ。物語に必要なのは、困難も物ともせずに愛を貫くか否か。それだけよ」

「愛、を……？」

「家族愛とか、友愛とか、その形は様々でしょうけど。私はそう思うわ」

「……。そう、だね。ただ、やっぱりセルグは主役をはれる気がしないんだけどさ……」

「あらあら。そうね、この物語の主役はアルフォンス君だものね」  
「え？」

「これから先、界王の血族であるために起こる問題が、必ず出てくるわ。だからリネアのこと、よろしくね。私も力になりますから」  
「……。うん」



はぐらかされた気がしたが。アルフォンスは素直に頷いた。クレアは暗に『血族の問題で困ったら自分を頼れ』と言ってくれたからだ。

「さて、話が長くなってしまったな」

ローザンは落とせないと諦めたのか、アスケイル王が話を打ち切った。

「こちらの準備は万端だ。さあ、方陣の間に案内しよう」

アスケイル王を先導に、一行は王宮の北西にある離宮へやってきた。

「これは……。転移方陣を敷くには素晴らしい環境ですねえ」  
「だろう？ そのためだけに造られた宮だ。そうでなくては意味がない」

リユーンが感嘆の声を漏らした宮は、静寂に包まれていた。まるでこの会話の音さえも吸い込んでしまいそうな、無音の空間。王宮の中心部も決して騒々しいわけではなかったが、ここは別世界のように静寂に満ちていた。生命の鼓動が何一つ感じられないのだ。周囲には草木さえなく、白く美しい小石が敷き詰められている。それに離宮は通常、木の渡り廊下で王宮と結ばれているが、この宮だけはわざわざ地面に降り、敷石を渡った。それもこの宮だけ『遮断』されているという証拠だろう。

「入りましたえ」

宮の入り口で王がそう告げる。すると、何と扉が独りでに開いた

ではないか！

（ええーっ！？）

何かの術か、とアルフォンスは思ったのだが、一步宮の中に入った途端、さらに驚くことになった。

（ひ、人がいる……！！！？）

まさか、嘘だろ。

アルフォンスはなまじ気配を読む術を鍛えただけに、全く分からなかったのは、かなり落ち込む事態だ。と言うかへこむ。

扉を開けたのは、間違いない扉の側に控えていた人たちだ。彼らは一様に布を目深に被り、床まで届く長衣を身に纏っている。

「どうかなさいましたか？」

「あ、ラルフ。ラルフはこの人たちの気配を読めた？ 僕、全然わからなくて……」

「ああ、はい。私はわざと抑えている気配には、特に敏感ですので、お二人も同様でしょう」

ラルフの視線を辿ると、確かに気配に敏いセルグとリネアは驚いていないようだ。

「どうぞこちらへ」

そこにドキリとするくらい、か細い声が聞こえた。

その声は、宮仕えの一人が発したらしい。背丈からして男性だろう、その人が奥に案内するような仕草をした。

「ついてきたまえ。この奥がジープへの方陣の間だ」

壁に揺らめく灯火が、幻惑的な雰囲気醸し出す。  
到着した部屋には、精霊陣そっくりの方陣が床に描かれていた。  
四方には術者だろう、この宮に仕える人の中でも、特に強い霊力  
を持った人たちが控えている。

「どうぞ、陣の中へ」

「はい」

男性に導かれ、アルフォンスたちは方陣の中に足を踏み入れた。  
何度も精霊陣を使っているから、転移方陣への恐怖はない。けれ  
ど、この陣の先、ジープには。

（扉が、あるんだ）

「さて、ではここでお別れだな」

アスケイル王の言葉に、アルフォンスはハッとして振り向いた。

「向こうでも方陣の中は、まだアスケイル領だ。いわゆる飛び地だ  
な。まあ、上手く使え」

何かあっても、守ってやるぞ、と。王はその思いを言葉に託した。

「全員、無事に生きて帰って来い。それが陣を使うための条件  
だ」

こんな間際になって、王はそんな 易しくない、優しい条件を  
出した。

本当は飲むべきじゃない。未来の約束なんて出来やしないから。だけど、こんなにも優しい束縛だ。だから、喜んで受け入れる。

「はい！」

「うむ、いい返事だ。そうだ、リネア。お前に言っておくことがある」

「……はい」

「人界に帰って来たら、必ず顔をだせ。シャルランのときより先にだぞ」

「……」

王に何を言われたのか、リネアは咄嗟に判断が出来なかったらしい。珍しく、ぽかんとした顔を見せた。

「お前の帰りを待っている人間は、お前が思う以上にいるんだ。いいな？」

「……！ はい、陛下。必ず」

思わず零れそうになった涙をこらえ、リネアは王に頭を下げた。まるでもう二度と会えぬ今生の別れのように、深く、ゆつくりと溢れ出す感謝の念を示すために。

「陣を作動させよ！」

王はリネアを愛おしそうに見つめながら、術者たちに合図を出した。その合図とともに、陣に莫大な霊力が注ぎ込まれ始める。陣の中と外を区切る境界線が、一気に眩しい光を放ち出す。

「転移！」

術者の掛け声とともに、アルフォンスたちは王の目の前から姿を消した。

「帰って、来いよ……」

ポツリと、王が零した。

愛しき我が娘。私はそう思っていると、教えてやるから。

やがて激しい光が収まると、アルフォンスたちはアスケイルに良く似た けれど、違う場所にいた。

深く頭を垂れ、一人の女官が一行を出迎える。

「お待ちしておりました。ジーパに、ようこそ」

## 月の宴をへき

アスケイルと同じ瓦葺きの屋根に、木造の宮。

ここが、ジーパ。小国ながらも数千年の歴史を持つ、世界最古の国でセルグの故郷。

「では、此方へ」

案内人であろう女官の指示に従い、アルフォンスが陣を出ようとしたとき、セルグがそれを慌てて止めた。

「え？」

「ちよつと待てつ。」

女官殿、申し訳ありませんがしばしお待ち

を！」

「……。かしこまりました。では廊下に控えておりますので、御用がお済み次第、お呼び下さいませ」

突然の申し出にも驚くことなく、女官はセルグの言葉に頷き、部屋を出ていった。ただ、何か含みがありそうだが。

「どうしたのさ、セルグ？」

「いいか、『ここ』はまだアスケイルだ。ジーパの法は適用されない。だから何かやらかす前に、重要なことは話しておく。聞き漏らすなよ」

「う……ん」

珍しく真面目な表情をしたセルグに、アルフォンスは何も言えなかった。

「いいか、まずジープは室内で土足厳禁。建物の中は絶対に靴を脱げ」

「ええっ!？ ちよつ、今、靴……!」

「だから、『ここ』はまだアスケイルだからいいんだ」

そう言つて、セルグは靴を脱いで手に持った。

「何か、妙な感じがしますねえ。建物の中を、靴を脱いで歩くのは初めてですよ」

「だろ？ 俺は逆にジープを出たとき、靴を履いたまま家で過ごすつてのに驚いたけどな」

「けどさ、さっきの女官さんも言ってくれば良かったのに」

「……ジープは、そういう国だからな。こっちからは何も言わず、相手の出方を見て人を判断すんだ」

「はあ？ ちよつと、何よその陰険なやり方!」

「口を慎め、ローザン!」

思わぬセルグの一括に、ローザンも驚いて押し黙ってしまった。

「いいか、『ここ』はアスケイル領とは言え、もう大内裏 アスケイルで言う王宮の中だ。天子様の居わす御所近くなんだぞ、不遜な物言いはするな!」

いつもの飄々としたセルグと全く違う物言いに、全員が暫くポカン、としてしまった。

ローザンを注意したことより、その言い方が信じられなかったのだ。いくら故郷の君主のこととは言え、まさかこんなに激昂するなんて。

段々と思惑力が戻ってきたローザンは、怒りに身を奮わせた。

「な、何よ！ 大体あたしは権力者なんて ！！」

「ローザン、落ち着いて下さい」

「止めないでよりユーン！」

「ですが……。えー、ジーパの国民は、古来より君主への忠誠心と畏敬の念が強いので有名ですしー」

「だからって……！」

「そうですねえ、先ほどはセルグが強く言い過ぎたと思いますよー。ですが、郷に入れば郷に従え、です。まず尊重すべきは、相手の文化ではありませんかー？」

「……。そう、ね。そうよね」

「……。あの、悪い、ローザン。俺もついカツとなっちまって……」

「うっん、いいのよ。で？ 他に気をつけなきゃいけないことは？」

「お、おう。あのな ー」

いつもの調子を取り戻したローザンに、セルグも安心したらしい。激昂した時の気迫が嘘のように、いつもの穏やかな雰囲気に戻った。

「まず、ジーパの君主は『天皇陛下』で、ジーパ以外にはない尊称だな。『国王』じゃないぞ」

セルグの話を聞きつつ、そういえばセルグはアスケイル王にもいつもとは違う、畏まった物言いをしてたな……。とアルフォンスは思った。あれは自国で君主への対応の基礎が、出来上がっていたからなのだろう。

「え？ けれどセルグさん、先ほどは『天子様』と言ってましたよね」

「あ、それはな、ジーパ特有の尊称方法なんだ。ジーパじゃ対象が高貴な方の場合、本来の御名を呼ばず、違う呼び方をするんだ」

「んー……。ごめんなさいセルグ、やっぱりその感覚ってわかんない



いわ」

「そりや仕方ねえよ。ま、大抵は天子様が主上とお呼びするもんなんだ。よろしく頼むぜ」

「分かったよ。他には？」

「そうだな……。あ、そうだ。さっきお前『女官さん』って言ったよな？ あれもやめろ。あと、会話は必ず身分が上の方からだ。基本的に、大内裏の中じゃこっちから話かけるな。そしていいと言われるまで顔は伏せておけ」

「わ、分かった」

「それと……」

「わーもう無理！ もう覚えられないー！」

ここに来て、遂にアルフォンスの頭が容量を越えてしまったらしい。

アスケイルの王宮では予想外に自由に振る舞えた分、礼儀や作法といったものへの緊張が爆発したのだ。

「安心しろ、これで最後だし簡単だから」

「うう……」

「ジープじゃ椅子はほとんど無い。床に座るんだ」

「床、ですか。それはまた……」

「円座とか畳とか、席はきちんと用意される。流石に床に直接じゃない。で、問題は座り方な」

「あら、何か大変な座り方なのかしら。セルグ君」

「まあ、な。正座って言うんだ。えーと、こう、座る」

セルグは陣の中央で、床に両足の脛を真っ直ぐにつける形で腰を下ろした。

「慣れてないとキツイぜ、これ。ま、すぐに足を崩していいって言

われるだろうけどな」

立ち上がりつつ苦笑したセルグが、一同を見回し、頭を下げた。

「色々が決まりがあつて大変だろうけど、我慢してくれ。ジーパはこうして何千年も保つてきたんだ」

「……あんたが謝つてどうすんのよ。ただし知らないことには対応出来ないから、ちゃんと教えなさいよ？」

「おう。じゃ、行こうぜ」

「うん！」

セルグが廊下にいる女官を呼ぼうと振り向いた途端、なんと彼女は呼ばれる前に室内へ入ってきた。一行の話をずっと窺っていたのだろう。

（そっか、だからセルグはずっと言葉に気をつけてたんだ）

対象が自分たちではないとき、常にセルグは敬語を用いていた。もちろん元来の忠誠心などもあるだろうが、女官が聞き耳を立てているのを見越してのことだったのだろう。

「では皆様、此方へ」

女官に先導され、アルフォンスたちは部屋の外に出た。そこで宮仕えの少年たちに履物を預ける。方陣が置かれていた建物は、アスケイルとおよそ同じ造りだった。命の鼓動無き、静寂の離宮。

ただし本殿とは敷石ではなく、簡単に取り外しが出来る渡し板が架けられていた。他の建物同士は、きちんとした渡り廊下で繋がれている。

（ここがジープの王宮……、ええと、大内裏、か）

陣を出ると、途端にセルグの気が張り詰めた。

自分がアスケイル王宮で感じたものと同じ、いや、それ以上のものを感じとっているに違いない。

大内裏は第一印象と違い、中はアスケイルの王宮とかなり造りが異なっていた。

決定的な違いとして、ここは全てが平屋建てなのだ。かといって地面に直接床が接しているのではなく、床下に人が潜り込めるくらいの隙間がある。

セルグ曰わく、これは湿気対策らしい。夏の蒸し暑さは地獄のようだと言うが、その不快感は北国育ちのアルフォンスには、どうもピンと来なかった。

やがて離宮から渡り廊下を二つ渡った建物の一室で、女官が足を止めた。

「この奥にてお待ち下さいませ。日嗣の御子がいらされます」

「……！！？」

ヒツギノミコ、って誰だろう。

アルフォンスなどは呑気にそう思ったが、セルグはあまりの出来事に絶句し、真っ青な顔で口をパクパクさせていた。

（リネア、リネア！）

（どうした？）

（ヒツギノミコ、って、ええと……。どんな身分の方、なの？）

慣れない敬語に四苦八苦しながら、アルフォンスは咄嗟にリネアの袖を引いた。

（日嗣の御子は、天子の位を継ぐ者の尊称だ。つまり、ジープでの王太子殿下だ）

王太子殿下！

成る程、それではセルグがああなるのも仕方あるまい。

（確かジープの君主って神様の子孫、って言い伝えがあるんだよな）

それを頭から信じているわけではないだろうが、あんなに激昂するほどの想いをセルグたち、ジープの人々は君主に抱いているのだ。そんなセルグが、次代の天皇陛下に会うのだ。その胸中は如何ほどか。

薙戸という、上に開く珍しい扉をくぐり、アルフォンスたちは部屋に入った。

ここがどんな建物の、どんな部屋なのかは説明されていないが。奥行きのあるこの部屋は、王座の間と同じく、面会用の場なのだろう。奥に見える一段高くなった席に、ヒツギノミコが座るに違いない。

「しばしのお待ちを」

女官はそれだけ言い残すと、早々に部屋を退室してしまった。

残された面々は、何とも言えない微妙な空気が漂った。

何せこの国の事情に一番詳しいセルグは、用意されていた席板敷きの床に置かれた、緑の草で編まれた長方形のものに座ったまま、顔を伏せぎみにして微動だにしない。そのため、何か話すのも憚られる雰囲気だ。

仕方なくアルフォンスたちは席に座ったが、セルグが言った通り、正座という座り方はすぐに足が痛くなってきてしまった。

（や、ヤバいだろこれ……！）

でもこれが作法だしヒツギノミコはすぐに来るだろう、いや、すぐ来て下さい！

もう駄目だ。アルフォンスの頭がグルグルと回り出したとき、シヤーン、と綺麗な鈴の音が響き渡った。

同時にバツ、とセルグが平伏した。

（入室の合図！）

誰も何も言わなかったが、みんなも気づけたようだ。今回も見よう見まねで礼をした。

やがて奥の簾が巻き上げられ、衣擦れの音とともに誰かが入ってきた。仄かに涼やかな薫りもする。香の薫りだ。

「面をあげなさい」

静かで、それでいて強く、柔らかな。発したのは、あの奥の席に座った一人の男性。

アルフォンスたちは『顔をあげる』と言われたのでそうしたのだが、セルグは床に擦りつけるくらいにした頭を、まだ上げていなかった。

（えっ、もしかして上げちゃいけなかった！？）

けどセルグも『顔を上げると言われるまでは』と言っていたし、いいんだよね……？

アルフォンスのそんな不安を読み取ったのかは分からないが、日嗣の御子はもう一度その言葉を、今度は彼の言葉で述べた。

「顔を、上げて。そのままでは話がしにくいから。レナード家の」  
「……！」

驚愕の面持ちで、セルグは顔を上げた。まさか自分の家名を呼ばれるなんて思いもなかったのだろう。

「では、ご挨拶といきましょう。はじめまして、私が日嗣の皇子です。他にも呼び名はありますが、アスケイル風に言えば王太子ですね」

ジーパに古来から伝わる衣装を身に纏い、柔らかに微笑む日嗣の皇子。年の頃はリユーンと同じだろうか。

「どうぞ、足を楽にして下さい。みなさんには慣れないことで大変でしょう」

ほっ、と安心の溜め息を誰かが漏らすのが聞こえた。セルグも二度も逆らうのは良くないと思ったのか、正座は崩さなかったが、足を少し横に動かした。

そのことは日嗣の皇子も良しとしたのか、話題にすることなく次へと進んだ。

「本来ならば父である主上がお相手するべきなのですが、運悪く昨日より物忌みでして……」

返事を、すべきだ。そう思ったが、誰がどう言うか。その逡巡で、思わぬ間が出来てしまった。

「……恐れ多いお言葉でございます。若宮様にそのようなお言葉をいただきましたこと、恭悦至極に存じます」

「おや。レナード家の、そんなに畏まらないで。今は私たちだけのだから」

「は、しかし……」

「せっかく人払いをしたんだ。主上が物忌みで籠っているからこそ、私はこうしていられる。……外の話、君たちの言葉で聞かせておくれ」

彼もまた、賢者のようにその特別な立場ゆえに、孤独なのだ。それを感じ取ったセルグが、何を思ったかは分からない。

「はい。若宮様」

ただど何かを吹っ切ったセルグの力強い笑みに、日嗣の皇子は破顔した。

「そうですか、みなさんは本当に大変な旅をしなければならぬいのですね」

日嗣の皇子　今は若宮様と呼んでいる　の頼みから、アルフオンスたちはこれまでの旅路と、これからのことを思い思いに語った。

若宮は時に為政者の、時に若者の問いを投げ掛けながら、その話に聞き入ったのであった。

「やはり無理を通して良かった。アスケイル王の強い推薦でしたから、これは良き御仁が来るのだらうと思ったのです」

「国王様は……、その、僕らのことを何て言っていましたか？」

「みなさん一人一人のお人柄を、アスケイル王の率直なお言葉で書かれていました。ですが、これは国政にも関わること。残念ながら、詳細を申し上げる訳には参りません」

「あ、そうか……。すみませんでした」  
「どうかお気になさらず。それと、賢者様からの推薦状もお預かりしています」

若宮のその言葉に、リネアが反応した。

「……若宮様」

「主上と私以外は見ておりませんし、見せることも致しません。……このような立場ゆえ、全てを口に出来ませんが……。貴女に光が見つかるよう、祈っております」

「……。ありがとうございます」

居住いを正したりネアが、深く頭を下げた。禁忌の子であることを厭わない、心優しい若宮に。

一息の間が空いた後、若宮が静まった雰囲気仕切り直すかのような明るい声で言った。

「さて。あなた方になら、言ってもいいでしょう。獣界への扉は、レント県の山中にあります」

「……。レント県、ですか……」

「ふふ、やはり運命なのだろう。そなたが扉をくぐるのは」

「え？ セルグ、どういう意味？」

「……俺の実家、レント県なんだよ」

「ええっ！？」

まさかそこまでの一致があるとは思わず、アルフォンスは驚きの声を漏らした。

しかし、他の面々は『やつぱり』とか『だろうと思った』など、さほど驚いた様子は見せなかった。



(……え、何で?)

「だって、そんな気がしたのよねー」

「ですよねっ！ 私もそうだったら凄いなあって」

「……では、セルグ殿のご実家に寄ってから扉に？」

「ちよっ、それ止める！」

「おや、どうしてだい？ 親御に顔を見せてあげればいいだろう」  
「うっ……」

「そうですよー、位も上がったのですし。いい機会ではありませんかー」

「うっ……」

「セルグさん、どうして嫌なんですか？」

部屋中の視線がセルグに集まる。だが、セルグは押し黙ったままだ。それは。

(『坊っちゃん』って呼ばれるのが嫌だから、なんて言えるかああー!!)

自分はもう十八、いつまでも子供じゃない。けれど隊商の奴らは自分を『坊っちゃん』呼ばわりする、その確信があった。

百歩譲って、親になら子供扱いされるのは見られても いや、  
やっぱりそれも嫌だ。

「セルグ、僕は帰ったほうがいいと思うよ？ だって、この三月でも里帰り、してないよね？」

アルフォンスに言葉を返そうと、改めて向き直ったところでセルグは動きを止めた。

まるで稲妻が走ったが如く、それはセルグを襲ったのだった。

（俺は、何を悩んだ……？）

親や隊商の奴らに子供扱いされる、それは愛されている証拠じゃないか。なんて贅沢な、満たされた者の悩み。

両親を知らない仲間もいれば、幼い頃に失った仲間もいる。

（こいつらの前で、一体俺は何を悩んだ……！）

「……そうだな。いい機会だ、寄っていくか」

「うん、それがいいよ！」

まるで自分のことのように喜ぶアルフォンスに、セルグは心の中で密かに詫びた。

若宮は最後に馬を借そう、と約束して、名残惜しそうに、ゆっくりと退室していった。

アルフォンスたちは再び女官に導かれ、宮の外へと向かう。少年らから靴を受け取ると、ジーパに来て初めて土を踏んだ。

そこからは武官に案内され、初めて見る立派な騎馬を借り受けた。目的地が『レナード家』というのが馬を世話する武官の安心材料になっていたのは、かなりの驚きだったが。

その武官に見送られ、一行は御所を退出した。

ギイイ、という木の門が擦れる音を聞きながら、アルフォンスは改めて御所を眺めた。

ここからは、誰の保護もない旅路が始まるのだ。

「おっしや、俺について来いよ。最短経路で行くからな」

「その、到着は明日のいつ頃にでしょうかー？」

「普通は昼過ぎに着く。ってなワケで、頑張れよりユーン！」

「は、はいー……」

まだ走ってもいないのに弱りきったリユーンの声に、一行は思わず笑ってしまった。リユーンだけが一人で馬に乗れないため、最も巧みなローザンに相乗りしている状態なのだ。

「よし。みんな、行こう！」

アルフォンスの声に一同が頷く。

元気な嘶きとともに、七頭の馬が走り出したのだった。

## 月の宴をへ忒

紅の夕日に染まるジープの都、ナファ・ディーヤ。

暮盤の目のように整然と鎮座するその都を、アルフォンスは高い山の上から眼下に収めていた。

馬を駆った一行は都を南北に突き抜ける大路を通らず、御所から真っ直ぐ東に抜け、猥雑な力に満ち溢れた町を横断していた。

「この山は越えられないから、今度は山裾を下った先の宿場まで行くぞ。リユーンは無理すんなよ、って言いてえとこだけど……。宿まで我慢してくれな」

「ええ、大丈夫ですよー」

一行の中で一人だけ乗馬技術がなく、ローザンと相乗りすることになったリユーンは、初めての経験にかなりぐったりしていた。

セルグの予定では、近いが急な山際の道ではなく、回り道でも平坦な街道を進むはずだった。しかし街道の先にある川が先日の豪雨で氾濫して、橋が壊れていたのだ。

そのため一行は急遽予定を変更し、曲がりくねった山際の道にて宿を目指した。

「運が悪かったわよね。まさかこんな荒療治になるとは、流石のあたしも思わなかったわ」

何とも言い得て妙なローザンの言葉に、アルフォンスは思わず笑ってしまった。他の面々もつられるようにして笑いをこぼす。

「っと、やばい、日が沈んじまう。急ぐぞー!」

また少し地平線に近づいた夕日を背に、一行は再び馬を走らせた。何とか日が沈みきる前に山道を抜けたが、目的の宿場町に着いたのは、もうすっかり辺りが暗くなった頃だった。

翌日は雲一つ無い、気持ちのいい青空が広がっていた。

「後は平坦な道だからな。安心していいぜ」

「お昼過ぎには着けるんだよね？　楽しみだなあ」

「ただ無駄にデカイただけだぜ？　ま、こんな大人数の客を迎えるには都合がいいか」

そう快活に笑うセルグを見て、アルフォンスはこっそり微笑んだ。最初、実家に帰ることをセルグは拒んだが、それは実家が嫌いだからではない。気恥ずかしいとか踏ん切がつかないとか、そんな理由でしかなかったのだ。

（きっと、最高の思い出になる）

友達の家に寄る。突き詰めればそれだけのことなのに、アルフォンスの胸は弾んだ。

やがて馬を走らせ、県境である小高い丘を越えた頃。そこには大きな湖と、その湖を囲むように町があった。

太陽は今、中天を過ぎたばかり。

「見ろよ！　あれが俺の町、ザウイル・レントだ！」

湖を取り囲むようにできた町の中心には、一際大きな屋敷が一つ。その遙か後方には、目指す扉がある、レント山脈がそびえる。

町名のザウイルとは、ジーパの古語で『へそ』。この町はレント県、すなわちレナード家領の中心である、ということの意味している。

町名のみならず、県名すら家名が語源になっている。そんな由緒正しき家柄だと、到着寸前で事も無げに話したセルグに、一同は呆然とするしかなかった。

「セ、セルグって一人っ子なんでしょ……！？」

「武闘家の職を選ぶとは、随分と大胆な決断だな」

「ああ、けど俺は本家じゃねえから。領主やってんのは親父の兄貴、伯父上だよ。流石に俺が本家嫡男なら、武闘家になるのも躊躇したと思うぜ？」

「それでも『躊躇』なのね……」

「セルグさんらしいです……」

「領主の家系ともなれば、お父上はご自分で商いを始められたのですか？」

「いんや。俺の家は特殊でな。もともとが隊商で、そこから今の地位を手に入れたんだ。だから本家と分家に分かれて、領主と隊商を継いでる。親父は先代の都合で本家の出身だけどな」

「それは珍しいですねえ。そういった謂れのある家系でも、なかなか商売を続けるのは難しいでしょう？」

「そうねえ。それに隊商というのも島国ではあまり聞かないわ。海運が多いのではなくて？」

「まあな。だけどクレアの質問は最もとはいえ、小さな島国の陸路を抑えるつても重要なんだぜ」

「成る程なあ。ねえ、ところでセルグはあの大きなお屋敷に住んでいたの？」

「おう。屋敷の東が本家、西が俺ら。んで、周辺は他の親戚の家だな」

「へえ……」

もう一度、アルフォンスは町の中心に佇む屋敷を眺める。それはどこか、初めてアスクガーデンを見たときのような　そう、高揚

感が確かにそこに生まれていた。

屋敷に近づくと、端から端までが見えず、そのだだっ広さをまざまざと見せ付けられた。

立派な白壁に囲まれた屋敷の門には門番までいて、セルグの姿をみるなり屋敷に飛び込んでいった。途端に、大勢の家人が飛び出してくる。

先に若宮様から連絡が行っていたらしく、一行は予想以上の大歓迎を受けた。

「セルグ坊っちゃん！ お帰りなさい！」

「お待ちしていました！」

「坊ちゃん、お久しぶりでございます！」

到着早々、セルグはこんな『歓迎』を家人たちから何十回と受けることになった。その度セルグは、決まり文句のようにして言い返す。

「だから坊っちゃんって言うな！ 何べん言やあ分かんだよ！」

そのやり取りのおかげで、アルフォンスとローザンは腹がよじれるんじゃないかと思うほど爆笑した。勿論、他の面々も差はあれど似たようなものである。

特にロイという剣士は、セルグの帰りを人一倍喜んだ。隊商の用心棒で、幼いセルグがよく懐いていたらしい。

「いやあ、セルグ坊っちゃんも大きくなられて……。何と、俺よりでかいときた。これにやあ驚きだ」

「ロイ、二回目だ。坊っちゃんって言うな！」

「ああ、すいやせん。どうもあの小さい坊っ……、いえ、小さい頃のお姿が、その、焼き付いてやして」

「ちえっ、いつまでもガキ扱いしやがって。で？ 親父たちは本家か？」

「ええ、すぐに戻られませあ。では坊っ、あーいや、みなさん。こちらにどうぞ。俺が部屋までの案内を仰せつかってますんで」

ロイの案内で、一行はレナード家の西側の建物に案内された。セルグたち分家の住まいだ。

隊商の面々の一部は、普段はレナード家の雑事を手伝いながらこの屋敷で生活を共にしているという。ロイも隊商の活動がないときは、館の警護を引き受けているとのことだ。

しかし客人を案内するくらいだから、彼は隊商の中でも信頼されている人物なのだろう。

「女性には個室を用意してありますあ。ただ、男性は一室になっちゃうが……」

「そんな、構いませんよ。部屋を用意してもらえただけで嬉しいのに」

「そう言っで頂けるとありがてえんで。さ、男性の方々の部屋はこちらになりやす」

「って、広！」

アルフォンスが驚きの声を漏らしたのも無理はない。用意された部屋は、ゆうに十人以上が寝泊まり出来る広さがあつたからだ。

ここを四人 実家なのでセルグが自室ならば三人 で使うのは、少し心許ない。

「ロイ、ここじゃなくて三の間とかは空いてないのかよ」

「はあ。その、旦那様が、是非とも一の間をと……」

同じことを考えたであろうセルグとロイの、そのやり取りで簡単



に想像がついた。恐らくここは客間で最上級の部屋。そのためセルグの父親はここを用意してくれたのだ。

（けど、だだっ広くて寂しいんですけど……）

まだリユーンやラルフが一緒だからいいが、一人だったら寂しくて半泣きだ。うん、絶対。

「女性の方々は、奥の部屋を使って下せえ。全て違う造りの庭に面した造りになってまさあ」

「あら、素敵。それぞれ窓から見えるお庭の景色が違うのね」

「おう。池に面した部屋に、枯山水、松林、橘や梅の部屋。好きな部屋を選んでくれよ」

ロイの案内で部屋割を決めつつ、庭を軽く散策させてもらったが、昨日の宿より、庭も部屋も立派だ。

誰もがそう思ったところで、頭領たちが戻ったとの報せが入り、一行は、屋敷の真ん中辺りにある大広間へと案内された。

大広間にセルグが先頭で入ろうとしたとき、室内から矢のように一人の人物が飛び出してきた。

「セルグ！」

「親父！」

（ええっ！？ 若い！）

まだ四十に手が届くかどうか。そんな男性　セルグの父親が、息子の到着を待ちきれずに飛び出てきたのだ。

開け放たれた障子の向こうには、数人の男性と一人の女性が座っていた。セルグの母親と、隊商の主だった面々だろう。

父と子の二人を笑顔で見つめる母親は、どちらかと言えば線の細い、たおやかな女性だった。しかし『紅茶』のことを知っているアルフォンスは、隊商の長の妻として、芯の強い女性だと知っている。その母親が立ったままの夫に、苦笑しながら声をかけた。

「あなた、お客様を立てたままだなんて失礼でしょう。まずは座っていただかなくては」

「お、おう。そうだったな」

（……これが未来のセルグ像か……）

大成するも嫁に尻にしかれ、暮らしは幸せだが、何年経ってもどこか子供のようなところを残したままで。

（うーわ、そうならない方が不思議って感じがする……）

その尻にしく嫁が、どうかリネアでありますように。

そんなことを願いながら、アルフォンスたちは用意されていた席についた。

「どうぞ足を楽にしてくださいな。今お茶をお持ちします」

ニッコリと笑うセルグの母親は、そう言つと部屋を出ていった。

「さてと、先ほどは失礼した。俺はセルグの父でブラッドという。

いま席を外したのが、妻のパティだ。こいつらは隊商の上役だ。おい」

「コトルです」

「ジャンと言います」

「ミトです」

そうして順々に挨拶をしてもらったのだが、最後の人物になってその流れが止まった。

「あ、あの……」

「？ 親父、あの子は誰だ？」

「いやあ、あいつはな」

「旦那、駄目ですよ。自分から挨拶させるって約束でしょう」

「そうですよ」

隊商の面々が、一番奥に座った子を見つめ、忍び笑いを漏らした。その笑みに嫌な感じはないので、子供の成長を眺める親の心境、といったところか。

渦中の少年と言えば、顔を真っ赤にして俯いてしまっていた。十歳くらいの年齢だが、かなりの人見知りらしい。

「失礼します」

そこにパティがお茶を持って戻ってきた。

「おう、ちょうど良かった。今はカイルの番なんだ」

「あら。きちんとご挨拶できたかしら」

「いやあ、それがな」

「なあ、お袋。だからあの子は誰なんだよ。本家の子か？」

「嫌ね、違っわよセルグったら。ほらカイル、きちんとご挨拶なさい」

「は、はい」

パティの声に顔を上げたカイル少年は、まだ赤い顔のままでこちらを見据えた。

（あ、れ……？）

少年の面差しは、一行を絶句させた。だってこの子、そっくりじゃないか。

「カ、カイル・レナードです。九歳です。はじ、めまして。セルグ兄さん」

「……。……は？」

「だから、そういうことだ」

「そういうことなのよ」

幸せそつに微笑む両親、『兄さん』と呼ぶ自分によく似た少年、空白の十年の歲月。

それらが示すものは。

「はあああああ！！？」

セルグは絶叫して絶句し、呆然となつて両親を見つめた。

セルグの反応に、両親や隊商の面々は、してやったり、とばかりに大爆笑だ。

「あつははははは！！セルグ、驚いたろう。カイルは間違いなくお前の弟だ！」

「な、な……」

「だって、あなたがいきなり旅先で武闘家を選んでしまふんだもの。跡取りの問題もあつたし、それなら、つてことよ」

「お前が戻つて来る可能性もあつたが、もう一人くらい子供がいてもいいと思つてなあ。お前も兄弟が出来て嬉しいだろう？」

「……」

何を、どう言えば。

セルグは絶句し、脱力するほかなかった。まさか自分がゴルディアスに弟子入りした後、新たに子供を儲けていようとは。

（しかも九歳ってことは、弟子入りしてすぐじゃねえか……）

あの時両親は三十、年齢的に不思議はない。が、なんでこんなに破天荒なんだ。

（しかも一緒になって悪乗りしやがったなロイの奴等ああ！！）

ぶち、とセルグから音がした（気がする）。

「親父っ、いい加減にしろよ！ てめえらも一緒になりやがって、何のつもりだこの野郎！！」

ついに堪忍袋の緒がキレたらしい。セルグがブラッドに掴みかかった。

「お、落ち着け。何だ、いきなり弟ができたからって照れるなよ」

「違うつての！ ああ、確かに家族が増えたのは嬉しいがな、十年ぶりの再会がこれか！？ もうちよつと他の趣向はねえのか頼むからよお！！」

「セルグ」

「あのな、お袋　！」

「セルグ、座りなさい。お客様の前ですよ、はしたないことは許しません！」

「……っ」

母は強し。パーティの一喝に、セルグはその手を離れた。

解放されたブラッドは、『やり過ぎたな』といった表情を隊員たちに見せていたが、パーティはそんなブラッドも叱り飛ばした。

「あなたですよ！　いつも一言多いのです。いい加減に勉強なさいな」

「う、だが……」

「お黙んなさい！　さてみなさん、お恥ずかしいところをお見せしましたわ。息子がお世話になりました」

「は、はあ」

「お名前はなんておっしゃるの？」

見事に父子を一刀両断にしてみせたパーティは、アルフォンスたちにニツコリと微笑んだ。

「あ、僕はアルフォンス・ロツテカルドです。セルグとはアスケイルで会いました」

「アルと出会ったから、俺はお師匠のもとを離れたんだ。な」

「うん。で、その晩にリネアと会ったんだよね」

「ああ。私はリネア・ル・ノース。魔法使いです」

「その次があたしね。ローザン・ウェシヤス、ルマの踊り子です」

「えー、私はリユーン・スイーバル、精霊使いです」

「私はニーナ・キャズタ、チルト派の僧侶です！」

「……ラルフ・クロスと申します」

「クレア・リ・ネールです。吟遊詩人ですわ。どうぞよろしく」

「ええ、こちらこそ。こんなにたくさんのお友達が来てくれて嬉しいわ。どうせセルグは帰るの渋ったでしょう？　連れてきてくれてありがとう」

（うわぁ、読まれてんなー……）

家庭内の権力図が伺い知れるというものだ。ブラッドとセルグは  
気まずさから、パティと視線を合わそうとしない。

「我が家はジーパでも有数の商家ですわ。お客様に不自由させるこ  
とはレナード家の名折れ。何か至らぬところがあれば、すぐに言っ  
て下さいね」

「お、おいパティ。それは当主である俺が……」

「あら、何か？」

「い、いや。うむ、その通りだ、お客人。レナード家はあなた方を  
いかなる時でも歓迎しよう」

「ありがとうございます。そう言っていたけると嬉しいですよ」

「なに、この時期は隊を動かさないからな、暇で仕方ないのだ。と  
きに、お客人方はジーパは初めてか？」

「ええと、僕はそうです」

「宮での反応を見る限り、全員そうだろう」

「そうかそうか！　じゃあ今夜は大いに盛り上がるな！」

「は？　何のことだよ」

「ああ、そのだな、今晚は宴を催そうと思ってな。いいだろう？」

「そりゃまあ……」

やけに喜ぶ父をいぶかしみながらも、セルグは頷いた。確かに父  
は昔から酒の席が大好きだったが、何か含んでいる気がするのだ。

（まあ……、いいか）

どうせまた悪戯を仕掛けるつもりなのだろう。それなら今度こそ  
一発入れてやれば済むことだ。セルグはそう思い、じとりと父親を  
睨みつけた。

## 月の宴をへ参

「夕食の用意ができるまで、部屋でお寛ぎ下さい」

そうパーティに言われて大広間を出た時、廊下の曲がり角には先客がいた。どうやら反対側から出て走ってきたらしい。少しばかり息が切れている。

「あれ、カイル君？」

「あ、あの、あの……」

「おう、どうした？」

また真つ赤になつた顔で、必死に何かを言おうとしている。何を言おうとしているのかは分からないが、誰に言おうとしているのかは、一目瞭然だった。

ただ、その本人は気付いていないようだ。

「セルグ、あんたお兄ちゃんでしょう？ もうちょっと察し良くないなさいよ」

「え？ 俺？」

「そうだよ。カイル君、セルグと話したいんだよね？」

「は、はい。あの、俺……」

「うふふ。二人だけのほうが気兼ねなく話せていいんじゃないかしら。セルグ君の部屋に行くのはどう？」

「俺は構わねえけど……。ええと、カイル。お前は どうしたい？」

「部屋、行きたい……」

「そうか。じゃあ俺は自分の部屋に行くわ。また後でな」

そう言つて二人はアルフォンスたちと反対側に曲がって行つたが、



その姿が見えなくなる寸前、カイルが早速セルグの　心待ちにしていた兄の手を握りしめたのが見えた。

「ほんとと、似てるのに似てない兄弟よねー。あれで顔が瓜二つじやなきゃ、血が繋がってるか疑っちゃうわ」

一の間に戻つてすぐ、ローザンがそうもらした。一同はそれに次々と同意する。

「あはは、確かにね。カイル君もお父さんにそっくりで、びっくりだよ」

「ですねえ。あれほどそっくりな家族も珍しいですよー」

「さっきのセルグさん、弟さんと手を繋いだの、嬉しそうでしたよね。いいなあ、私も弟か妹、欲しいです」

「ニーナ殿はご兄弟がおられないのですか」

「はい、私も一人っ子です。だけどセルグさんみたく、旅から帰ったら新しく兄弟がいるかもしれませんよね！」

「……いや、ニーナ。アレはそう起り得ないだろう」

「けど可能性はありますよ！ 私の両親も若いんです」

楽しそうに鼻歌まで歌い出したニーナに、これ以上突っ込むことの出来る者はいなかった。

廊下でアルフォンス達と別れたセルグはカイルを連れ、懐かしい自室へとやってきた。そこは旅立つ前と、何も変わらないままだ。変わったのは自分だけ。

「あの、ね。母さんがいつも掃除してるんだよ」

「……そうか」

「うん。いつ兄さんが帰ってきてもいいように、って」

「……お袋には悪いことしたよな。たった八歳で初めての商売に出

掛けて、それだけでも心配だったろうに……。それきり十年も帰らなかったんだからな」

「そんなことないよ！ 母さん、いつも兄さんのこと話してるもん。兄さんは立派な武闘家になって帰ってくるから、待ってようって！」

氣落ちした兄を、必死に慰めようとするカイル。その無垢な言葉が、セルグの胸をついた。

嬉しく、そして切なかったのだ。

「わっ、兄さん？」

「ありがとうな、カイル」

照れ隠しにカイルの頭をわしゃわしゃと撫で、セルグは大丈夫だ、と言った。

カイルが言った母の言葉は、『寂しい』の裏返しだ。あの気丈な母が唯一こぼした弱音。自分のことを話した数だけ、自分に思いを馳せたということだから。

その言葉を額面通りに受け取った弟が、無性に愛しかった。

（お袋、せめてその期待に応えることが、俺に出来る唯一の親孝行だよな？）

立派な武闘家。自分の目指すべき道が、初めて見えた気がした。

武闘家の道を選んで十年、これまで明確な目標を持っていなかった。

ただ力が欲しいと、強くなりたいと願うだけで。

だけど今、ようやく道を見つけた。

「俺は武闘神になる。次に帰るときは、祝いの席だ」

二位と三位は、努力の差。一位と二位は、才能の差。

これは職で昇級の難しさを表す言葉だ。皮肉を込めたその言葉は、非常に的を得ている。

どんなに努力しようと、『才能の差』で一位になれない人は大勢いるのだ。

(それでも)

「本当に!？ セルグ兄さん、武闘神になるの!？」

「ああ、なってみせる。けどな、カイル。これは俺たちだけの秘密にしてくれるか？」

「え？ うん、いいけど、何で？」

「不言実行、ってな。あんまり言いふらしたくねえんだ」

「？ よくわかんないけど……。うん、わかった」

「ありがとな。そういや、カイルは九歳なんだよな？ お前はもう商売に連れてってもらったか？」

「ううん。けど、次からは連れてってくれるって!」

「へえ。俺は途中までだけど、楽しかったぜ。……お前はちゃんと帰ってこいよ」

「うん、大丈夫だよ。父さんもロイもいるもん」

「ああ、そうだな」

怪我をせず、無事に帰るのは勿論のこと。けれど、セルグの真意は違う。

(お前は、ちゃんと帰ってくれ)

誰もが、二度と喪失を味わないように。

「あのね、兄さん。聞きたいことがあるんだ」  
「ん？ なんだ？」

「兄さんは、いつか家に戻って来る？」

「……。それは、まだ分からない。せめてこの旅を終えないと、答えは出ない」

「……そう」

「だからこそ、お袋たちを頼むぞ」

武闘家になることに迷いはなかった。けれど、後ろめたさはあった。

「俺の身代わりにしてすまない。……だけど、頼む。カイル」

「心配しないで。俺、みんな大好きだもん。兄さんの身代わりじゃなくて、『俺』がみんなとずっと一緒にいるよ」

「ああ」

「今日みたいに、近くに來たらちゃんと家に寄ってね。それは約束だよ」

「勿論。約束だ」

セルグのその言葉に、カイルは笑顔で小指を差し出した。

それは簡単だけど、重要な約束の儀。忘れればそれまで、だけど、永遠の。

後ほどセルグたちは一の間に合流し、やがて夕食の準備が整ったとの報せを受け、大広間へ向かった。

すでに料理が用意された大広間には、先ほど紹介された人物以外にも、多くの人々が揃っていた。

「おう、客人が参られたか！ それでは乾杯といくか！」

「えっ、あつ、僕はお酒……！」

「私も……」

「なーに、そんなこともあるつかと茶や果汁も用意してある。とりあえず何か杯を取ってくれ」

「は、はい」

席に着くや否や、アルフォンス達の前には酒と茶、果汁の杯がそれぞれ一つずつ用意された。

年少のアルフォンスやニーナは酒が飲めないのです、前もってこうした準備を整えてくれたのはありがたかった。先ほどの言葉通り、もてなしに怠りはないようだ。

やがて各々が何らかの杯を手にしたのを確認すると、ブラッドが己の杯を高く掲げた。

「よし、それでは我が息子セルグの帰郷祝いと、御仲間のこれからの無事を祈って　乾杯！」

「乾杯！！」

乾杯の音頭とともに、大広間には賑やかな雰囲気包まれた。

矢継ぎ早に会話が飛び交うが、当然ながらそのほとんどはアルフォンス一行への質問だった。

出身地、年齢、職、家族構成など、その問いは多岐に渡った。だがカイルが発したごくごく普通の　しかし際どいその問いに、場の空気が凍りついた。

「そう言えば、兄さんは好きな人っているの？」

アルフォンスは飲み物を吹き出さなかったことを、内心、よくやったと盛大に誉めた。レナード家は誰かが吹き出していたが、それほどカイルの問いは衝撃的だったのだ。

「え、あ、や、それは……」

「？　いないの？」

「い、いや、それはだな……」

隣にチヨコンと座ったカイルに見上げられ、セルグは冷や汗を流した。思わず向かいのリネアに視線を向けるも、そもそもこちらを見ていない。普通に食事を続けている。

……あれ、砂漠の告白は記憶の彼方？

セルグが助けを求めて仲間に視線を巡らせても、サッと視線を逸らされた。

（この薄情者おゝっ！！）

いないと言えバリネアに『お前のことを好きじゃない』と暗に言うことに。逆にいると言え『それは誰？』と純粋な目でカイルに聞かれるだろう。

どちらの答えも困り果てることは決まりきっている。

（あ、ヤベ、何か胃が……）

キリキリ痛む。……実家の宴なのに。

そんなセルグの様子を見兼ね、ブラッドが苦笑しながら年頃の息子に助け船を出した。

「くくつ、カイル、そういう話は男同士でするもんだ。それ以上、兄貴を困らせてやるな」

「？ 分かった。じゃあ兄さん、後で聞かせてね」

「お、おう……」

「えー？ つまんねえなあ、坊っちゃんの武勇伝聞かせて下さいよ  
お」

「そうですよ、遠慮せずに！」

「何が遠慮だ！ つーか武勇伝ってなんだよ武勇伝って！」

「そりゃ旦那の息子だし」

と隊商の一人が言った途端、両隣の面々が真っ青になってその人物を取り押さえた。

「……あなた？」

外面似菩薩、内心如夜叉。

まさにその言葉通りの気迫を備えて、パティはブラッドに言葉の真意を訊ねた。……部屋の気温は絶対零度に突入だ。

「な、ななななんだパティ！？」

「あら。いいえ、何でもありませんわ。ほほ、お客様がいらしているのだもの。せっかくの宴ですし、楽しまなくては。ねえ？」

「そ、そうだよな！？ よし、それではお楽しみの時間といくか！」

客人が来てなきゃこの場で。そんな含みに怯え、ブラッドはパティと目を合わせられないまま、裏返った声でそう告げた。

「おいおい、急に言うなよ親父。俺たちは何の用意もしてねえぞ」

「え？」

「ああ、ジーパの宴じゃよく芸を披露するんだよ。ま、招かれた側はやらなくてもいいんだけどな」

「その通り。だから客人方は気にしないで大丈夫だ。ただ様々な技をお持ちのようだから、よかったらご披露願いたい」

「あ、じゃああたし踊ります！ この場で踊らなきゃ踊り子の名が泣くわ」

「ほう、それは楽しみだ。だが、まずはこちらが芸を披露しよう。歓迎の宴だからな。おい！」

「承知！」

ブラッドの合図で大広間に持ち込まれたのは、大小様々な的が吊るされた器具だった。それぞれに数字が書かれているところを見ると、これでの当てをして点数を競うのだろうか。

「さて、そんじゃあ一番手は俺、ミトが務めさせていただきます。見ての通り、やるのは的当て。けど、ちよいと工夫してやらせてもらいます」

そう言つとミトという中年の男性は、的当て用らしい、手の平ほどの大きさの矢を、的の数だけ手に持った。そのまま的の前に立つと、何故か的の反対側を向く。その上、さつさと目隠しをしてしまった。

「さあ、それじゃあいきますよ！ 東西、ミト・グレーの秘技一発！」

威勢のいい掛け声とともに反転したミトは、目隠しをしたまま、手に持った矢を一息で放った。

カカカツ、と小気味のいい音を立てて、放たれた矢は全体的に突き刺さった。

「うわあ、凄い！」

「ミト、腕を上げたなあ」

「凄いです！ 目隠しをされた上でこんなことが出来るなんて！」

一行から惜しみ無い賞賛の言葉が向けられる。それを成功の証としたのか、ミトは嬉しそうに笑いながら目隠しを取った。

「いやあ、それほど。そうだ、よかったら的当て、どなたかやってみませんか？」



「ぼ、僕は無理です！ あ、セルグは？」

「あのな、俺が道具使えるワケねーだろ！」

慌てて矢を押し付け合う二人を尻目に、他の面々は一つの意見にまとまっていた。

「ねえ、ラルフは？ あんたこういうの得意そうじゃない」

「私……ですか？」

「そうですねえ。挑戦してみてはどうですかー？」

「そうですね、せっかくですし。ラルフさんなら大丈夫です」

「私もそう思うわ。頑張って、ラルフ君」

「そうだ。単なる余興だ、気負う事はない」

「……では」

五人からの勧めに、ラルフは戸惑いから目をぱちくりさせた。まさかこうした席で自分が担ぎ上げられるとは、思ってもみなかったのだ。

大切な仲間からの薦めを無下には出来ず、ラルフは申し出を受けた。

「お、挑戦なさいますか。では矢をどうぞ」

「ありがとうございます。……では、参ります」

そう言つとラルフは深く息を吸い、目を瞑った。

（無機物を的にするのは得意ではない、……が）

ゆっくりと目を開け、チラリとアルフォンスたちを振り返った。

（あの方たちの前で外すわけにはいかない）

「散」

呟くような掛け声とともに、ラルフの手から矢が一息に放たれた。

「！！」

ダダダン！ と先ほどとは違う、大きな音を立てて矢が的に突き刺さった。

矢は今回も全体的に命中していたが、ミトと違って綺麗に中心を貫いたわけではない。だが、そのほとんどは的を貫通しかけている。放たれた矢の威力、それが一目で分かるというものだ。

「ほお、こりゃあ素晴らしい！ さすがセルグ坊ちゃんのお仲間だ！」

「おい、あとで一発入るからな、ミト！」

一瞬の間を置き、さつき以上の歓声と拍手が巻き起こった。

ミトも自分の見せ場が奪われた形になったというのに、誰よりも強く喝采をあげていた。

「俺ももつと修行しなきゃな。いや、いいものを見れた。感謝しますよ」

「ですが……。私は……。その、目隠ししていませんし、特殊力で得物に補正をかけていますので」

「特殊力で？ ……ああ、そうか。あなたは妖力がお強いんですね？」

ミトのその言葉に、ラルフが硬直した。次に何を言われるのかと恐怖に怯えた顔で。

そんなラルフの心情と立場を知っているアルフォンス達も、ミトの言動に注目する。

「あ、ああ、失礼しました。その、今の言い方、お気に障りましたかね？」

「……え？」

「いや、俺らみたいな業師連中は、妖力を使うヤツが多いですから。知り合いにも多いんですよ。ほら、今みたいに小道具を使うとき楽でしょう？」

ただ俺は妖力が弱いのでほとんど使いませんが、と続けたミトを、ラルフは信じられないものを見るように凝視した。

そのまま視線をさ迷わせ、何も言おうとしないラルフに、盛り上がっていた宴も静まり始めてきた。

「その……、色々のご苦労があるでしょうけど、ここにはそんなことを言う人間はいませんよ」

「……」

おずおずと、一つずつ言葉を探すようにミトが言った。妖力を使う業師の仲間内で、ラルフのように酷い扱いを受けた人物に心当たりがあるのだろう。

無反応なラルフに、どうしたものかとミトは困り果てたようだが、間を繋ぐようにローザンがラルフを呼んだ。

「ラルフ、お疲れ様！ 今度はあたしの番よ、さあ戻って戻って」

「……はい」

ローザンはラルフを半ば無理矢理に引っ張って、場をこれ以上壊すことなく席に戻した。

一見、酒に酔つての傍若無人ぶりにも見えるが、ローザンのいつもの力強い瞳がそれを否定した。彼女は場の雰囲気もラルフの心も、みんな守つたのだ。

「先ほど言つた通り、踊りを披露したいんですけど。いいですか？」  
「ああ。是非ともお願いしたい。そうだ、せっかくだし、舞台を外に用意しよう。他には何か必要だろうか？」

「そう、ね……。ねえ、クレア」

「勿論、弾かせてもらつわ。リネアも一緒にどうかしら？」

吟遊詩人であるクレアは、踊りの演奏を言わずとも快諾した。その上で演奏者が少ないとでも考えたのか、リネアにも声をかけた。

「構いませんが、私には楽器が……」

「ご心配なく。一通りのものは揃つてるぞ。何でも言つてくれ」

「では、笛を貸して頂けますか」

「あら、笛なら私のものがあるわ。どうぞ使つて下さいな」

いま持つてきますね、と言つてパティは部屋を出て行つた。

「クレア、リネア。曲目なんだけど」

「そうね、ジーパの宴ですし……」

「楽器も考慮しなければ」

突然の出番とはいえ、流石は音の専門職たち。すぐに演奏する曲目を決めたようだ。

広間から見渡せる庭には、即席の舞台が用意された。

そこにパティが笛を手に戻つて来た。セルグ曰くパティの愛用の品らしく、だいぶ使い込まれているとのことだった。笛は遠目にも分かる漆や金箔などの立派な装飾が、持ち主に相応しい繊細な意匠

で施されていた。

「では、ルマの踊り子、ローザン・ウェシヤス。踊らせてもらいます」

「伴奏はクレア・リ・ネールと」

「……リネア・ル・ノースが務めさせていただきます」

そうして、三人が舞台に立った。

ローザンを中心に向かって右にクレア、左にリネア。伴奏の二人はこちらに一礼すると、楽器を奏するために床に腰を下ろした。

やがてローザンが愛用の扇を夜空に掲げたとき、澄んだ笛の音が空気を切り裂いた。

## 月の宴をへ肆

(きれいだ……)

リネアそのものを体現したかのような、鋭く澄んだ笛の音。高く低くそれが響き渡ると、次は柔らかな弦の音が優しく追いかけるように重なりだす。

音を『綺麗』だと思ったのは、アルフォンスには生まれて初めての体験だった。

やがて笛の音がその場を譲るように消えていくと、弦の音に合わせ、ローザンがゆっくりと動き始めた。

庭には篝火、月夜の闇に煌々たる明りがいくつも灯る。磨きあげられた美しい木目の床と、色とりどりの飾り紐がかけられた壁。

その中心で舞う人物に、この場の誰もが目を奪われていた。

普段から美しさに関して妥協しないローザンは、もちろん見た目も美しい。しかし、目が離せない理由はそれだけではない。舞に對しての想いが美しい舞を作り出し、より魅力を際立たせているのだ。やがて再び緩やかに笛の音が加わると、ローザンは舞の調子を変え始めた。

今までは何か線をなぞるかのような静かで単調な動きだったのだが、一転、見るも艶やかに肢体をくねらせるルマ独特の動きを取り入れて舞い出したのだ。

こんなに楽しい時を過ごせるなんて、夢のようだ。

(ブラッドさんたちも喜んでくれてるかな)

アルフォンスがチラリとブラッドたちを盗み見ると、何とも言えない柔らかな表情をしていた。その『親の表情』を見た途端、アルフォンスは安心したと同時に、胸が押し潰されそうになった。

（ごめんなさい）

セルグを、連れて行きます。僕には、彼が必要です。  
僕がセルグの命を預かることを許して下さい。

「……アルフォンスさん？」

突然のニーナの声に、アルフォンスは驚きながら振り向いた。

「どうされたんですか？ ローザンさんたちの舞、あんなに素晴らしいのに……。まさか、どこか具合でも？」

艶やかな舞は、全てを魅了する。自分以外、全員の視線が舞台に注がれているはずだった。

「ありがとう、ニーナ。大丈夫だよ。少しお酒の匂いに酔っちゃっただけだから」

「そうですか？ 何かあればいつでも言っておさいね」  
「うん」

胸が暖かな想いで満たされていく。愛しい人が自分を気にかけてくれた、ただそれだけで。

（僕に出来るのは、逃げないことだけなのに）

再び舞台に視線を戻し、周囲に気づかれないよう、ため息を漏らした。

命を預かるだなんて、随分と大それたことを考えたものだ。むしろ自分は守ってもらう側ではなかるうか。

どちらにしろ、自分のできることをやるだけだ。それはセルグも同じこと。責任のなすり付け合いも、余計な卑下も、何もない。なぜそれを忘れてしまったんだろう。

（あ）

舞台のクレアが、高らかに歌い始めた。

優しい、けれど力強い歌。あれは古代アスケイル発祥で、ジープなどの周国でも馴染み深い歌だ。あの細い身体のどこにそんな力があるのだろうと思うほど、その歌声は強く響き渡っていく。

だが、その歌声さえもローザンの引き立て役でしかない。クレアの歌声を下敷きに、ローザンはより華やかに、艶やかに舞い踊る。

ローザンは確かに、界王の血族である二人を、その実力と魅力で従えていた。

やがて歌と演奏が最高潮の盛り上がりを見せたとき、ローザンはいつも三つ編みにして纏めていた髪を、一息にほどいた。

薄紅色の髪が夜空に舞う。その様子はまるで、夜空に大輪の薔薇が咲いたかのよう。

「イル・ターシャ……」

「え？」

ふと呟いたリユーンの言葉に、アルフォンスは左を振り向いた。

他の人はローザンの見事な演出に心奪われ、気付かなかったようだ。

「リユーン？」

呼びかけても返事はない。

リユーンは酒盃を手にしたまま、魂が抜けたかのように一心に舞台を見つめていた。



(……誰を見ているんだろう)

クレアかローザンか、はたまたリネアか。

謎の弦きの意味が分かれば答えは出たのかもしれないが、今のアルフォンスにはその答えを知る術はない。

ただ一つ言えることは、リューンの視線に込められた想いは、セ Лугのそれとは似て非なるもの。うまく言い表せないが、それは恋慕というよりは思慕。

やがて歌声が消え、笛の音が消え、ローザンの舞は終演を迎えた。それを合図にしたかのように、一斉に賞賛の嵐が巻き起こる。

「す、すげええええ!!」

「お見事!!」

アルフォンスたちも、三人に惜しめない拍手や称賛を送る。

勿論クレアやリネアにも称賛は向けられたが、ローザンには適わない。この舞台の主役は、間違いなくローザンだった。

チラリと視線を動かせば、ブラッドやパティも、めいっぱいの笑みを浮かべていた。

「いやあ、本当にいいものを見せてもらった。ローザン殿、あなたの舞は素晴らしいの一言に尽きる」

「ありがとうございます!」

「本当に素晴らしいわ、演奏のお二人も! 旅の楽士なら、すぐにでも専属契約をお願いするの」

「まあ、それは素敵ですわね」

「じゃあ、また来た時は舞わせてもらえますか?」

「ええ、勿論よ!」

パーティとローザンの約束に、あちこちから喝采が飛ぶ。ローザンたちへの称賛は社交辞令などではなく、本心からだという証だ。やがて賑やかな宴も終わりを迎え、夜に本来の静けさが戻ってきたのだった。

しばらくして、それぞれの部屋に戻ったアルフォンスたちに、一報がもたらされた。食後だが、よかつたら風呂に浸かってくれ、と。

「お風呂かぁ。獣界に行ってからどうなるか分からないし、入ってこようかな」

「そうですねえ。お酒もいただきましたけれど、酔うほどではありませんしー」

と、アルフォンスたちは乗り気だったのだが、セルグだけが渋るような姿勢を見せた。伝言を持ってきたミトに、詰め寄るようにして問いたです。

「……おい、風呂ってまさか……」

「勿論、レナード家ご自慢の風呂のほうで」

「あのクソ親父め、『楽しみ』ってこれか……!」

「??」

風呂の何が問題なのか、セルグは確かに殺気の籠った声で唸った。

「セルグ、お風呂の何が問題なの?」

「また何かジーパ独特の決まりがあるんですかー?」

「そのことでしたら気になさらくとも……」

この三人の言葉に、ミトは如何にも含みがあると言わんばかりに視線を反らし、一方でセルグはどうしたものかと、視線を地に落とした。

「あ、それと女性の皆様は、お入りになるとのことでした」  
「はあ」

（そりゃ女性は入るだろうなあ。だけど、それをどうして僕らに？）

とアルフォンスが思った横で、セルグが異様な素早さで反応を見せた。

「おいっ、ミトー！」

「あ、ついさっきのことですんで。いま風呂場に着かれたくらいでは？」

「???」

いくら何でも風呂を覗くなどという暴挙にでるわけではないだろう。だって今まで機会は沢山あったが、そんな素振りすら見せていない。なのに、何にそんな反応するのだろうか。

「わ、悪いけど俺は風呂入るから。じゃ！」

と言い残してセルグは部屋を 出られるわけがなかった。説明を求めるアルフォンスたちに、力ずくで引き留められたのである。

「ちょっと待ったちょっと待ったあ！」

「セルグ、そのー、何となく狙いは分かるのですが、出来ればきちんと説明を……」

「特に問題がなければ、私も湯に浸からせて頂きたいのですが」

風呂 いや、リネアが関係しているのだけは誰の目にも明らか

だった、その繋がり方が分からなかった。

三人がかりで引き留められたセルグは、観念したというよりは早く行きたい一心らしい。勢いよく説明を始めた。

「あんな、うちは天然の温泉を風呂に使ってんだよ」

「ああ、昨日の宿と同じなんだね。看板に書いてあったよ。でも、それがどうしたの？」

アルフォンスは昨夜の宿を思い出しながら言った。

風呂の入り口に、健康に良い様々な成分を含んでいるという売り文句が掲げられていたのだ。その湯は少し白く濁っていた。

「ジーパじゃ普通、天然温泉は露天で入るもんなんだ。内湯だけだった昨日の宿のが珍しい」

「露天ということは、屋外に湯船があるのですかー」

「ですが屋外にある以外、別段変わった点は無いのでは？」

湯に浸かること事体が珍しい地域もあれば、複数で風呂に入る文化がない地域もある。旅路では川や湖での行水だって少なくなかったし、大きな湯船を共用で使う宿もあった。

ただ、それらは全て内湯なので、ラルフの疑問は最もだった。

「いいか、外にあるんだぞ。勿論、男女は別れてる。だけど大抵は真ん中を壁で仕切ってあるだけなんだよ」

「……？」

「だ、か、ら！ なんら気遣いしないでも壁の向こうでリネアが風呂っ」

みなまで言えぬうちに、セルグはミトに口を塞がれた。ミトはやれやれ、といった表情だ。

「ええ。屋外では壁一枚を隔てて、女湯と男湯が隣接しているので  
す」

「え、ええと、その、それは……」

「頭がセルグ坊っちゃんをからかうために……。その、皆様には申し  
訳なく思ってます」

「あの」

やっと話が見えて顔を真っ赤にしたアルフォンスと、ジタバタも  
がいているセルグ、照れて苦笑いしているリューンらをよそに、い  
つも通りの顔つきでラルフが問いを發した。

「はい、何でしょう？」

「入浴される女性の様子が壁越しに簡単に分かる、といったお話で  
よろしいのでしょうか？」

「……へ？ えっ、あ、はい。まあ、明け透けに言ってしまうば……  
…」

その何が問題なのか分からない。

ラルフの顔にはでかかと、そう書かれていた。

「……」

しばらく、男たちの間に沈黙の時が流れた。ラルフにどう突っ込  
むべきか考えたが、どんな答えが返ってくるのかが怖くて、誰も口  
を開けなかったのである。

「セルグ殿」

「お、おう！？」

頼むこれ以上男の大事というか恥ずかしいところを暴露させてくれるな！

そうセルグは いや、四人全員が寸分違わずに願った。

「風呂に行かれないのですか？」

「……へ？」

「ですから、風」

「あ、ああ行く行く！　じゃあミト、またな！」

そう言うや否や、セルグはラルフを半ば引きずるようにして部屋を飛び出した。アルフォンスとリユーンは慌ててセルグを追いかける。

「セルグ！」

「あ、ああ、悪いな。つい……」

「いや、まあ、いいけどね……」

アスクガーデンからまだ二日。ラルフのことはまだよく分からないが、はつきりしたことが二つ。

まず、風呂好きであること。きつと清潔さに気を遣う性格なのだろう。とはいえ、あんなに執着をみせるとは意外だった。

また、女性への興味関心とでも言うべき感情が欠如していること。

……そして、その辺りの羞恥もない。

「ま、まあ、せっかくですし、早速お風呂に浸からせて頂きましょうかー」

「……そうだな。よし、男の脱衣場はこっちだ。そっち女湯だから間違えんなよ」

そう言ってセルグが指差した先には、母屋と飛び石で繋がれた建

物があつた。二つある入り口にはそれぞれ赤と青の暖簾が掲げられ、セルグが男湯と示したのは青の入り口だ。

中に入ると、脱いだ衣服を置く棚が十ほどと椅子や机があつたが、どれも簡素な造りで、母屋の豪華さが嘘のようだ。

衣服を脱ぎ始めた時、ふとセルグがアルフォンスに声をかけてきた。

「あれ？ その首飾り、石なんかあつたっけか？」

それはアルフォンスが父の形見　母の手掛かりとして身につけている、あの首飾りだった。

「あ、ああ……。これね。うん、前は無かつたよ。村で神官様に頂いたんだ。　御守りにね」

この石は、界王石。界王の血族のみが持つことを許された、至高の石だ。界王力を行使するときは力を格段に高めるが、普段は抑制する働きがある。

エルネストは旅立ちの日、これをアルフォンスに託したのだった。

『目覚めたからには、必ず持っていなさい』

『これは、界王石ですか？　どうしてここに……』

『……テオが濃に託した、もう一つの品じゃよ。その首飾りの穴に、ちようと収まるはずじゃ』

そういわれてアルフォンスが石を手にとった途端、石は目も開けられぬくらい、眩く輝き始めた。だがそれもほんの僅かな間で、石はすぐに澄んだ輝きを取り戻したのだった。

『い、今のは!?!』

『在るべき処へ戻った、ということじゃろう。いいか、アルフォンス。それは肌身離さず持つているのじゃぞ』

そうしてアルフォンスは、界王石という新たな力を携えたのだった。

今まで心の奥底で感じていた違和感　民ではない、血族ゆえの特異な感覚も、この石のおかげで抑えられた。その存在は出来るだけ秘すように、とエルネストから厳命されていた。

「さー、風呂に入ろうぜ」  
「うん」

アルフォンスがセルグを追いかけて外に出ると、そこには見たこともない風景が広がっていた。

（きれいだ……）

水面に月が映り、湯気に仄かに揺らめいて。風にはざわめく木々の音。

（これなら『レナード家ご自慢』だよな）

「いやはや、これは素晴らしいですねえ」

「……。隣に、女性たちの気配がありませんね。入浴を取り止められたのでしょうか？」

チラリと視線を竹で組まれた壁に移し、ラルフが言った。

「かもな。ま、ざんね……いや、その、ゆっくりと入れるし。是非ともうちの風呂を堪能してくれ」



「うん」

セルグの失言には敢えて突っ込まず、アルフォンスたちはいそいそと湯に浸かり始めた。

もうもつと湯気の立つ水面は透明ではなく、昨夜よりもまだ濃い、雪雲のような色合いをしている。

「ふは、気持ちいい……」

「寒い夜空の下で湯に浸かるというのも、なかなか乙なものですなえ」

「だろ？ 見晴らしのいい昼間も気持ちいいけど、俺は夜に入るのが好きだな」

「湯船が広いのもいいよね。ラルフはどう？」

「はい、とても心地よいです。こうして、！」

言葉の途中でラルフが壁に視線を向けた。その理由は、直後に全員が一瞬で理解した。

「へー、こういうお風呂も素敵じゃない！」

「わあっ、早速入ってみましょう！」

壁の向こうが一気に華やかな空気に包まれる。どうやら準備に手間取っていたらしく、女性らも入浴にやって来たのだ。

「リネア、それでは髪がお湯に浸かってしまうわ。もう少し上で結わないと」

「そうですか？」

「ええ。ほら、結い紐を貸してご覧なさい」

きゃいきゃいと明るい声が壁の向こうに響き渡る。それは女同士

の気兼ねない会話であり、何か男は聞いてはいけない気がする。が、思わず静まりかえった男湯でそれは無理な話であり、自然と女湯の華やかな空気に耳をそばだててしまう結果となった。

女湯でも早速、温かな湯に浸かったらしく、ざぶ、ざぶ、という湯の揺れる音まで男湯まではつきり届いてきた。

「……。リネアって、ホント肌が白いわよねー。お風呂だと尚更。その……見た目はアスケイル系なのに、ドーニヤ系のニーナ並よね」

「そうですよね。髪が黒いだけに一層綺麗です」

「……そうか？」

「ふふ、リネアは日焼けしにくい体質なんでしょうね」

女同士、気兼ねなくお喋りを楽しむことで、どことなく嬉しそうなリネアの声に、アルフォンスは思わずため息をこぼした。

いや、正確には『リネアの声に』ではない。その声を『聞いた人物に』だ。

「……。セルグ、逆上せる前にあがったら？」

「い、いや、まだ……」

まだとかそういう問題じゃない……、と思いつつも、自分もニーナの声を聞き漏らすまいと一生懸命なので、鼻血が出そうなセルグは放っておくことにした。

確かにこの露天風呂というのは、イイ。向こうの様子が分かるが音声だけというのは、何とも男心をくすぐる　　というか妄想を掻き立てる。

なおかつ、これ以上の積極的な行動を起こさなければ罰せられることはない。

(……最高かも、これ)

ああ、やっぱり自分も男だな。

ニーナの楽しそうな声に耳を傾けつつ、そんな情けない自覚をした夜であった。

やがて入浴を終え、アルフォンスたちは就寝のために部屋に戻った。アルフォンスとセルグは少々逆上せ気味であるが。

途中、セルグは風呂上がりの飲み水を貰うため、人を探しに母屋に一人向かった。

「親父？」

その途中で、縁側に座って一人で月見酒に洒落込む、父親の姿を見つけたのだった。

「おお、セルグか。どうした？」

「いや、ちよつと風呂上がりの水を貰いに……」

「ああ、そりゃ抜かったな。おい、一の間に水をお持ちしろ。それとこいつにも」

そばを通りかかった家人に指示を出すと、ブラッドはセルグに座れ、と目で促した。

逆上せ気味で少し身体がだるかったセルグは、特に迷うこともなく父の隣に腰を下ろした。

「……明日、発つんだな。まったく、もっと扉の場所を調べてこい」「無茶いうなよ！ この山にあるってだけでも重要な手掛かりじゃねえか」

「そうだ、扉はレント山脈にある。ここは誰の土地だ？」

「え？ そりゃ本家の……」

そこまで言って、セルグは驚きに目を見開いた。

「ようやく気付いたか。　　お、水はそこに置いといてくれ」

「ちょ、親父！　　どういう意味だよ?!」

盆に水差しと湯呑みを乗せて持ってきた家人からそれを受け取り、ブラッドは自ら水を注いだ。

「ほれ、とりあえず水を飲め。そうしたら説明してやる」

「　　っ!」

渡された湯飲みの水を、セルグは一気に飲み干した。

ブラッドはそんな息子の姿を見つめながら、くい、と酒を口に含んだ。口元には成長した我が子を愛しむ笑みが浮かぶ。

「なぜ元は貴族でないレナード家が、このジープでこれほどの権力を持っているか……。不思議に思ったことはないか？」

「……だって、それは、古い家柄で……」

その言葉を信じていた。疑ったことはなかった。古来よりの伝統は、続くだけの価値があるからだ。

「だとしても領主と商人を兼業したりと、おかしいところは沢山あるだろう。……いいか、セルグ。レナード家には、もう一つの呼び名があるんだ」

「……呼び名？」

「そう。本家の直系と今上、若宮様しか知らない、本来のお役目の名だ」

その言葉にセルグは納得した。

あの、親しさは。若宮の驚くほどの心安さは、そういうことか。  
俺だったからじゃない。

「……」

「それが『扉の守り人』。『扉守り』とも言っがな」

「とびら、もり……」

セルグはその言葉に、不思議な懐かしさを感じていた。それは幼い頃の記憶というより、誰もが抱く心の原風景のような、そんな懐かしさだった。

「人界から獣界に繋がる扉は、レナード家が管理している。それが扉守りの一族の役目だ」

「じゃあ、扉守りだったからここの領主に？」

「まあな。領主と同時に貴族にもなったが、あくまで隠れ蓑だ。分家をつくってまで隊商を保ち、扉守りに必要な特殊石なんかを探し求めた。今は殆ど支給されるからそのお役目は形骸化したが、本来は本家と分家、両家が揃ってこそその扉守りだ」

扉を守る本家と、それを護る分家。

また一口、ブラッドは酒を口に含んだ。その姿をセルグは呆然と見つめた。

力のある貴族には珍しく、当代レナード家は両家の仲がとても良い。

そのためブラッドは本家の西の対、つまり兄の家に同居している。かなり広いとはいえ同じ敷地内、セルグも本家の子供たちとよく一緒に遊んだ。

家族も同然の付き合いだったのだ。

「そう、か……。俺、何も知らなかった……」

「俺だつてお前の立場なら、一生知らずにいたかもしれん。そういうものだ」

「……」

それでも、何か言い表せない感情が　悔しさ、寂しさ、悲しさ。それらが交ぜになったような感情が、セルグの胸に広がっていた。

そんな顔をブラッドに見られなくて、セルグはうつむいた。

「セルグ、顔を上げろ」

そう言ったブラッドの言葉に、仕方なくセルグが顔を上げると、  
ごっつ！　とブラッドの拳が頭に当たった。

「っ！？」

「腑抜けたツラをするんじゃない！」

「な、ちょ、親父！？」

「明日、お前らを扉に連れていく。兄貴から、この件に関して代行権を得たからな。……お前なら、扉を開けても大丈夫だ」

殴られた痛みなど、一瞬にして吹っ飛ぶ父のこの言葉。

「俺たちを、試してたのか……？」

「……ああ」

それは扉守りの役目だ。不思議でも何でもない。  
父の、扉守りのお眼鏡にかなった。それは嬉しいことなのに、初めて知った様々な事実がセルグに重くのし掛かっていた。

「俺は……。俺たちの一族が扉守りであることを、お前に伝えるべきか迷った。お前は今、ただの旅人の立場だからな。だがな、俺は伝えようと思った。いいか」

置いたお猪口がカッン、と盆にぶつかって澄んだ音をたてた。

「人は必ず試される。しかも勝手に、何の前触れもなく。だから日々の研鑽を怠るな。……相手が何を思っただけその言葉を投げ掛けているのか、常に考える」

「……。わかった」

「じゃあ、この文を渡そう」

「え？」

ブラッドがそう言って懷から取り出したのは、小さく折り畳まれた文だった。鳥の脚に結んであったものだろう。紙を広げると、ふわりと覚えのある匂いが香った。

（これは　！）

文は、若宮からのものであった。

『君が親御と再会し、心通わせることを願う。君たちの旅路に幸多からんことを』

手の平ほどの紙に、優美で、それでいて強さのある筆でそう書かれていた。

（……俺なんかの考えはお見通し、か）

確かに君を『親』を理由に『扉守り』のところへ誘導した。けれ

ど、家族を想って欲しいのは本当なのだよ。

あの優しい声で、若宮がそう言っている気がした。

今まで以上の畏敬の念や敬愛が、セルグの中に溢れた。文を持つ手に、自然と力が入る。

「……。俺、部屋に戻るな」

「あ、ちよっと待て。ほれ、最後に一杯」

腰を浮かせたセルグに、ブラッドは酒を差し出した。

「……一杯だけな」

無邪気に笑う父の誘いを断れずに、セルグは再び腰を下ろし、杯を手に取った。

「なあ、親父は獣界に行ったことあんのか？」

「分家を継いだ折に、一度だけな。兄貴は何度もあるぞ」

「へえ、伯父上が……」

伯父のダカルは才気煥発な人物で、若くして事故死した先代の後をわずか十六歳で継いだ。数々の改革を断行したが、その一つが分家当主の問題だった。

分家は分家の中で相続するのが当然であり、後継ぎがない場合に限り養子を迎える。しかしブラッドが十六になった時、弱冠二十歳のダカルは周囲の反対を押し切り、分家当主にブラッドを据えた。ブラッドの才を見込んだうえで、本家と分家、両家に堅固な関係を築くためでもある。当時、両家には長年の深い確執が存在していたのだ。

そうして落ちぶれかけていたレナード家に権勢を取り戻し、今の隆盛をもたらしたのだ。



「獣界でレナードの名は通用する。何にでも利用しろ。だが、過信して失敗すればそれまでだ」

「……わかった」

セルグは一気に杯を飲み干し、盆に置いて立ち上がった。

「色々ありがとうな、親父。……俺、頑張るから」

「……ああ。しっかりやれ、お前が決めた道だ」

十年前もそう言って自分を送り出してくれた父親に、ブラッドの背中を見ながらセルグは深々と頭を下げて戻っていった。

その姿を杯に映したブラッドは、高く、杯を月に掲げた。

「……行ってこい、馬鹿息子」

## 月の宴をへ伍

セルグは寢室に戻るため、廊下をひた歩いた。もうだいぶ遅い時間だ、明日の旅立ちに寝ぼけ眼では格好がつかない。

(……?)

早足で向かった一の間に入ろうとして、セルグは庭に視線を向けた。人の　リネアの気配を感じたのだ。

迷うことなくセルグは庭に降り、気配のもとへ向かう。そこはリネアの部屋にほど近い、松林の中だった。

「リネア」

「セルグか。どうした？」

松の大樹に寄りかかって、夜風にでもあたっていたのだろう。リネアは突然やってきたセルグに驚くこともなく、その訪問を淡々と受け入れた。

「……ちよつと、話が」

「ああ」

セルグは一步、また一步と近づいていく。

手を伸ばせばすぐにリネアを抱き止められるところまで近づいて、セルグはようやく歩みを止めた。

「セルグ？」

「あの、さ」

ここまで無防備で。宴でも無反応で。

リネアに心底惚れているセルグでも　いや、だからこそ、苛立ちすら感じてしまう。

リネアの自分への無頓着ぶりに、荒ぶる想いが胸を焦がす。これは、怒りだ。どうしたって止められなかった。

（なんで、少しも俺を意識しねえんだよ！）

「……砂漠の夜に言ったこと、覚えてるか？」

「っ」

まるで詰問するかのような、強い口調。それでも、出来るだけ平静を保って言っただけだ。怒りがあるとは言え、リネアを怯えさせたわけではない。

それでもリネアは何か思うところがあつたのだろう。僅かな、動揺をみせた。

それはセルグの告白を忘れてはいない、確かな証だった。

セルグはそんなリネアの様子に胸の苛立ちが段々と収まっていくのを感じながら、語調を努めて抑えながら言った。

「　答えをくれ、リネア。俺はお前の出生のこととかを知ったけど、そんなの俺にとっちゃ何でもねえんだ。関係ねえんだよ」

セルグはこれが最後だと、直感的に分かっていた。

何度も求めた。何度も欲した。その度に、リネアは背負った秘密を盾に自分から逃れた。

しかし、今はもう違う。盾となる秘密はない。如何にリネアの心を深く捕らえたか。自分がリネアの一番になっているか。判断に必要なのはそれだけだ。

だから今、リネアの心を得ることが出来なければ、これから先も

同じことだろう。

そうだ。自分はその男、賢者シャルランすら越えなければ！

（三月も離れて、どんなに恋しかったか　！）

その分だけ、もし断られたときに理性を保つ自信が、セルグには無かった。

「……と、に」

数秒の間を置いて、唇を僅かに震わせ、消えそうな声でリネアは言った。

「リネア？」

セルグは思わず手を強く握りしめる。その手は緊張のあまり、じつとりと汗ばんでいた。

「本当に、私でいいのか……？」

微かに震える唇から紡がれる、いつもとは違う弱々しい声。その言葉の意味がすぐに分からなかったセルグは、やや遅れて破願した。

「俺はお前がいい。　お前が欲しい」

そう言つてセルグはリネアを引き寄せ、力強く抱きしめた。

「私は、私、は……！　必ず、そばにいる人を不幸にする……！」

セルグの肩に顔を埋めながら、リネアが掠れた声で叫んだ。

愛し合っていた両親を引き裂いて、純粋な友情を捧げてくれた友を殺して。ルマの祭りでは自分の力に惹かれて魔竜カリオンが来た。ニーナの居場所も結局は自分が壊した。

他にも、もっと、もっとある。あの師匠でさえ、自分がいなければもっと自由に生きていたはずだ。

そんなリネアの悲鳴じみた叫びを、セルグは微笑みながら一蹴した。

そんなの、どうだっていい。

「俺はお前と一緒にいてくれれば、それでいい。……俺にとっての不幸は、お前が俺を選んでくれないことだ。俺は今、すげー幸せだぜ？」

「セル、グ……」

リネアがそろそろとセルグの背中に手を回し、きゅ、と服を掴んだ。

「俺から離れるな。俺はお前を放さない。だから、お前も俺を放すな」

「うん、お願い、一人は、もう、嫌だ……！」

本当は分かっている。自分は一人じゃない。師匠、姉上、陛下、それにアルたち。他にも、私を気遣ってくれた人はたくさんいる。

だけど違う。私を大切に思ってくれていても、大切だからこそ、真綿でくるむ様にして優しく扱って、誰も私の中に踏み込んでこない。

だけど、そうじゃない。本当は傷付けることなど恐れずに、私だけを見てほしい。全てを拒み続ける私の壁を無理やり壊して、溺れるくらいに愛してほしい！

「嫌だつて言つても、もう放さねえよ。お前は俺のもんだ、リネア」  
「う、ん……！」

泣きじやくり出したリネアを、セルグは一層強く抱きしめた。

旅立ちの時に一目で心を奪われてから、何度も太陽は登り、沈んできた。セルグはようやく、自分だけの女神を手に入れたのだった。

（リネア……）

この手に抱いていることが、未だに信じられない。リネアが自分を選んでくれたこと、リネアが自分のものになるのだということが、自分は月の女神を、あの高き天から引きずり下ろしたのだ。そうして二度と天に戻れぬよう、地に縛りつけた。例えそれが。

（孤独につけこんだ、卑怯なやり方だとしても、俺はお前が）

だから、その代償に捧げよう。この心も体も、命さえも、俺の全てはお前のものだ。

セルグは涙に濡れるリネアの頬に、愛しむようにそつと手を添えた。

まるで真珠のようなその涙を指で掬い上げ、恍惚とした表情で口に運ぶ。

「愛してる。愛してる、リネア……。愛してる」  
「セルグ……」

リネアはセルグの熱に浮かされた囁きに、眩暈のようなものを感じながらも、体中から愛しさが満ち溢れてきた。

セルグは自分を一番に、絶対の存在として想ってくれている。

この想いに、喪失を怯えることはない。この想いは、永遠なのだ。  
セルグはリネアの手をとり、その指先に軽く口づけた。それに反応して、リネアがピクリと身体を震わせる。

「っ……」

「愛してる」

その反応に気をよくしたのか、セルグはリネアの僅かな抵抗を、肩を抱く手に力を入れることでいとも簡単に封じ込め、熱のこもった口づけを次々に降らせていった。

リネアの額に、瞼に、頬に、首筋に。熱い熱い口づけを、劣情入り交じる胸の想いとともに、余すところなく。  
不可侵の、女神に　。

「これで永遠に、俺だけのものだ。　　愛してる、リネア　」

出逢った時の衝撃は、今も忘れられない。

導かれるようにして出会った、あの美しい星月夜。その時と同じように、夜の光をうける木々の中　。

二人の唇が、静かに重なった。

一方、明日の旅立ちに緊張して眠れないアルフォンスも、庭をフラフラと歩いていた。

美しい月明かりも、もしかするとこれで最後かもしれない。そう思うと、無性に愛おしかった。

ふと、誰かの泣き声が聞こえた気がして耳を澄ませる。

（どうしよう、探しに行くべきかな）

そう考えて、すぐに止めた。声の主の感情が高まるとともに、その気で見当がついたからだ。

（リネア、セルグ　）

「……アルフォンスさん？」

「っ、ニーナ！？」

思わず声を強めてしまい、慌ててアルフォンスは自分で自分の口を塞いだ。

「？　どうなさったんですか？」

「えっ、あー、ほら、もう夜も遅いし」

「あ、そうですね。馬鹿なこと聞いてしまつてすみません」

「いやいや……」

まさか砂漠の夜と同じ状況なんだよ、などと言えるわけもなく、アルフォンスはおざなりに言葉を返すしかなかった。

「あ、の……。アルフォンスさん、せっかく二人きりになれたのでお伝えしたいことが……」

「？　なに？」

砂漠の夜と同じようにで、今日は全く違う夜。

あの夜、セルグはリネアに想いを伝えた。アルフォンスもニーナに。けれど、今夜は。

「砂漠の夜のお返事を、したいんです」

ニーナがアルフォンスに、率直な気持ちを伝える夜だった。



「え？ あ、はい！」

思わず敬語になってしまったアルフォンスは、顔が茹で蛸のように真っ赤になった。

「あれからずっと考えてました。何で私なんかを って。だけどそんな考えは、私を好きになってくれたアルフォンスさんに対して失礼でした」

「ニーナ……」

「好きになるのに、理由なんて要らないですよね」

ニーナも顔を真っ赤にして、じっとアルフォンスを見つめた。

宴の最中も、どうしてか気になった。アルフォンスはいつも明るくて、みんなを楽しませてくれる。なのに、時たま、ああやって夜露のように儚い表情を見せるのだ。

その理由は、たった一つだ。視線を奪われる、唯一の理由は。

「私、アルフォンスさんのことが……。好きです」  
「ニーナ」

抱きしめたかった。アルフォンスはこの愛しい、率直な想いを告げてくれた少女を、強く強く抱きしめたかった。

だけど自分は隠している。界王の血族だということを、ニーナに隠している！

「……アルフォンスさん？」

表情を曇らせたアルフォンスをいぶかしんだのか、ニーナが恐る恐るといった風に手を伸ばしてきた。

「ごめんね、ニーナ」  
「え」

ぴたりと、その手はアルフォンスに触れることなく止まって、宙をさ迷う。

アルフォンスの唐突な言葉を理解出来なくて、ニーナの思考は停止した。

（いま、ごめんね、って……？）

なにを、あやまるの。なんで、あやまるの。 続く言葉が恐ろしくて、ニーナは視線を地に落とした。

「きゃ！？」

しかし突然抱きしめられたために、ニーナは思わずよろけてアルフォンスに身体を預けるかたちになってしまった。

「ごめんね、ごめん。ニーナ」

「アルフォンスさん？」

「僕は、君に隠していることがあるんだ。それを聞いて その上で、どうかもう一度好きって言って欲しい。……大好きだよ、ニーナ」

抱きしめられた温もりの中で、ニーナはその言葉を反芻した。

この人は私には分からない悲しみを背負い、苦しみにもがいている。そうして、私を求めてくれている。

（そんな貴方の助けになれるのなら ）

「話して、くれますか？」

「……うん」

賢者様にはまだ早いと言われたけれど、明日、扉をくぐる前に、絶対みんなにも話そう。自分でも感じる変化に、誰も気づかないわけがないのだから。

秘密なんかまっぴらだ。

アルフォンスはそう心に決めて、ゆっくりと語り始めた。

賢者から告げられた事実、エルネストからもたらされた真実。自分の血にまつわる話を。

「つまり僕はリネアやクレアと同じ、界王の血族。人王様は僕の母さんなんだって。そして僕は、次代の人王となる」

「……人王様に？」

「うん。この世界……ううん、この世を変えたいから。だから僕は、この血とともに闘うと決めたんだ。どんなに、永くても」

界王は『転生』という、特別な命の引き継ぎ方をもっている。

民と同じく男女の交わりによって子を成すことは可能だが、それでは次代の界王が誕生しない場合もある。

そうした時、死を迎えた界王は老いた肉体という殻を捨て、魂だけの存在となる。そして再び自らの力で若い肉体を再生し、『転生』を果たすのだ。

こうすればたった一人でも 永遠に界王で在り続けられる。アルフォンスはその覚悟を既に決めていたのだった。

「だから、ニーナには物凄い負担を強いることになる。それでも……一緒にいてくれる？」

ニーナには、ただ一度の人生。自分とは、違う。

繋いでいた手を強く握りしめれば、ニーナはわずかに瞠目した。

（そうだ。それでいい）

「ありがとうね、ニーナ」

「……アル、フォンスさん？」

「僕を好きと言ってくれて、ありがとう」

今も、好きです。大好きです。

そう言いたかったのに、ニーナは何故か声が出なかった。

まるで別れの時がきたかのように、アルフォンスは繋いでいた手を離した。

「君の気持ち、とっても嬉しかった。ありがとう。……大好きだよ」

しかしその手を、継るようにニーナが握りしめた。

「それなら……！」

「？」

「それなら、なんでもっと強く求めてくれないんですか!？」

瞳を潤ませて、ニーナは自らアルフォンスの胸に飛び込んだ。

あの一瞬は、拒否なんかじゃない！

「好きなら、放さないでください！ 私の心を奪っておいて、今さら逃げるなんて卑怯ですっ……!」

「二、ニーナ……」

「確かにアルフォンスさんのお話には驚きました。だけど、それでも一緒にいたいんです……!」

アルフォンスの胸を、何度も責めるように拳で叩く。こんな形で二人の想いがすれ違うなんて、絶対に嫌だった。

「アルフォンスさんは、ずるい、ずるい……っ！」

ポロポロと、とめどなく涙が零れだす。次第に打ち付ける拳にも力が入らなくなり、ただその胸に縋ったとき、ニーナはアルフォンスに強く抱きしめられた。

「ありがとう、ニーナ」

「アル、フォンスさん……っ」

強く抱きしめられていて顔は見えなかったが、アルフォンスも泣いているのだとその声でわかった。

「そうだね。僕は卑怯で、意気地無しかった。お願いだよ、ニ

ーナ。どうか一緒にいて。僕をずっと好きでいて」

「はい　！」

大好きな人。愛してる人。

弱くて卑屈だった私を支え、変えてくれた優しいあなただから。

（ずっと、そばにいます）

ニーナはアルフォンスの鼓動を、喜びと共に感じていた。

## いざ進めへき

翌朝。一行の旅立ちを祝福するかのような好天が、そこには広がっていた。

「リネア、準備は出来たー？」

昨夜の出来事がたたって、珍しく寝坊してしまったリネアの部屋に、ローザンがやって来た。身支度に一番手間がかかるのに、ローザンはもう準備万端のようだ。

「ああ。姉上たちも終わったのか？」

「クレアはもう来るわよ。けど、ニーナはまだ半分寝てるわ。緊張して眠れなかったんですって」

「……そうか」

何の変哲もない、いつも通りの淡々とした返答。だが、ローザンはその何かに何かを感じ取った。女の感、とでも言うべきか。

「……あんだ、何かあった？」

「……別に、何も」

うそつけ。ローザンは確信した。

リネアは秘密を隠す根性は人一倍だが、その分だけ隠し事は下手だった。

この頃わかってきたことだが、リネアは後ろめたいことがあるとき、視線を左下に向ける癖がある。今はバッチリ左下を向いている。

（もしかして、ニーナも何か……？）

まさか、二人とも。

「あたしに隠し事しようなんて百年早いわよ、リネア」

特に色恋のことでは。

他人の恋愛事情に出歯亀をする気はないが、その手の話に花を咲かせてこそ女というものだ。

しかもかなり前から経過観察していたのだ、気にするなというほうが無理だろう。

「……」

「昨日の夜、セルグと何かあったわね？」

「……別に、何も」

一字一句同じことをさっきも言った、と突っ込んでやりたかった。リネアは顔をふいと背けたが、そんな行為はローザンの確信を深めるだけだ。

「……ま、ニーナもあんたも嫌な空気じゃないし。いいことがあったんでしょ？ 詳細は後でセルグを……」

「……ローザン」

「なあに？」

自分を見つめる瞳に、思わずローザンは息を飲んだ。

その瞳はまるで漆黒の宝石、黒耀石のように静謐な輝きを放ちながら、炎のような強い意志が煌いていたのだ。

ローザンは理解した。これが本来のリネアなのだ。揺るぎなく、真っ直ぐに。怯むことなく己の信念を貫き通す。そんな強い意思の

持ち主。

「私は……。未だに昨夜のことは夢だったのではないか、と思う」  
「……。はあ？」

リネアの突飛な発言に、ローザンは思わず間拔けな声を出してしまった。それを聞いたらセルグは一生立ち直れないわよ、と思いいながら。

「……でも」

窓から差し込む朝日に、リネアの黒髪が柔らかに光る。そうして、顔を照らし出す。

「あれは真実なんだ。セルグは真実を告げてくれた。だから私も、己を偽らずにいようと思う」

誰よりも眩しく、どんな時よりも朗らかに、リネアは笑った。  
心から笑ったのは、あの『禁忌の変』以来、初めてなのではないだろうか。リネアはこちらが泣きたくなるくらい、幸せそうな笑顔だった。

「……いい笑顔ね。そうよ、リネアもそうやって笑ったほうがいいわ」  
「ああ」

ただ、あまりリネアが周囲に笑顔を振り撒くと、セルグの心労は増す一方だろう。これまでのぶっきらぼうな態度でさえ、セルグを含め、何人の男の心を奪ってきたことか。



（しかもリネア、無自覚だものね！……）

はっきり言ってタチが悪い。これで愛想までよくなったら、色々大変ことになりそうだ。

セルグが嫉妬と怒りのあまり、暴拳に出たりとか。

（簡つつ単に想像できるわソレ……）

「じゃ、あたしは先に一の間に行ってるわね」  
「わかった。私もすぐに行く」

わずかに、だが確実に軽やかな声音。昨夜、リネアは心の重荷を少なくすることが出来たのだろう。今のリネアは誰が見ても分かるくらい、様変わりしていた。

（そう言えばニーナも、何かばわわしてたわよね……）

かなり眠そうな顔をしていたので、そちらに気をとられてしまっただが、あれもアルと何かあったからだっただけ。

一の間への廊下を一人歩きながら、ローザンはちよっぴり反省した。

こんなネタを逃すとは、一生の不覚！

「おやー、ローザン。おはようございますー」

「あら、おはようリユーン。どうしたの？」

ローザンが一の間にたどり着く手間で、リユーンが何故か女たちの部屋のほうへやってきた。朝の集合は一の間、と昨夜のうちに決めていたのだが。

「それが、まだ準備に時間がかかりそうでしたー。そのことをお伝えに来たんですよー」

「あら、わざわざありがとう。こっちも皆まだなのよ」

「そうでしたかー。あ、そうそう。昨夜の舞は本当に美しかったですよー。それをぜひお伝えしたくてー」

「ありがとう。そう言ってもらえると嬉しいわ」

素直な称賛は多少気恥ずかしいが、とても嬉しいものだ。だから舞を評価してくれる人に関して、ローザンは必ず礼を返すことを信条としていた。

「星月夜の舞とは、まさにイル・ターシャのようだと……。思わず見とれてしまいました」

「っ！　そ、それは褒めすぎでしょアンタ！」

が、さらりと凄いを言っただけのリューンに、流石のローザンも動揺して赤面してしまった。

「いいえー。嘘はつかないのが精霊使いの信条ですしー」

「だ、だからって……」

イル・ターシャ。それは古代シエルマスで信仰された、美の女神だ。

イル・ターシャが双子の妹神を脇に従えて一差し舞えば、誰もがその美しさに魅了されたという。天上の神々でさえ、その舞に心を奪われたのだ。

現在はその信仰も絶えたが、イル・ターシャの名はシェーマスでは最高の女性の代名詞として、確固たる地位を築いている。

（……っ！　あー、もう！　何なのよ何なのよ何なのよー！！）

あまりにもタチが悪すぎないか。

そうだ、この無自覚ぶりはリネアよりタチが悪い。この無自覚で殺し文句を吐く男を、誰かどうにかしてくれ！

そう考えて、ローザンはハツとした。

?

リューンはローザンの作り出した間に、わずかに首を傾げる。いつも通り柔和な笑顔を浮かべるリューンを凝視してしまう。ロザンは思い至った事実、ただ困惑した。

（ちよつと待って、そうよ、あれは舞への褒め言葉であつて、他意なんかは無いわけで……）

この目の前の人物が、その方面を意図して言うわけがない。意識、してしまった。自分への褒め言葉だ、とってしまった。

「ね、ねえリユーン」

「はい、何でもしょう？」

この、のんびりゆったりほんわりな、自分とは正反対な人。今は仲間として仲良くなったが、出会った当初、クルツアータでの第一印象は最悪だった。

「は、はい。では、また後で」

「つあ、後で皆と一の間に一緒に行くから！ 伝えといて！」

くるりと踵を返し、ローザンのもと来た道を駆け出した。

嘘だ、と思ったかった。相手がリユーンであることが嫌なのでは

ない。

ただ、自分の情けない意地が、素直に認めることを許してくれなかったのだ。誰かが自分に情熱的で盲目的な愛を捧げるのではなく、自分から必死に愛を求めるということを。

(……馬鹿みたい)

恋は突然で、理想通りなんかにはいかない。それはよく理解していたはずなのに。

しかもこの気持ちに納得したとしても、リユーンは自分を恋愛対象として見ていない。あの熱の籠った想いは、どんなに激しくても、恋じゃない。

「馬鹿みたい」

もう一度同じ言葉を、今度は実際にぽつりと口から零して、ローザンは目を潤ませた。

時間は少し遡り、廊下でリユーンとローザンが話し始めた頃。用意を終えたクレアは、一の間に行こうと部屋の障子を開けた。

「あら」

その目に飛び込んできたのは、庭でキョロキョロと何か探しているラルフの姿だった。しかもいつもとは違い、髪を下ろしたままだ。

「ラルフ君、どうかしたの？」

「あ……。その、髪紐を風に飛ばされまして。この辺りのはずなのですが……」

その答えに成る程、とクレアは一人ごちた。

塔で暮らす間、ラルフはいつも身だしなみをきちんとしていたが、持ち物は本当に最小限で、どれも使い込んであった。きっと髪紐の替えなど無いのだろう。

「ラルフ君、私のを貸してあげるわ」

「ですが……」

「見つければ後で返してくればいいし、そうでなければ差し上げるわ。まだ余分に持っているもの」

「……」

「ね？　そろそろ皆も用意を終えてしまおうと思うのだけれど」

このままでは皆を待たせてしまふ、という含みをラルフは理解したらしい。借りるのが髪紐という、たいした品でないことも手伝い、コクリと頷いた。

「じゃあラルフ君、こっちへ来て」

そう言うとかレアはラルフに似合う、落ち着いた色合いの髪紐と、櫛や鏡を取り出した。そして、未だ庭に立ちぼうけているラルフに、縁側に腰掛けるよう声をかける。

「さあ座って、やってあげるわ」

「いえ、そこまでして頂くわけには」

「いいから、ね？」

優しいが強いその言葉に、ラルフは一瞬だけ迷うも、すぐに従った。この一月でレアが信用に足る人物か、既に承知していたからだ。

「……では、お願いします」

「ええ、任せて」

クレアはにつこり笑うと、ラルフの癖のない真っ直ぐな髪に、てきぱきと櫛を通し始めた。

特別に手入れなどしていないようだが、生まれつきなのだろう、とても滑らかで触り心地のいい髪だ。

「……クレア殿」

「なあに？」

とかした髪を一纏めにしていてところで、ラルフが言った。

「クレア殿は普段、ご自分の髪を結ってらっしゃいませんが、なぜこつした道具をお持ちなのですか？ それに、かなりお上手ですし……」

「あら、ありがとう。でも、やっぱりラルフ君は男の子ね」

ラルフがこんな疑問を持つとは思ってもよらなかったため、思わずクレアは苦笑してしまった。

「櫛なんか女の子の必須品よ。やり方なんて友達や自分の髪を適当に結んで、遊びながら覚えるの。女の子ってそついうものよ」

「そつですか……」

あまり納得していないのか、ラルフの言葉が濁る。その理由を察し、クレアは少しだけ補足をした。

「ただし、リネアは別ね。……あの子はシャルラン殿しかいなかったもの。シャルラン殿と同じように髪を伸ばして、あとは邪魔にならなければいい、ってところかしら」

「成る程」

リネアは例外的な存在だということに、ラルフは初めて気付いたようだった。

『世間一般』や『女の子』の定義は、塔でクレアとリネアを通じて作られていたらしい。

流石にシャルランは規格外だと本能的に認識していたようだが。

「ただ……。私も、少し特別かもしれないわ」  
「？」

振り向きそうになったラルフの頭を軽く抑え、さっ、と紐を髪に巻き付けてクレアは髪を結び終えた。

「はい、終わったわ」

「あ、ありがとうございます。……その」

「今の話？ そうね……。私は血族で唯一、リネアと会っているわ。でも何の力にもなれなくて、この三年は会いにくることさえ出来なかった……」

今も軟禁される哀れな叔母。その存在を無きものとする、母や血族たち。

リネア of 存在を知ったのは、天界まで轟いた『禁忌の変』の余波があつたからだ。

あり得なかつた。あの時、目覚める血族がいるなんて。

界王の血族は誰しも、三歳で『覚醒の儀』を迎える。成長するほどに増す界王力の扱いを覚えるため、厳重に結界を張ったうえで、強制的に目覚めさせるのだ。

あの時、天界で最も幼い血族は自分。精霊界と魔界に血族はなく、

獣界には幼い双子の血族がいるが、覚醒の儀を終えたばかり。

それなのに、誰かが目覚めた。

「そうしてお祖父様　天王様を問い詰めたの。天界で私だけが真実を知らなかったのよ？　……子供だったから」

アルフォンスは、奇跡的に穏やかな目覚めを迎えられた。しかし、それは首飾りのお陰だ。

あれは、界王石を加工したもの。純粹な界王石ならば力の暴発を促進した可能性があるが、加工品だったために上手く抑制作用だけが働いたのだ。

それは我が子に首飾りを託した、人王の切なる願いが叶ったということ。

そして何よりも本人の強い意思　『守る意思』。助かりたい、ではなく、助けたい。命の危機に直面して、どちらを心から願ったか。

（そう願える人など、居るわけがないと思っていた）

だからこそ、血族は覚醒の儀を行うのだ。そんな夢のような強さは、誰もが持ち得るわけではないから。

「天王様は……。リネア殿の存在をお認めになっていないのですね……」

ポツリと、ラルフが乾いた声音で呟いた。

「……そう、かもしれないわね。それでリネアの存在を知った私は、みんなを振り切って会いに来たの」



どんなに寂しいだろう、どんなに恐ろしいだろう。

そう思っで息急きながら訪れた先には、もう涙の跡など見当たらない、強い眼差しで自分を見据える少女がいた。

泣いていいのよ。泣くのは罪ではないのよ。

何度言っでもリネアは堅く口を引き結んだまま、首を横に振るだけ。

せめてと思っで、髪を結っであげた。その美しい黒髪が前を覆い隠してしまわぬよう。

「その時、初めてリネアは笑っでくれたの。それがとても嬉しくて、私はたくさん練習したわ」

天界を飛び出してきた手前、いつまでも居座るわけにもいかず、一度は帰ることにした。

「あの子、私の袖をひいたのよ。何も言わなかったけれど、引き留めてくれたの。少しでも力になれた、それが分かつて嬉しかった」

……

そうして帰った天界で大目玉を喰らったが、後悔などしなかった。飛び出したことは謝っでも、会ったことは絶対に謝らなかった。

ただ、リネアの様子を伝えたら喜ぶだろうと思ひ、叔母に話をしたが、あの時は本当に困惑した。

叔母は話を聞いた途端、大きく目を見開き、その細身でと思っでほど大きな声で、半狂乱になっで泣き叫んだのだ。

あの子の幸せを願っで身を引いたのに。それは間違ひだった、我が子を不幸にした。恨まれているに決まっでいる、会う資格などない。そう言っで。

かける言葉が見つからなかった。

「想うが故のすれ違い……。リネアは少しも叔母様たちを恨んでいないわ。むしろ、『自分のせいで両親を引き裂いた』と気に病んでいるの」

「……そう、ですか。私などとは、比べ物になりませんね。リネア殿は……」

「あら、それは違うわ、ラルフ君」

地面を見つめ沈んだ声で言うラルフを、クレアが優しく遮った。

「悲しさや苦しさは、人と比べては駄目。何も生まれないわ。それに誰かにとっては些事でも、その人には大切なことよ。……そうでしょう?」

妖力を強く持つ苦しみ。

その苦しみは、他人の苦しみを見つけても、消えるわけではない。苦しみや悲しみは、他人と比べようとしても、本来、比較の対象にはなり得ない。みんな、似て非なる存在だから。

だから押し込める必要などないのだ、と。

「クレア殿……。そう、ですね。ありがとうございます」

「ふふっ。どういたしまして」

些末なことだと思った。リネア殿の問題は界王、ひいては世界の問題でもある。だから自分の苦しみなど、なんと小さな事かと。だがクレア殿は、全てを認めてくださった。

(なんだ、この気持ちは……)

胸の奥が、あたたかい。

アーサー様とも違う。アルフォンスたちとも違う。初めて知る、

あたたかさ。

「……それでね、子供の私には難しい問題だったから、余計なことをしてリネアと叔母様の仲がこじれるのは大変、と思ったの。だから二人が巡り会うときを待ったわ。その願いが、もうすぐ叶うの……！」

どこか遠くを見るように、熱い眼差しをするクレア。  
そんなクレアに、ラルフは何も考えぬまま手を伸ばした。

「ラルフ君？」  
「っ！」

指先がその肩に触れる寸前、ラルフはその場から勢いよく飛び退いた。

（いま、俺は何を　！？）

心臓がバクバクと煩い。耳ざわりなくらい、激しい鼓動を響かせている。鳥肌がたつだけ血の気が引いたのに、嫌な汗も出てきた。自分の行動が信じられなかった。理由もなく他人に触れようとするなんて。

（今のは、なぜ……）

クレアに視線を戻しても、不思議そうに自分を見ているだけで答えは得られそうになかった。

ラルフはこのとき、自分でも知らないうちに、初めての感情を芽生えさせていたのだった。  
誰かに触れたい。

ほのかで、それでいて誰もが持つ、絶対の欲求を。

## いざ進めへ忒

アルフォンスたちは一の間に、予定より少し遅れて集合した。そこで全員の調子を確認してから、朝食を用意してくれている大広間に向かうつもりなのだ。

昨夜、覚悟を決めたアルフォンスは、みんなに話そうとぐると顔を見回し、あることに気がついた。ラルフとローザンの様子が、どこかおかしい。

セルグとリネアもどことなく雰囲気は違うが、その理由は推測がつく。だが、ローザンたちの理由がわからない。

（昨日は普通だったのになあ……）

獣界に行く緊張感だろうか。

いや、それは違う。ローザンもラルフも、瞳に怯えはない。あるとすれば、それは困惑。

「なあ、そろそろ行こうぜ。もう朝飯できてるだろうし」  
「……そうね。さっさと行きましょ」

場の雰囲気気づいたのか、セルグが悪い流れを断ち切るようにして立ち上がった。ローザンも続いて立ち上がりかけたが、隣にいたニーナがそれを引き止めた。

「あつ、あの！ ちょっと待って下さい」

「え、ええ。どうしたの、ニーナ？」

「えーと、その、アルフォンスさんが……」

「えっ、あ、うん！ そう！ そうなんだ、ちょっと、話が、あつて……」

ドクン、とアルフォンスの心臓が跳ねた。

みんなの視線が集まっている。もう逃げ場はない。

アルフォンスは、自分を心配そうに見つめるニーナを見た。それから服の下にある首飾りを、ぎゅっと握り締める。

「話が……あるんだ」

真っ直ぐ前を見据えたアルフォンスの瞳は、春の空のように澄んでいた。その瞳に、全員が魅入られる。

（まさか、アル）

一人、リネアは息をのんだ。まさか、言つつもりなのか。今の場で。

まだ、隠していられるのに。まだ、今まで通りでいられるのに。

「アル！」

「大丈夫だよ、リネア」

ぶつかり合った視線に、リネアはその先を言う事が出来なくなつた。

立ち向かうことを決めたアルフォンスを、ただ見つめる。

アルフォンスは首飾りを取り出して、みんなに見せるようにして言った。

「あのね。この、首飾りのことなんだ。僕も、賢者様から聞いて初めて知ったんだけどさ」

「？ それ、お守りとか言ってなかったか？」

「うん。僕にとってはね。でも、それだけじゃなかったんだ。あのさ、セルグ、覚えてる？ ローザンと出逢った時、天幕で話したところ」

「お、おう。えーと、魔物が増えてきたとか、その、禁忌の子の事とかだろ。それと、人王の……」

そこで、セルグの言葉は勢いを失った。

全てを理解したのではない。だが、自分の言葉に真実の一片があると　気が付いていた。

「ア、ル……？」

セルグが、何とも頼りなさげな声で呼ぶ。これは現実か。お前は真実か、と。

「この首飾りの石は、界王石なんだ。僕は知らなかった。でも、知った。だから逃げない。僕は　」

アルフォンスは一度、目を瞑る。そして、すう、と息を吸い込み、静かに目を開いて言葉を続ける。

「　僕は、人王の血族なんだ」

淡々と、アルフォンスは言った。アルフォンス自身でも信じられないくらい、落ち着いて言えていた。

だが、予想だになかった事実、セルグたちは、言葉を失っていた。何を言っているのか、何を言えいいのか、何も分からないようだった。

ただ、なぜかリューンだけはあまり驚いた様子はなかった。

「ええと、リユーンは、その、驚かない……の？」

「はいー。その石を見た時から、薄々、界王石ではないかと思っ  
いたんですよー。界王石以外はどんな石であれ、必ず特殊力があ  
りますからねえ」

「そ、そうだったんだ」

「それに……。姉からも、言われていたんですよー。リネアのこと  
もですが、アル、貴方は……。貴方は、人王の血族だろうと」

「そっか。ティティスさんには、分かってたんだ」

ティティスは感知が得意な上、人のオーラを見る力がある。リネ  
アの特異力の偏りと特異なオーラから、禁忌の子と推測することは  
容易なはず。

そしてリネアのオーラと自分に、共通点を感じとったならば。

「もちろん、推測の域を出ませんでしたかねえ。ですが他にも気にな  
るところはありましたし、私としては驚きより、ようやく納得が  
いった、という感じですよー」

にこにここと、いつも通りに微笑むリユーン。

その穏やかな微笑みが、アルフォンスにはたまらなく嬉しかった。  
『いつも通り』の微笑みが、何よりも。

「……なるほど、ね。あたしも、何か変だな、と思ったことはあつ  
たのよ。あれは界王力だったのね」

「へへ。あの、ね。それで、みんなにお願いがあるんだ。僕は血族  
だけど、アルフォンスだからさ。新しい事実が加わっても、何も変  
わってない。だから……」

今までと変わらずにいて。

そう言おうとしたが、喉まで出掛かった言葉が出ない。アルフォ



ンスは、きゅ、と拳を握った。

もし断られてしまったら……。その恐怖で、思わず身が竦む。そんな怯えを察したのか、ニーナがそつと手を添えてくれた。

その時、ずつと押し黙っていたセルグが、すつ、と近づいてきた。アルフォンスは気づいて顔を上げたが、その瞬間、額に強烈な痛みが走った。

「……っ!？」

あまりの痛さに、思わずうずくまる。強烈なデコピンを食らったのだ。

「あのな。当たり前だろ。俺らは『魂をともしにする仲間』なんだぜ。そう言ったの……。お前じゃねえか」

まだ涙目で額をさすりながら、アルフォンスはセルグを見つめた。まるで武闘大会前夜のような。二つしか変わらないのに。そう思った、あの優しい瞳。

「私も。まだ驚いているのは確かですが……。アルフォンス殿が何者であろうと、今まで通り、お側にいます」

「……うん」

今度こそ本当に、涙が零れ落ちた。

セルグとラルフの言葉。当然だからこそ、ありがともごめんも言わない。

一方、セルグはセルグで、アスケイルでの引っ掛かりが解けてすつきりしていた。

あの時、アスケイル王はアルフォンスの真実に驚いたのだろう。それをリネアが制して、クレアを隠れ蓑にした。その証拠こそ、あ

の書類の順序だ。

（とにかく、隠さずに話してくれてよかったぜ）

賢者に聞いたという事は、真実を知ったのは修業を始める前だろう。と言う事は、落ち着いて話せる機会は、今しかなかったという事になる。

その機会を逃さずに、逃げずに、話してくれた。

怖かったはずだ。自分が、他者と異なる存在だと認めることが。

リネアのように、他人に疎まれるわけではない。むしろ、歓迎される存在だ。それでも、それまでの『自分』が消える感覚は、とてもなく恐ろしいはず。

だからこそ、話してくれたことが嬉しい。仲間を、自分を信じてくれたことが。

「僕の話は、これで終わり。 さ、行こう！」

アルフォンスはそういうと、涙を拭って立ち上がった。他の面々も、アルフォンスに続いて部屋を後にする。

その時にはもう、先ほどの微妙な空気は、跡形もなく消え去っていた。

一行は昨日と同じく、大広間でブラッドたちと賑やかに朝食をとった。が、食事を終えたところで、ブラッドが不意に口を開いた。

「さて。皆様に、お伝えするべきことがございます」  
「？」

急にあらたまって、どうしたのだろう。アルフォンスたちは、不思議そうにブラッドを見つめた。

だがブラッドの言葉を合図にしたかのように、部屋にいた隊商の面々は次々に退室していく。パーティも同様だ。

賑わっていた広間は、打って変わって静まりかえり、ブラッドと一行だけが取り残された。

「すでに聞き及んでいましょうが、レナード家は古よりこの地を治める一族でございます。神代の時より、我らはここに在るのです」

ブラッドの言葉の意図が読み取れずに、アルフォンスたちはうろたえる。ただ、セルグだけは居住まいを正し、真っ直ぐブラッドを見つめていた。

「我らは守り人。扉守りの一族にございます。あなた方は扉をくぐるに相応しい方々とお見受けいたしました。私が責任を持って獣界に繋がる扉までお連れ致しますよう」

言い終えると同時に、ブラッドは深々と礼をした。

アルフォンスたちは、この言葉に呆然とする。

特に、本日二度目となるローザンたちは、いつそ悟りの境地に似たものを覚えるほどに。

(……………もう何があっても驚かないわよっ！)

今なら、自分が実は精霊王の隠し子でした、とか言われても平然としていられる気がする。

「扉は我が一族の案内なくしては、決して辿りつけません。帝にも場所を秘していますし、何重にも特殊な術を施しているのです」

そう言ってブラッドは言葉を切った。ゆっくりとアルフォンスた

ちを見回し、にこりと笑う。

「驚かれましたか？」

どこか悪戯めいた、けれど威厳に満ちた笑みだ。その笑顔に、アルフォンスたちも釣られて笑ってしまふ。

「そりゃあ……。驚きましたよ」

「はい。隊商の皆さんが出ていかれた時は、どうされたのかと」

「そうね。私もこの扉は初めてだし、こういう試しも初めてだわ」

「その髪色……。あなた様は、天王様の血族ですな」

「ええ。血族は、試しを受けませんから」

サラリ。クレアの髪が、微かに揺れた。

クレアはいい機会だわ、と言って扉のことを話し始めた。

「界王力と扉守りの力は、扉の鍵となるわ。ただ、界王の間に続く扉には扉守りがいないの。その血族でなければ開けられないのよ」

そのクレアの言葉を引き継ぐようにして、ブラッドが言った。

「……我が一族では男子にのみ受け継がれ、かつ、発現するのは三人という制約がございます。現在は兄である当主、私、そしてセルグです」

「……!？」

その言葉に最も驚いたのは、誰であろう、渦中のセルグであった。界王力のことは知らなかったが、そんなものか、と納得した。だが、昨夜が全てではなかった、という事実。まさか自分に力が発現しているなんて。

（しかも、男子のみ三人ってことは……）

扉守りの力は、本家が継いでいるとばかり思っていた。だが、この先、本家に力は発現しない。

分家当主を決めるとき、伯父がブラッドを押し通せたのは、分家の候補が生まれたばかりの赤ん坊だったからだ。

その赤ん坊は今、本家跡取りになっている。伯父が養子に迎えたのだ。分家当主が本家跡取りに。その『栄誉』に、口をはさめる者はいなかった。

彼はとても優秀で、領主には申し分ない。だが、分家の生まれである彼には、扉守りの力が継承されていない。伯父には実子もいるが、二人とも女だ。

（親父……）

家に戻ると、一度も言わなかった。扉守りの力を失う危険性を孕んでいたのに。

本家も分家も、昔なら側室を侍らせ、新たに男子を産ませればよかった。だが今は皇族以外、一夫一妻制だ。

カイルのことも冗談混じりに紹介したが、その誕生の経緯だって、本家から圧力がかかったはずだ。もし伯父が亡くなれば、力を継承しているのはブラッドとセルグに限られてしまうのだから。

「扉守りの力、どうぞ御存分にお使い下さい」

そう言って再び礼をしたブラッドを、セルグはどこか遠くから眺めるように見ていた。

親父は、やはり偉大だ。それだけを思いながら。

やがてブラッドの話が終わると、予定を話し合い、一時間後に出

発することに決まった。

「では、また後程」

ブラッドが一礼して退室する。すると、広間の空気は一気に緩んだ。知らず知らずのうちに、みんな緊張していたのだ。

「なんか……。なんか、凄い興奮してきた！ ジーパに来てから凄いことばかりだよね！」

「そうですね。今なら……。運命という言葉が、信じられる気がします」

ラルフの言葉に、一同が頷いた。ここまでお膳立てされている道のりは、そうとでも思わなければ素直に認められないものだった。

その後、一旦部屋に戻ってブラッドから呼ばれるのを待っていると、カイルが別れの挨拶をしにやってきた。だが、兄弟で別れを惜しむ間もなく、すぐにブラッドがやってきた。

「皆様、ご用意が ああ、カイルもいたのか」

そう言ったブラッドは、わずかに顔をしかめた。実の息子とは言え、うかつに扉のことを言えないのだ。

「うん！ ねえ父さん、俺も兄さんたちを見送りに行きたい。いいでしょう？」

カイルは許可は下りるのは当然、という様子で言った。ブラッドが一行を途中まで見送る、という話を聞いたのだろ。一行は山を越えて隣県へ行く、という設定なのだ。

だが、ブラッドはきっぱりと言い放った。

「いや、駄目だ。今回は山を通る。本家の許可なき者は、立ち入ることは出来ん」

「そんなぁ……。ねえ、じゃあ今から……」

「山への目的なく、山に立ち入るな。何度も言っているだろう」

幼い我が子には、非情とも思える言葉だった。カイルはブラッドの言葉を受け、今にも泣きそうになり、俯いたまま、微かに身体を震わせる。

「……今回は、門までの見送りで我慢しろ。パティもそうだろう」

母の名前が出て、カイルは顔を上げた。

ずっと兄のことを想っていた優しい母。その母もここに残るのだ。

自分ばかり我が儘は言えない。何よりも、せつかく会えた。待ち望んだ兄の前で、駄々っ子のような、みつともない姿を晒したくない。

「わかった……」

ぐず、と小さく鼻を吸る音がした。

厳しいことを言ったブラッドも、そんな我慢強いカイルの頭を優しく撫でる。

「母さんのところに行っている。すぐ行くから、と」

「うん」

パタパタと足音をたてて、カイルは部屋を出ていった。その後ろ姿を確認し、ブラッドは溜め息混じりに言った。

「失礼致しました。何せ、真実は妻にも伏せていますので……」

「俺も山に入るな、って口酸っぱく言われてたけど……。こういうことだったんだな」

「ああ。力がある者のみ、十三になったら伝えるもんなんだ。お前も家にいたら、その時伝えてただろうな」

「そっか……」

「さて、参りましょう。山の中腹に特殊方陣がございます。まずはそこを目指して参ります」

そう言っ、ブラッドは一行を促した。表玄関ではなく、山への道が続く裏口へと向かう。そこには一行を見送るため、大勢の人が集まっていた。



## いざ進めへ参

見送りに来てくれて人々の中には、もちろんパティやカイル、隊商の面々もいた。

セルグはそのうちの何人かに、直接別れの挨拶を述べる。その中にはブラッドと顔立ちの似ている男性もいたので、あれがレナード家当主なのだろう。

その人たちとの挨拶をセルグが終えたのを確認して、ブラッドが一行に声をかけてきた。

「では参りましょう」

「はい！」

さようなら、また来て下さい、お元気で。  
方々から、別れを惜しむ声が発せられる。

「兄さんっ！！」

その中で、カイルは別れの悲しみを我慢出来なかったのか、ぼろぼろ涙を零しながら兄を呼んだ。  
行かないで。傍にいて。

本当はそう叫びたい。だけど、それは出来ない。兄の旅立ちの邪魔なんて。

「やくそくっ、約束、したからね！」

だから、あの至福のひとときを思い出しながら叫ぶ。

「おう！ 必ず守る！」

セルグはそんな弟に向け、精一杯の笑顔をみせた。感極まって、セルグも泣き出してしまいそうだ。

こうして一同に見送られ、アルフォンスたちはレナード家を後にしようとした。その時。

セルグが、ポツリと呟いた。

「誰だあいつ」

「？」

本当に小さな声だった。すぐ近くにいなかったら、絶対に聞き取れなかっただろう。実際、本当にそう言ったのかどうかも怪しいくらいなのだ。

「親父」

「ん、どうした？」

先ほどまでの感極まった様子が嘘のように、セルグの表情は引き締まっていた。だが、ブラッドは何も気づいていないようだ。

セルグの変化に何かを感じ取ったのか、気配に敏いリネアとラルフは、セルグの言動に注意を払っている。それとなく周囲の様子も窺っているようだ。

セルグは引き続き、小さな声でブラッドに尋ねた。

「本家からの人手は？」

「いや、ないぞ。いつも……」

そこまでで十分だった。ブラッドの言葉を遮り、セルグが吠えた。

「じゃあ、てめえは何者だ！！」

そう叫ぶや否や、セルグは庭の石を拾い上げ、庭木に向かって投げた。ただの小石が矢のように放たれ、胴回りくらいはありそうな見事な枝を、一撃でへし折った。ドサリと音を立てて枝が地に落ちる。

「おい……！？」

ブラッドが慌てたようにセルグに駆け寄った。

だが、セルグは制止の声など聞いていなかった。いや、すでに次の行動　不審者の確保に動いていたため、耳に入らなかったのだ。ブラッドがセルグを押しとどめようとした時には、もうセルグは木の根もとに移動していた。

見送りに来ていた人々がこの事態に仰天し、ざわざわと騒ぎ始める。それも当然だろう。だが、そんなことはお構いなしに、セルグは木の幹を殴りつけた。

がっしりと地中深くに根を張った巨木だ、そう簡単に倒れはしない。しかし、枝葉が嵐にもまれたかのように音をたてて揺れる。

「！」

アルフォンスは、それを見つけた。

騒ぎの原因、不審者、セルグが警戒していた相手。それは木の上にあった。

葉が茂っているから確認しづらいが、確かにそこに人がいた。気配も断っていて、一見して分かるものではない。しかしセルグの攻撃に動揺したのか、僅かに気が揺れた。それでアルフォンスも気づけたのだ。

「ブラッドさん、これくらいは勘弁してね！」

「え、な、何を……!?」

次に動いたのは、以外にもローザンだった。こちらは気ではなく、特殊力で察知したのだらう。愛用の扇に靈力を注ぎ込み、一閃する。

「ヴェダ・セーナ!!」

呪文とともに、轟々と強風が吹き荒れた。いや、あの木の周辺だけを『通り抜け』た。豊かに青々と茂っていた葉も、これにはたまらず空を舞う。

身を隠す場所がなくなった相手は一足で宙に待った。黒、いや紺色の装束。顔も布で覆い、表情はうかがいしれない。体格からして成人男性だらう。

彼は何とも身軽な動きで、人々やセルグとは反対方向、屋敷の塀まで飛び上がったのである。

「待て!」

ロイが叫んだ。逃げられてしまうと思ったのだらう。

だが、アルフォンスたちは慌てず、けれど急いでそちらに駆けていった。アルフォンスたちからは、セルグと同時に退路を断つために動いたその人物が、よく確認できたからだ。

「動くな」

ピタリ、とラルフが背後から男の喉元に刃を突き付けた。男は塀から飛び降りようとしたのだらうが、身動きが取れない。反撃を試みようにも、足もとにはセルグが控えているし、遠方からはリネアが照準を合わせている。少しでも動こうものなら、たちまち強力な魔法が放たれるだらう。

「で、誰だてめえは。返答次第によっちゃあ、ただじゃおかねえぞ」  
「……」

ラルフが刃を突き付けたまま、セルグが足元から男を睨みつけた。セルグは家が危険にさらされたためか、武闘大会の時よりもっと恐ろしい、純粋な怒りを放っていた。

男はしばし無言だったが、ラルフが僅かに刃を引いたことで動きを見せた。ほんの少し裂かれた首元から、つつ、と赤い血が流れ落ちる。

「ラルフ！」

アルフォンスの制止とともに、男は諸手を挙げた。降参の意だろう。未だ警戒を解かないラルフが刃を首筋に当てたままではあったが。

「……これほどとは、恐れ入った」

ぼそりと、男が呟いた。何のことだとセルグが問おうとすると、その前に、とラルフが覆面をはぎとる。

男は、年は四十半ばくらいだろうか。目じりに皺が見え、幾許か髪に白いものが混じっているが、その鋭い眼光は精力的であり、年老いている、などといった表現は相応しくない。

しかも、こうした不逞を働く人物には似つかわしくない、何とも品の良い顔立ちをしていた。こんな出会いでなければ、どこぞの高貴な武人だと言われたほうがよっぽど納得できる。

「……誰だ、あんた」

同じことをセルグも思っただろう。男を問い詰める声の勢いが、随分と失せた。

「まず、謝罪させていただきたい。私の力不足ゆえ、騒ぎを起こし、ご迷惑をかけてしまった」

男がセルグをじっと見据える。この時になって、ようやく追いついてきたロイやアルフォンスたちが、グルリとセルグを取り囲む形で集合する。

「名は明かせない。が、私は天子様の影を務める者だ。秘密裏にあなた方を護衛せよ、との任を承ったのだ」

男のその言葉に、辺りには一氣にどよめきが広がる。セルグも仰天したようだ。

「ん、な……!？」

「ああ、疑わしいのは最も。証拠はここに」

そう言つて男は襟元をくつろげた。そこで示されたのは、心臓の真上に彫られた花の紋様だった。

あれはアルフォンスも見た記憶がある。内裏の中や若宮さまの衣装、借りた馬の馬具。ということは、あれは皇族の紋章だろう。

（あっちゃー……）

まずいだろ、コレ。

相手がどんな身分なのかは、アルフォンスには分からない。だが、この場の様子では『影』とは敬うべき存在なのだろう。証拠も確からしい。ラルフも警戒はしたままだったが、身元が保障されたこと

で刃は納めた。

帝がつけてくれた護衛を攻撃したこともまずい。だけど、それより心配なのは……。

アルフォンスはクルリと振り返る。そこで見たものは、予想通りのモノだった。

（うん、やっぱり見事に固まってる……）

セルグだ。カチンコチンに固まっている。今頃、頭の中はどうなっているのだろう。もしかして、土下座でもしちゃうのかな。

アルフォンスが生温かい目で見守りながらそう思ったとき、セルグが動いた。

だが、土下座などではない。塀の上に飛び上がり、何と男に詰め寄ったのだ。

「それが本当なら……俺はアンタを許すことは出来ない」

周囲のざわめきが一層強まっていく。影に何てことを、といった声も聞こえる。

だが、ブラッドや本家当主は苦虫を噛み潰したような表情をしていた。それでアルフォンスたちはピンときた。

扉だ。

ジーパ国内を護衛するというなら、扉まで付いてくることになる。しかし、正確な場所は扉守りだけが伝えていく秘密であり、帝であっても、それを知らせるわけにはいかない。そうブラッドが言っていた。

一行の旅の目的、行き先を帝は知っているのだ。その上で『護衛をつけた、帝の真意とは』。

「……天子様の御命令だ」

「！」

男が固い声で言う。セルグは何と言って返せばいいのか分からず、言葉に詰まる。いくら扉守りとしての自覚が芽生えようと、その立場を理解しきつてはいない。『天子様』を盾にされたら終わりだ。

このまま押し切られるかもしれない、そう思った時、ブラッドがセルグに助力した。

「レナード山は我らの土地。例え天子様御自らがいらっしやろうと、我らの聖域は不可侵。これは神代よりの約定です」

弟に続いて、兄の本家当主が言い放つ。

「彼らの旅立ちに關してのご報告は私どもが行いますゆえ、どうぞお任せ下さいますよう。護衛が必要かは……もうお分かりでしょう」

真意が何であれ、扉には行かせない。

ずっと支え合ってきた扉守りが、この時も声を揃えて言った。男は両家当主の意見まで覆すことは出来なかったのか、ほんの僅か、顔をしかめた。

「……御内意でも」

「如何なる場合も」

男は苦し紛れに言ったものの、本家当主に一刀両断される。事情を知らない周囲の人間は、このやり取りに目を白黒させている。御内意　帝の望みを、こつも見事に斬って捨てたのだから。

男は眉間に皺を寄せると、もう一度、諸手を挙げた。諦めた、ということなのだろう。



「私が姿を見せた時点で、完璧な任務遂行は不可能。ならば、ここで退いても変わりはありませんまい。ただし、そちらから報告はして頂こう」

「それも約定の内でありますれば」

当然だ、といった風な本家当主の態度に、男は何を思っただのか片方の眉を上げた。

「……。さて、というわけだ。そろそろ刃を納めていただけるか」

え、と思ってアルフォンスはラルフを見た。先ほど、首の刃は取り払ったはずだ。リネアももう杖は構えていない。

だが、男の言葉にラルフは無言のまま、ゆっくりと左手を引いた。そこには先ほどよりも小さな、しかし殺傷能力は十分にありそうな刃が握られていた。ラルフは右手で目立つ場所、首筋に刃を当てながら、左手でもう一つの刃を隠し持つて男の背中に向けていたのだ。それはラルフは今の今まで、いや、今も男への警戒を解いていない、ということ。

(ラルフ……)

確かに、あの男は侵入者だ。そして、セルグたち扉守りの決まりごとを裏から探り、暴こうとした。それでも、他人に何一つ危害は加えていない。

もし事情を説明せず、そのまま逃げようとしていたら。ラルフは迷わず刃を男に突きたてていただろう。

アルフォンスは、初めてラルフに対する恐怖を覚えた。砂漠で殺されそうになった時でも、こんな気持ちは知らなかった。まだ数日だけ仲間になって、親しくなって、互いを知った。だからこそ感じる、未知という、距離という恐怖だった。

「此度は天子様の格別の御厚情、まことに有難く存じます。されど、古よりの約定を違ふ事は出来ませぬゆえ。影の御方、今宵は当家でゆるりと休まれよ」

当主の威厳に満ちた声に、周囲のざわめきがようやくピタリとやんだ。何が起きているのかさっぱりわからなくて混乱していたのだろうが、とにかく影の対面を保った本家当主のこの言葉に、一応の落ち着きを取り戻したらしい。

アルフォンスはそう思ったのだが、それは言葉の表面しか読み取れていない。言葉の裏には『天子様の命令といえど、無理なものは無理だ。扉には行かないというなら、証拠に一晚、この家にとどまれ』という本家当主の意思があつた。

男はその意図を察したのだろう、渋々ながらうなずいた。

「……そうさせて頂こう」

「承りました。おい、お前たち、ただちにお迎えのご用意を！」

「は、はい！」

近くにいた使用人たちに、本家当主が声をかける。使用人たちは急な展開に驚いたようで、泡を食ったようにその場を去っていった。他の使用人も数名、慌てて後を追いかけていく。

「では、ご案内いたしましょう。どうぞこちらへ」

本家当主の手招きに従い、男は塀から飛び降りた。男が人々の輪に加わったのを確認し、ようやくラルフとセルグも降りて一行に合流した。

「ブラッド！」

くるりと本家当主がこちらを向く。

「何だ、兄上」

「客人たちを頼んだぞ」

「……ああ」

そう言い残すと、本家当主はその他の面々を引き連れ、屋敷の中に入っていった。カイルを筆頭に分家の面々は、ちらちらとこちらを見、何か言いたそうだったが、本家当主の命令には逆らえず、一緒に引き上げて行った。

やがてその場に一行とブラッドだけになると、ブラッドが大きなため息をついた。

「お、親父？」

セルグが慌てて駆け寄る。やっぱり、あれだけの大騒ぎを起こしてしまったのには、どこか引け目を感じていたのだろう。せめて、他にやり方はあったのでは、と。

だが、セルグがブラッドに近づくと、ブラッドは急に大笑いし始めた。

「ははははは！ まったく、お前と言うやつは……！ ガキの頃からちつとも成長してねえじゃねえか。図体ばかりでかくなりやがって」

「な……」

「突っ込む前によく考えろ、この馬鹿息子！ 十年前もそうだ。今回……向こうは敵じゃねえし、お前にはこんな立派な仲間がいた。だから無事だったんだ。おい、分かってんのか？」

「う……」

父親からの真つ当なお説教に、セルグはたじたじだ。アルフォンスも含め、仲間内からはそんなセルグの様子にくすくすと忍び笑いが漏れる。

「まあ、そうだな。図体以外も成長したよ。武闘家として、きちんと修行してたんだな。お前が木の根元まで一瞬で移動したとき、何が起こったのかすぐには理解できなかった。……やるじゃねえか」

「……ああ。うん、頑張ったよ。俺だって」

「そうだな。……扉守りのことで、もう一つだけ、話してなかったことがある。まあ、そのうち知ることでもあるんだが……」

ブラッドの口調が、随分と疲労感を漂わせる。この場面で話すことなのだ、あの男と関係がある話なのだろう。セルグは勿論のこと、アルフォンスたちも一言も聞き逃すまいと耳をそばだてた。

## いざ進めへ肆

「扉を守るのは、勿論、扉守りの役目だ。だが、『管理』はどこがしているか知っているか？」

「えっ……。えーと」

「……実際の管理、いや、支配は四大国でしょう。最後は扉守りに任せても、色々と口出しをしているはず」

う、と詰まったセルグを庇うように、リネアがそつと答えた。ブラッドはその答えに頷くと、ため息をもらした。

「ええ、そうです。それが今回の騒動の発端でしてね……」

もう一つため息をつき、ブラッドは滔々と話し始めた。

扉は全て島国にあり、いずれの島国も四大国に様々な形で従属していた。だが、ジーパだけは古代から完全な独立を保っている。朝貢も一時的であり、従属の関係性は希薄だ。

しかし、扉は違う。むしろ緊密な繋がりがある。

扉の管理を大国に委ねる、それは人界中の扉守りの総意だった。小国で国力が弱く、かつ動乱が続く島国の統治者を『力不足』とみなし、自ら大国に赴き管理を委ねた。

その時から扉は、島国の手を離れた。ヒトが文化を持ち、発展し、世界の交流が活発化して、不穏な侵入者を排除する力が必要になったからだ。

扉守りの意思で管理を委ねられた四大国は、扉を権力の象徴として利用するのは勿論、遠慮なく『管理』を実行した。

周辺への術者の配置、術や陣の仕込み。それを口実に島国の国土調査なども行われたが、島国側は界王より扉を預かる扉守りの決定に、口出しすら出来ない。

また、大国の庇護が欲しいがために、島国がその関係を良しとした面もある。しかし、ジーパはそれを良しとしなかった。

「特に今上は、その傾向がお強い。無理強いはなさらないが、今回のように隙あらば扉について調べ、支配下に置こうとなさっている。アスケイルの助力など必要ない、そんなお気持ちがお強いのでしょうか」

「そうか……。けど、確かに今のジーパなら何とかなるんじゃないかね」

「まあ、ジーパはかなり発展したからな。だが、扉を隠す秘術、それにはアスケイル王の力が必須でな。王の即位には五大職全てで一人前の位が必要なのは知っているか？」

ブラッドの問いに、セルグは首を横に振った。国民として歴史を多少なり知っていたアルフォンス、リネアが代わりにその質問に答える。

「ええと、王朝史で有名ですよ。その条件が満たせなくて、即位出来なかった人の話」

「対外的には王の資質の判断基準、と言われていますが……」

「それも真実です。ですが、我ら一族との誓約では『王の即位をもつて秘術を改たにす。されど力無き王は王は足り得ず』と」

初代賢者が編み出し、扉守りとアスケイル王室の間に代々伝わる秘術こそ、守りの要。その術は制約と誓約を重ねることと威力を高め、代替わりによる更新を続けることにより、その威力を持続している。

「制約は、我ら一族とアスケイル王室、互いの血統のみ術を使役すること。誓約は、一切の秘密を王、守り人、通行者以外に漏らさぬ

こと」

最終判断は扉守りだが、王室と扉守りが双壁となり、決して片方の許可だけで扉の開閉はしない。

そして王は術を行使するのに、多大な特殊力が必要となる。そのため五大職の位を、術に必要な特殊力が扱えるかという、王の資質への判断基準にしているのだ。

こうして、秘密をすっかり喋って肩の荷が降りたのか、ブラッドはだいぶすっきりした表情を見せた。

託せる。そう思ったのだらう。

「前置きが長くなりましたな。ですが、扉といえど国家や個人の利害関係が裏で絡んでいるのです。どうかそのことをお忘れなく。：

…さあ、扉へと参りましょう」

「……おう！」

その後、一行は緩やかな山道を登っていた。

ブラッドによると、ここは入山許可も下りやすい範囲なのだそうだ。資材や山の幸を調達する場らしい。

そんな山道を小一時間ほど登ったところで、ずっと一本道だった道が二つに分かれた。右は山頂、左は隣県への道、と看板が出ている。

「ここが、最初の結界です」

そう言っただけでブラッドは二股の道の頂点に据えられている、人の背丈ほどもある巨石の裏に回った。

小刀を取り出すと、その刃に親指の指先を押し付ける。そうして出てきた赤い雫を、数滴、巨石に垂らした。

「!!」

すると驚くことに、今までただの石だったものの真ん中に、人が通れるほどの穴が姿を表していた。

しかも、その穴は向こう側が見えない。深淵の闇のように、中は真っ暗だった。

「まずは、ここを通り抜けます。その先にもう一つ、陣があるので  
す」

血を媒介とした、特殊な転移術だ。扉守りの血脈が、唯一で絶対の発動条件。

ブラッドはアルフォンスたちの顔を見回すと、恒久の闇に迷わず身を投げ出した。すると、すぐに姿が見えなくなる。

アルフォンスたちも少し驚きながら、次々に闇へと身を投じていった。

「わ、あ……！」

思わず、アルフォンスは驚きの声をあげた。

闇を、陣を抜けると、辺りは深い深い山の中、緑の世界だった。

そこは原始の森、人の世とは隔絶した場所だ。先ほどの山とは、まるで様子が違っていた。

岩は苔むし、大地は緑の絨毯に覆われている。上を見れば豊かな枝葉が邪魔して、空を見ることが出来ない。

アルフォンスたちの訪れに反応したのか、姿の見えない鳥が一斉に羽ばたき、獣が甲高い威嚇の声を上げた。

「ここはレント山脈の最奥部です。術で道は塞いでいますが、もし先ほどの場所から歩いたら、五日はかかるのか」



「うわぁ……。こんな森、見たことないです……」

ニーナがあんぐりと口をあけたまま、これまた驚嘆の言葉を漏らす。

人が踏みにじることのない、自然の有り様。一行はその圧倒的な力に、すっかり飲まれていた。

（ここ、氣の流れが澄みきってる。それに、すごい緩やかだ……）

湧き出す水のように清く、そよぐ風のように緩やかな氣の流れ。

この森の氣脈は年月が積み重なった分だけ雄大で、少し高めの湿度すら心地良い氣がする。

「扉から獣界の氣が流れ込むために、この様な成長を遂げたのだとか。獣界はさらに生命力にあふれた森が広がっています」

「そうなんですか、だから……。ああ、凄いな。ワクワクしてききました！」

「それは頼もしいお言葉です。さあ、こちらへどうぞ」

ブラッドが指示したのは周囲の樹木の中でも、一際巨大な樹だった。とてつもない幹の太さで、大人が十人手を繋げても、まだ半分にも足りない。

その樹にはこれまた巨大な洞が形成されており、まるで洞窟の入り口のようにぽっかり口を開けていた。

その洞の中へ、ブラッドの先導で入っていく。入り口が低めなので少し身をかがめて入っていくと、中はぼんやりと薄暗かった。

だが、ただの洞なので、ぐるっと見渡せる程度の広さしかない。

ここは先ほどの巨石とは違い、行き止まりのようだった。

「皆様、中に入られましたか？」

「はい、ちゃんと中に入りましたよ」

ブラッドがアルフォンスたちの様子を確認する。八人全員が洞の中に入ったのを確かめて、再び小刀を取り出した。

「では、もうひとつの術を作動させます。少し揺れると思いますが、どうぞご安心を」

そう言つて、ブラッドは指先に傷を付け、地面に数滴の血を垂らした。さらに、洞の壁面にその血を擦りつける。

薄暗くてよく見えなかったが、ブラッドが指をふれた箇所に、何らかの特殊方陣が描かれていたようだ。何か呪文も唱えたらしい。するとリューンたち精霊使いの転移陣と、よく似た感覚がアルフォンスたちを襲った。

次の瞬間、洞の内部は立派な石造りの部屋に変化していた。いや、洞からこの場所に移動したのだ。

部屋に置かれていた松明に、ブラッドが簡単な魔法で火を灯した。すると何らかの術が施してあるのだろ、他の松明も勝手に火が灯つていく。一気に部屋が明るくなった。

「ここが……」

誰からともなく、ため息とともに感嘆の言葉が紡がれる。

一行の目の前には見上げててもまだ果てが見えない、巨大な扉が姿を現していた。

この扉をくぐれば、獣界に行ける。やっと、やっとここまで来たのだ。

八人それぞれ、この先に待つ未知なる世界に異なる思いを抱えながら、同じように扉をじっと見上げていた。

「ここが、我らがお守りする扉でございます。この場所は溶岩が冷えて固まった空洞を利用しており、地底の奥深くに位置しております。外界とは隔絶されており、出入り口はございません」

さらりと、ブラッドが恐ろしい事実をのたまってくれた。こんな立派な空間が地下などとは思いませんかった。

「えっ！　じゃあ空気とか大丈夫なんですか！？」

アルフォンスの疑問は最もだ。密室で火を燃やせば、すぐに酸素が尽きる。そうすれば呼吸が出来なくなり、やがて……。

「ご心配なく。扉守りがこの場所にいるときは、あの洞と同じ状態が保たれます」

ほっ、と安心のため息が誰からともなく漏れた。

空間転移と固定の術は、非常に高度で複雑、そして繊細だ。これだけの広さの空間を、始まりの時から支え続ける術。初代賢者の、もはや人智を越えた神の所業だ。

「そのー、獣界から渡ってこられる方がいる場合は……？」

自分たちの安全が確保されたところで、リユーンがポツリと疑問を口にした。確かに気になる。

「獣界から渡って来られた場合は、直接、あの洞に繋がるようになっています。人界に来られるほどの方なら、その後はご自分の才一つで切り抜けられますよう」

ブラッドは扉の前に立ち、それまでとは打って変わって厳しい声

色で答えた。さらにそのまま、次の言葉を続ける。

「この先は、言葉通り『別世界』。人の常識は通じない場所でございます。……覚悟はよろしいか」

場の空気が、一瞬にして変わった。ブラッドの言葉を言い換えれば、『扉をくぐった先に迎える扉守りはいない』ということ。

全て、自分たちで切り抜けなければならない。そう暗に言っている。アルフォンスは、しっかりとブラッドを見据えて言った。

「行かなきゃ、いけないですら」

その言葉に、ブラッドは小さく頷くと、ゆっくりアルフォンスにその場を譲った。

アルフォンスは、一步、前に出る。興奮して心臓がバクバク音を立てている。

まるで、あの夜みたいだ。あの、剣を抜いた夜。あの時も、こんな風に心臓がうるさいくらいに音を立てていた。

アルフォンスの後ろでは、みんな興奮して、ざわめきながら様々なことをお喋りしたり、扉を見上げたりしていた。

その中でもリネアは、ひと際熱のこもった眼差しで、じっと扉を見つめていた。アルフォンスが扉に手をかけても、他は緊張した様子で扉に近寄って行ったというのに、扉を見つめて、ぼうつとしたまま微動だにしない。

「何やってんだ、行こうぜリネア」

そんな様子を心配したセルグの呼びかけに、リネア夢から覚めたような顔で頷いた。

「あ、ああ……」

リネアが数歩、扉に向かって歩いてくる。その姿を確認したアルフォンスは、しっかりと扉の取っ手を握りしめ、ぐっ、と押した。

だが、全貌が見渡せないほど巨大な扉だというのに、まるで剣を抜いた時のように、ほとんど力を入れる必要はなかった。拍子抜けするくらい簡単に、押した扉はゆっくり開いていく。

わずかにギギイ、と音を軋ませながら、それでもなめらかに扉は開かれる。

扉の先は、光だった。わずかに開いた隙間から覗くものは、光だけ。眩い光に満ち溢れて、扉の奥が見えないほどだ。

アルフォンスが両手で目一杯、扉を押し広げたところで、傾斜でもついているのか、扉は緩やかに、でも確かに独りでに開き始めた。

「では、私がご案内できるのはここまでです。皆様の旅に幸多からんことを。ご健勝をお祈り申し上げます」

扉が開ききる直前、ブラッドは王侯貴族を相手にしているかのように、一層深々と礼をした。そんな姿を見て、アルフォンスも慌てて頭を下げ、礼を返した。

「あの、本当にありがとうございました！ お家でもお世話になったし、こうやって送ってもらったし……。本当に助かりました！」「もったいないお言葉です。我らの御役目ですので、どうぞお気になさいませんよう」

「それでも、です。嬉しかったのは本当ですから。……じゃあ、僕たち、もう行きます。絶対、また挨拶に来ますね！」

これがブラッドとの、いや、人界との別れだ。アルフォンスを筆頭に、一人ずつブラッドに思い思いの挨拶をして、光の中に飛び込

んでいく。

最後に、セルグがぽつんとその場に残った。しばし、父子二人で無言の時間が流れる。

「……さつさで行け、バカ息子」

ブラッドのあきれ返ったような物言いにセルグは一瞬面食らうが、いつも通りの父の態度に、ぱあっ、と一気に笑顔になった。

「ああ、行ってくる！」

行ってきます、ただいま、ありがとう、ごめんなさい。

挨拶は商売の基本だ。かつて、息子にそう叩き込んだ記憶が不意に蘇る。行ってきます、そう言ったからにはただいまを言う。

心配は尽きないが、本人が決めた道だから、どうしても応援してやりたくなる。自分の境遇に不満はないが、息子たちには誰かが敷いた道でなく、自分で道を切り開いて欲しい。

元氣よく駆け出したセルグの姿は、やがて光の中に消えて行つた。途端に石造りの部屋は樹の洞に戻り、生き物の気配がブラッドの五感に満ち溢れる。ブラッドは後ろ髪を引かれる思いで洞から出ると、思わず空を見上げた。

奇跡的に見えた空の切れ端は、何とも見事な蒼をしていた。

## 新世界へ巻

扉の先にあるものを、貴方は知っているだろうか。

夢、希望、絶望、苦悩。未来、過去、理想、妄想。扉の先には、扉の数だけ、何かがある。

いずれにしろ、そこにあるものは、貴方が手にするもの。何だつてあるから、何だつて手に入れられる。扉を開けることさえ、拒まなければ。

## LEGEND OF NEW AGE 〈新時代の伝説〉

光が見えた。強い、強い光が。魂まで焼け焦げてしまいそうな、それでも求めずにいられない、その光。

「……わ」

人間、本当に驚くとともに声が出なくなる。アルフォンスたちはそれを実感していた。

数分前、一行はジープの扉をくぐり、獣界に足を踏み入れた。

扉をくぐったといつても、家の扉のように一歩で向こう側には行けるものではない。一瞬だが何ともいえない不思議な空間、まるで宙に浮くような場所に身を浸し、目が眩むほどの強い光を見つけるのだ。

開いていたはずの目はあまりの眩しさに機能せず、しかし光を認識した途端、強烈な力で引っ張られるようにして、その空間を抜ける。

そうして八人は今、しっかりと見開いた目で、獣界を見渡してい

た。同時に圧倒され、ただ立ち尽くす。

獣界は見渡す限り、壮絶なまでの森が大地を埋め尽くしていた。レント山脈ともまた違う、原始の森だ。あちらの扉付近の森よりもっともつと雄大で壮大な植物たち。気候はそれほど変わらないようだが、木々は見たこともないものばかりだ。植生が根本から異なるだろう。

一行が立っているのは、小高い丘のような場所である。背後には人の背丈の十倍はある、巨大な一枚岩だけが存在する。少し下った場所は、もう森の入口だ。

ここにはジープで見たような扉も、扉守りの姿もない。ブラッドの『迎はない』という言葉を踏まえれば、簡単に往来が出来ないよう、すぐに扉は術で隠されたのだろう。

深い森が延々と広がってはいるが、所々に湖や川が見えるし、霞んでよく見えないが、奥のほうには高い山もある。クレアいわく、ここから右、東の方角に海が広がっているらしい。

「ね、まずは人がいるところに行こうよ。いろいろと話も聞いてみたいし」

「私もそれがいいと思うわ。けれど、大まかな地理はともかく、ここから一番近い集落の場所まではわからないのよ。天界の扉付近なら詳しいのだけれど……」

「それは仕方ありません。水辺なら人の痕跡があるでしょう。食料の調達も必要ですし、まずは行ってみては？」

「それもそうだな。とりあえずあの川辺に行ってみようぜ」

セルグが指差したのは、丘の右下を流れる川だった。もし丘からきちんと道があるなら、二時間もあれば到着するだろう。だが足元に広がる密林は、そんな簡単な行程を許すまい。

「今日の目標は、とにかくあの川に到着、ってとこかな？」



「未知の世界だ。そんなものだろう」

扉をくぐったばかりの驚嘆の表情は消え、いつも通りの淡々とした口調でリネア。その言葉に一行がうなずき、丘を下ろすと森に踏み出した、その時。

「リネア、引けー!!」

「リネア殿!」

「!?!」

突然、リネアの足元に数本の小刀が突き刺さった。咄嗟のことだが流石はリネア、セルグたちの声に素早く反応して事なきを得た。だが、おかしいことが、一つあった。

「な、まさか……っ」

「リネア、どうした!? 反応が鈍いぞ!」

「セルグ殿、その話は後回しに! 次が来ます!」

誰よりも反応が早いセルグとラルフは次の攻撃に備えを取ったが、リネアはまだ事態を察知できていないようだ。呆然と立ち尽くしているリネアに、ローザンが慌てて駆けよる。

「ちょっとリネア、どうしたの!?いつものあんたらしくないじゃない!」

「……だいたい、じょうぶだ。理由は見当が付いている。次はない」

「本当ね? その言葉、信じるわよ!」

「ああ、任せろ。それでも賢者の弟子だ」

自分に言い聞かせるようにリネアは言った。そして、笑う。力強い笑みで。

その表情を見たローザンは、漸く安心することができた。

（理由は何だか知らないけど……。もう大丈夫みたいだわ！）

そこに、次の攻撃が放たれた。先ほどの数倍の数の小刀が、一行の足場を奪うように、的確に突き刺さっていく。

しかし、そのどれもアルフォンスたちに怪我を負わせることはなかった。高度な魔法による、紫紺色の球状結界が、一人ひとりを守護していたからだ。

「……言っただ通り、次はない。もうこんな攻撃は無意味だ。姿を現したらどうだ？」

よける、という選択肢はリネアに必要ない。この程度の攻撃、力によって捻じ伏せれば済むこと。

そのことを理解したのか、襲撃者たちはあっさりと姿を現した。

「あつは。なんだ、思ったよりやるじゃんかお前ら。完璧に不意打ちしたと思っただけだな」

「お前が下手糞なんだろう」

周囲の木々の陰から、数人の青年が顔を出した。わいわいと騒いでいるが、その風貌は人界では滅多に目にすることのない。しかし、この世界ではごく普通の獣族だった。

獣の耳と尾。そして鋭い爪、尖った牙。彼らは獣族の中でも特に好戦的とされる牙獣族だ。身に宿す特殊力はすべての民の中で最少とされるが、その分気力の扱いに長け、身体能力はずば抜けている。リネアの反応が鈍かった理由も、そこにある。牙獣族には魔力も法力もない。そのため察知が遅れたが、すぐに気力での感知に切り替えたため、落ち着いて行動ができたのだ。

「失礼。扉を通ってきた者は、いずれも界王の客人でしょう。なぜこのような仕打ちをなさるのですか？」

一歩、前に進んで発言したのはクレアだった。静かだが、少し語調が強まっている。確実に彼女は怒っていた。

「ん？ そりゃ、身の安全を図るために決まってるだろ。扉の向こうから来るものは、扉守りと界王の血族以外、すべて排除する。それが俺ら牙獣族の決まりなんでね」

「最近決まったことだがな。その責任は人族、お前らにある」

「な、なんで!？」

思いもよらぬ青年たちの言葉に、アルフォンスは驚きの声を上げた。ニーナやセルグたち、人族の面々も一様に驚きを隠せていない。だが、クレアは言葉の意味を理解したのか、わずかに顔をゆがめた。

「なんでも何もねーよ。お前らがクニとかいうのつくって、ずっと争い続けてるから。余計なものを持ち込まれたら迷惑なんだよ。それに、そっちからよくないものが流れてくることが多い」

「よくないもの……？」

「そ。つまりは欲望だよ、人族。お前らの欲望には際限がない。俺らにだって欲望はある。うまいもんが食いたい、強い奴と戦いたい、つてな。でも、お前らは危険だ。このまま受け入れると、世界が壊れちまう」

「だから、排除する。ただ、その銀の髪は、天王の血族の証。その女は通つていい」

「それと、その黒髪の野郎も。お前、レナードの一族だろ。一目でわかる。……さ、どうする？ 殺すと面倒だしな、大人しく帰るなら、帰り道は案内してやる。さ、決めろ」

その青年の言葉とともに、場の空気に緊張感が張り詰めた。不用意な発言をすれば、一気に戦闘になだれ込むかもしれない。やっと獣界にたどり着いたというのに、いきなり問題発生だ。

（ちょっと待つてよ、これじゃ問題なく通れるのは僕を入れて三人  
つてことじゃ……）

もちろん、帰るなんて選択肢は持ち合わせていない。しかし、できるだけ穏便に事を済ませるに越したことはない。界王石を見せれば、自分が血族たる証にはなるだろう。ただ、界王の血族と扉守りは通すというが、禁忌の子のリネアは、一悶着あるはず。  
アルフォンスが必死に考えをめぐらせ始めた、その時。

「客人から手を引け、愚か者どもめ！」  
「！」

牙獣族がいた場所とは別の場所から、牙獣族に向けて一斉に弓矢が放たれた。

「ち、もう来たか！」

矢は数が多いとはいえ、特殊力をまとっていない。威嚇であつて、殺すつもりはないのだろう。ただ、これだけ数が多いと、牙獣族に怪我の一つや二つはさせるつもりのようなのだ。

「ひっこんでろ、意気地なしの草野郎ども！」

「何を言うか、短慮な牙が！ 客人に無礼なふるまいをしてはならぬと、獣王様のお達しを忘れたのか！」

「だから界王の血族には手出ししてねーだろ！ いい加減にしねえ

とぶち殺すぞ!!」

「やれるものなら……!!」

いきなり現れた新たな獣族はアルフォンスたちを挟み、牙獣族と一触即発状態になってしまった。

弓を射かけた獣族は、草獣族だ。耳と尾があるのは共通だが、牙や爪の代わりに牙獣族以上に優れた耳と目を持つ、温和で理知的な獣族だ。しかし、牙獣族とは決定的に仲が悪い。

言い争いの内容を聞く限り、どうやら牙獣族が人界からの通行者に攻撃を仕掛けたのは初めてではないらしい。この扉の扉守りは牙獣族なので一番に察知でき、その動向に気付いた草獣族がすぐに追いかけてきた、というわけだ。

獣族は他に鳥獣族と魚獣族がいるが、魚獣族は海の民であり、陸に上がることはほとんどない。鳥獣族は他の民との関わりを好まないため、気づいていてもこの場に現れないのだろう。

「……おやめなさい!!」

二つの獣族が真正面からぶつかり合おうとした、その時。力強くクレアが一喝した。もう我慢の限界だったのだろっ。珍しく眉が吊り上がっている。

獣族たちも他世界の界王の血族とはいえ、やはり抗うのは抵抗があるらしい。未だに睨み合いを続けてはいたが、いったんはクレアの指示で静まった。

「いい加減になさい! 牙獣族の方々も、もうお分かりでしょう? 私たちは戻るつもりはありませんし、戦う術もあります。草獣族の方々もいらっしゃる。それに……私は界王の血族として、このような事態を見逃すわけにはいきません」

戦えば、こちらの勝利は明らか。それに、獣王に告げ口するもの  
いとわない。

そう遠まわしに言ったクレアに、牙獣族は苦々しげに答えた。

「……っち。まあいい。界王の血族の同行者だ。扉守りの一族もい  
るしな。いいさ、お前らを特別に認めてやる」

「だが、監視をつける必要があるな。お前らは俺たちと一緒に来い」

「何を馬鹿なことを。貴様らなどに客人は任せられん。客人は草獣  
族の住まいに来ていただく」

「ああ？ 相変わらず馬鹿だな草野郎。界王の間に行くなら俺たち  
の住処を通っていくのが最短経路だろうが！」

「ふん、短慮にもほどがある。そこは……」

と、また言い争いが始まりかけたところで、バン！！と鼓膜が  
破れるかと思うほどの大きな破裂音がした。ただし、アルフォンス  
たちには先に結界が張られ、まったく音の影響はなかったのだが。

（え……？）

結界のおかげで拍手ほどの大きさにしか聞こえなかったが、その  
音は聴力に優れた獣族たちに、かなりの被害をもたらしていた。し  
かも音がしたのは、アルフォンスの右斜め後方。クレアがいる場所  
だ。

「……行先は、私たちが決めます。よろしいかしら？」

はい、と言う以外、獣族に何ができただろう。

いつも温和で柔和な微笑みをたたえているクレア。しかし、その  
眼は今、まったく笑っていなかった。

(……！……！！)

怖い。さっき怒っていた時とは比べ物にならないくらい、リユーンが素で術を発動させたときよりも百倍怖い。牙獣族も草獣族も『血族』ではなく『クレア』の雰囲気にもまれ、完全に戦意を喪失していた。

破裂音の正体は、クレアの拍手だった。その音を吟遊詩人の術を使い、何倍にも増幅しただけ。だが、もっと力を籠めれば簡単に鼓膜も破れると言っただから恐ろしい。

獣族の素直な返事に満足したのか、クレアはようやくいつもの笑顔に戻ると、アルフォンスたちに相談を持ちかけてきた。

「さ、どうしましょうか。確かにここから界王の間に行くのには、いろいろと問題があるの」

「え、えーと。いったいどのような……」

「あのね」

クレアが語ったのは、こういうことだ。

牙獣族の住まいは主に山岳地帯。そこを通っていけば確かに最短経路だが、途中で獣界最高峰の山脈がそびえたっている。身体能力が高い牙獣族や、空を飛べる鳥獣族ならともかく、人族が踏破するのは並大抵のことではない。

さらにその山脈付近には、甲殻族が暮らしている。彼らは妖力を持つ少数民族だ。歓迎などされないだろうし、禁忌の子を狙う可能性が高い。

また、草獣族が暮らすのは主に草原地帯。こちらはさして障害がない道のりだが、かなりの大回りを強いられる。しかも、魚獣族が暮らす海を渡らなくてはならない。

「あとは鳥獣族ね。彼らは警戒心が強いから、迎え入れてくれるか

どうか……。居住地は界王の扉付近だから、どちらの道のりでも、必然的に会うことになると思うのだけれど」

「お、俺は海は　！」

「あーはいはい、わかってるから。ちょっと黙ってなさいな」

「ですが、どちらを選んでも、また争いのもとになりそうですね」

「そうですね。さつきから視線がヒシヒシと、こう突き刺さってきて……」

「……いつそ、二手に分かれるのはいかがでしょうか」

「「え？」」

ラルフの提案に、一行は驚きの声を上げた。

この未知の世界、いきなり不安でいっぱいだというのに、そのうえで仲間としばし別れるというのだ。

「確かに、それもいい策だな。集合地点を界王の扉にすればいいし、何かあれば連絡が取れるよう備えておけば問題あるまい」

「いやいやリネア、問題あるでしょ？！　大体、どうやって連絡取るのさ」

「私は意思疎通を行う術は会得している。短時間なら、八人の意思を一度に繋げることも可能だ」

「う……」

「へー、そりやすげえな。それなら大丈夫じゃねえか？　それに両方の状況を見てみるってのもいいよな」

「……それもそうね。単に界王様に会うより、先にこの世界の現状を知っておいたほうがいいわよね」

「え……」

「わ、私もそう思います！　連絡がきちんと取れるなら、心配もないですし」

「では、決まりだな。半々になるとして……。どう分かれる？」



一瞬の、間。二手に分かれて旅をするのはいいとして、その期間  
は一日二日ではない。しかも予測不能な事態が次々と起こりそうな  
予感がビンビンする。この選択はものすごい重要だ。八人全員、さ  
すがに押し黙った。

「とりあえず……。リネアとクレアは別々のほうがいいよね。獣界  
の案内役。僕らまったく知識が無いしさ」

「そうね。あと、ラルフとセルグ、リネアが全員一緒なのも避けた  
ほうがいいんじゃないの？ 危険回避と察知のためにも」

「あちらが認めたということで、セルグとクレアも分かれたほうが  
よろしいのではー？」

「回復術が使えるから、リネアとニーナも別々のほうがいいよな」  
「ならば男女比などを考えると……」

そうして数回の議論と変更を重ね、ついに二つに分かれる構成が  
決定したのだった。

「おい、牙獣族！」

「なんだよ、レナードの」

「俺たちは半分になって、それぞれお前らに同行する。牙獣族につ  
いていく側の代表は俺だ。文句あるか？」

「……ふーん？ で、残りはどいつだ」

「この三人」

くい、とセルグが親指で背後を指し示した。そこにいたのはリネ  
ア、ローザン、リユーンだ。

「へえ、その黒髪の女がくんのか。いいぜ、あれだけ強かったんだ。  
人族だろうと、今回は特別に迎えてやるよ。そっちの二人もおまけ  
でな」

「……ま、よろしく頼むぜ」

リネアが本当は人族ではなく、禁忌の子だと知った時、牙獣族はどんな反応を示すのだろうか。

（こいつらは特殊力の感知なんか出来ないらしいから、大丈夫だと思うが……）

一抹の不安を抱えながら、セルグは牙獣族の青年と握手をしたのだった。

一方、草獣族側にはクレアが代表として挨拶をしていた。

「みなさんとは、私たちが一緒に参ります。どうぞよろしくお願ひしますね」

「ええ、お任せください」

そう言つて草獣族の青年はクレアと握手を交わしたが、ちらりと視線をその横に移したとき、その眼には確かな侮蔑の色が浮かんでいた。ラルフを見たのだ。

（草獣族は霊力が高いから、対の力である妖力の感知もできる……。ラルフ君には辛い思いをさせてしまうわ）

そのことは先ほど、ラルフにもみんなにも説明した。それでも、ラルフはこちらに来说つて譲らなかつたのだ。旅の始まりから挫けていたら、自分の目指すものに到達することなど、到底無理だから、と言つて。

「じゃあ、セルグたち、気を付けてね！」

「そつちもな！」

「ちゃんと定期的に連絡取るから、心配しないで！」

「……やるのは私だが、ローザン」

「まあまあ、リネア。またまた、しばしのお別れなんですよー？」

「もし緊急事態が起きたら、私の音でどうにかして伝えるわね」

「私も精一杯、皆様をお守りいたします」

「あの、私もがんばりますね！」

そうして一行は獣界について間もなく、行先を別にして旅立つのだった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3453g/>

---

Legends of New Age ~ 新時代の伝説たち ~

2011年12月20日20時51分発行